
クロス × ドミナンス

白銀シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス×ドミナンス

【Nコード】

N7919Y

【作者名】

白銀シュウ

【あらすじ】

——『全ての人間の行動や思想は神によって定められたモノである』。

とある次元の狭間からやってきたトンデモ非科学的な神秘的存在であるアイツの台詞だ。神に弄ばれる人形のままで終わりたくないのなら自分と悪魔の契約をして“超能力者”になれなんて言いやがる。だから神に刃向かう存在になって理から逃^{うんめい}れて、本当の幸せを自分で掴むためにアイツ——自称・墮天使のアリエルと契約をすること

になった。超能力者になったことで現われた真実の世界は、俺にどんな出会いを経験させ、どんな戦いをさせて成長させるのだろうか…

超能力モノ。世界を救うとかそういう感じの物語っぽくなりそうな気もする。正義とかヒーローとか全くない残酷な世界に堕ちてしまった人間たちによるアンチヒーロー系近未来SFストーリー。ハーレム要素っていうにはやや微妙ですが、はば広く属性を網羅する予定だったりする。主人公最強モノではないです。

登場人物紹介（最新話終了時点）（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。つまり、この物語はフィクションです。

登場人物紹介（最新話終了時点）

主要登場人物のみの紹介です。

【1・1】 華麗奔放な少女

『 梶村 啓介 - N g a m u r a K e i s u k e - 』

この物語の主人公。

徳島県徳島市に住んでおり、一人暮らしで県内有数の進学校へと通っている高校二年生。

誕生日は二月二十二日で身長174cm・体重51kg。

ダークブラウンの髪色で中肉中背。

自らを“ 性格思考以外は普通な高校生 ” と称しており、学校では常に浮いた存在である。

超能力の能力階級は最高位の『7』であり、世界に24人しか存在しない最上位能力者の一人である。LEVEL 7 序列は第24位。

契約によって手に入れた能力は【現実逃避】。ファンタジスタ

左手で触れた超能力を完全コピーすることが出来る能力。

ただし、相手の能力を知覚していないと発動は不可能かつ触れた回数しか発動できない欠点を持つ。

『 アリエル - A r i e l - 』

この物語のヒロインの一人。

啓介の前に突如現われ、超能力者になる為の契約を迫った神々の超越者イタリと呼ばれる種族の少女。

身長は152cm・体重不明。

水色よりもやや濃いアクアブルーの髪色、翡翠を埋め込んだかの

ような瞳にスラリと伸びた美脚、背丈の合わない女物のカッターシャツの様な肩出しシャツで裸足という人間味に欠けた容姿をしている。

啓介曰く「今世紀十本指は間違いないくらい的美少女」。

啓介に超能力を貸し与えた張本人である。

【1・3】 お互いの想い

『梅村 葵 - N g a m u r a A o i - 』

啓介の妹。

隣の県にある女子中に通っているが、遠いので寮暮らしを送っている。

啓介と同じダークブラウンの髪色を持っており、ショートヘアの髪型である。

顔の形を考えてもバランスが良く、一見軽そうに見える中に重みを感じるような髪形をしている。

大人気の読者モデル程ではないが、中堅どころのモデルくらいに並べそうな感じがする美貌をしている。

兄妹仲は良好。

【2・2】 偶然の再会

『梶 理奈 - K a k o i R i n a - 』

この物語のヒロインの一人。

啓介と子供の頃に別れた幼馴染で、啓介曰く「自分のことを一番理解している他人」。

誕生日は八月十一日で身長は170cm・体重は不明。

胸は啓介曰く「ボインンっていう効果音つきそうなくらいにデカ

い」。

ゴスロリとパンクが入り混じった服と制服を合わせた奇妙な服装をしている。

刺客に襲われ苦戦していた啓介の目の前に現われ、彼を助ける。

超能力の能力階級は最高位の『7』であり、世界に24人しか存在しない最上位能力者の一人である。序列は第17位。

有する能力は「電光刹華」^{デイエサレ}。

電荷や電子を生み出して電気や磁力などを操作する能力であるが、威力や範囲などの詳細はまだ不明。

だが、崩落した橋の瓦礫や車を磁力で引き上げるくらいには強力である。

【1 1】

華麗奔放な少女（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【11】 華麗奔放な少女

「運命ってモノ、アナタは信じてる？」

まるで新興宗教に勧誘する狂信者のような台詞だったが、口ぶりからはそんな雰囲気微塵も受け取ることが出来なかった。

むしろ純粹に、真面目に、哲学を語り合う学者たちのような雰囲気を感じ取られた。

「ありとあらゆる生物が誕生した時から神的存在から与えられている決められた巡り合わせというものがこの世界では“運命”と呼ばれている。つまり言い換えれば、『過去が定まっているならば未来も定められている』ということにもなる」

午後十一時を過ぎた今の時間帯、本来ならば誰一人としていないはずの児童公園で二人の人間が対面していた。

優しさを思わせる風によって夜桜が舞い散るこの公園はブランコと滑り台、鉄棒くらいしかない貧相な公園であったが、近隣の子供たちにとっては数少ない遊び場であり、太陽の昇っている時間帯ならば子供達の喧騒で随分と騒がしい。

しかし、現在は風の音と風によって揺れる木々の音くらいしかない。

「自分が自分で考えて行動したことや考えた思想が最初から神によってそうなるように仕組まれていた、ということになる。例えば、十二歳の誕生日に事故で亡くなる人間がいたと仮定しよう。事故といても不慮の事故だったり信号無視による事故だったりと分かれるだろうが、それは置いておこう。とにかく、死んでしまった人間の周りの人間は嘆き悲しむはずだ。『どうして死んでしまったの』とね」

チカチカと点滅を繰り返す古ぼけた街灯では二人の顔が見えない。空も雲に覆われて月の光も差し込まない。

「…普通ならば事故・不幸・不運だったと考え、そこで思考は停止してしまう。だけど、これが仕組まれたものだったり犯人が故意にした行為——突き飛ばしとか信号無視とかだったりしたら遺された人間は不幸だった、で済ませることなんてできないでしょ？もし、その人間が“十二歳の誕生日に死ぬ運命”を持って生まれてきた人間だなんて神に定められていたとしたら許せないでしょ？」

国道沿いの丘を登った地点にあるこの公園からだと言った街の街灯やネオンによる明かりが結構見えるのだが、二人はそんなものに見向きもしなかった。

話している話題は恋人の会話なんてものには程遠く、雰囲気も真逆のベクトルを突っ走っている。

今まで黙って話を聞いていた片方の人間——ブランコの前で立っていた男性は溜息をつく。

「…ここまで黙って聞いてやってたけど、お前は俺になんて言っただけなの？」

「何でもいいよ。アナタの意見が聞きたいの。アナタは自分の全てが神に掌握されていることをどう思ってるの？」

ブランコを吊るす両鎖を掴み、ブランコの板の上に立つ少女相手は男に回答を求める。

男は考えているのか黙り、何も口に出さない。

「考えてみなよ、テストで百点を取る為にがんばって勉強したとしても神によって定められていなければその努力も無駄、むしろいいように弄ばれた結果だけしか残らない。株で大儲けを企んだとしてもそうなる運命がその人間になれば大損して失敗するだけ。自分の意志なんか最初から無いものじゃない。…意識だけ備え付けられた子供に操られるお人形と同義じゃない」

「…じゃ、俺がモテないってのも、勉強が出来ないってのも、妹に険悪にされてるってのも、全部は最初からそうなるように仕組まれていた、ってことでいいのかよ？」

「そうなるね」

男は黙る。

「まあ、人間の矮小で浅ましいプライドなら『何でも他人のせいにするな』っていう一言で終わるんでしょけど…アナタはどう思うの？」

「そりゃ、運命論が確かなら殴りたいくらいにはムカつくさ」

「…そう。ふふっ、そういう考えの人は嫌いじゃないよ」

少女は微笑む。

少し強い風が雲を動かし、月明かりを下界へと当てる。

満月。古くから特別な存在として恐れられてきた満月の明かりが二人を照らす。

「…で、結局お前は俺に運命云々の話をして、何がしたかったんだ？」

男は月明かりでようやく見えるようになった少女の顔を見て少しだけ視線をずらす。

「…アナタは、価値がある人間ね」

少女は左手の人差し指を口に含んで舐める。

「私は人間を観察するために下界へと降り立った存在。人間がどういう手を使って、どのように運命に足搔くのかにとっても興味があるの」

少女はブランコから降り立つと男のほうへと歩み寄る。

そしてブランコの前にある事故防止用の柵を挟んで二人は再び対面する。

顔を見せた状態で。

「だから、私と契約して超能力者になってくれない？」

だが、男——んがむらけいすけ梅村啓介は目の前の少女の台詞を理解する事が出来なかった。

「…超能力者？」

梅村啓介は目の前の少女の口から放たれた言葉に怪訝な反応を返す。

「そう。超能力者。この世界の今の時代じゃサイキッカーとかって言うのかな？」

人間である以上、どんな染色体異常であろうとも存在しない色であり、普通ならば奇異の目で見られてしまいそうな水色よりもやや濃いアクアブルーとも言うべき色の髪を見て啓介は「綺麗だな」と心で呟く。

マイナスイオンでも放ちそうな印象を抱かせるその髪は、腰まで届くとても長いツインテールであるにも関わらず重量感が全く感じられなかった。

「…超能力なんて前時代的な迷信だな」

「迷信とは失礼な」

少女は少しだけ怒ったかのように頬を膨らませる。

暗闇の中でも翡翠を埋め込んだかのように透き通り輝くその瞳は、同じ様な緑色の瞳を持つ北欧の人々すら見惚れてしまうであろう程の神秘さを啓介に見せつけていた。

きつと、どんな著名な作家やどんなに語彙を暗記している学者であろうともその美貌を見れば、彼女を修飾する事のできる言葉など見つからないことを思い知らされてしまうだろう、と考える程に目の前の美少女は素晴らしかった。

だが、話していることが残念すぎてどうも恋愛対象や性的対象として見れない。

「超能力だろ？冷戦期の米ソや第三次世界大戦期の中国じゃねえんだ。…超能力なんて宇宙人に並んで非科学的すぎる」

「ふーん。…人間君、キミってもしかして“自分の見えている世界だけが全て”だなんて思っただけ？」

「……思つてねえよ。俺は主観で喋ってるんじゃない……」
「キミは超能力を信じてないみたいだけど……他の人間は信じてるかもよ？」

「四十年前にアメリカの国際研究機関が『超能力は存在しない』って結論付けてんだよ。今じゃ懷疑派だのどうこういう以前に話題にすら上らないネタになってんだよ」

啓介は溜息を押し殺して目の前の美少女に答えを突きつける。

少女は溜息をつく。

「……超能力を信じないなんてなあ」

「あのなあ……お前が電波系ゆるゆる不思議少女だってことは十分に理解した。だから、精神科行け」

「失礼なッ!？」

「超能力があるっていう証拠も見せられていないのに超能力を信じるなんて無理言うなよ。俺はそういつた年齢をとくに過ぎてんだ。厨二病ごっこがしたいならもつと年下……じゃなくてお前の場合は……年上か？まあ、とにかく十四歳辺りの人間を誘えよ」

「むう……」

百五十前半くらいの身長にスラリと伸びた美脚、まだ少々肌寒い四月上旬の午後十一時だと言うにも関わらず、彼女は少しだけ背丈の合わない女物のカッターシャツの様な肩出しシャツを着ている。

普通は下にタンクトップやらキャミソールやらを着ると思うのだが、ボタンが外れている胸元を見る限りでは彼女は下には一切何も着けていないらしい。

啓介は「今世紀十本指に入るクラスの美少女なんじゃないだろうか」なんて考えて少女を見つめる。

少女は握り拳をつくった後に左手の人差し指で啓介を指差し、発言した。

「じゃ、今から超能力を見せてあげる!!」

「……はあ？」

啓介は聞き返す。

しかし少女は啓介を通り抜けると公園の真ん中へと歩いていく。数分前まで小雨が降っていたこともあり、地面は泥でややぬかるんでいるというのに泥が全く付着していない裸足、赤と黒の短いチエックスカート、腰のベルトに纏わり着いている沢山のチエーン。一度見たら二度と忘れることがない程のインパクトを啓介に見せつけてくれた少女の一言によるこの後の行動は、啓介にとって不運だったのか幸運であったのかは、恐らく永遠にわからないだろう。「私の名前はアリエル。風を操る精霊から名前を取っていることもあって、一応【風】の属性を持った墮天使として神々の超越者の中ではまあまあ名前が知れ渡っているけど」

ゴット・イーター
「神々の超越者…？」

聞いたことも無い単語を耳にした啓介は少女——アリエルに尋ね返す。

「次元と次元の狭間に住み着いている神とも天使とも悪魔とも宇宙人とも何とも言い切れない不安定で曖昧な存在。人類に超能力を与え、文明の発展を影から見守ってきた存在。それが私達」
ゴット・イーター
思い切り厨二病設定を晒してくれた。

「つまり、オーバーロード的存在ってことでいいのか？」

「まあそうなるね」

「だったら目的は何だったんだ？」

仕方ないので厨二病に付き合ってやることにする。

啓介自身、中学生時代は“厨二病なんてアホらしい”と考えていたこともあり、厨二病を発症しなかったのでちよつとやってみたい気分にもなっていた。

「完全なる善意か？侵略的意図か？実験か？偶然か？それとも、お前達よりももっと上の存在からの命令か？」

啓介はたずねてみる。

「私達は全員が同じ考えをもって行動しているわけじゃないの。だから善意で干渉した者もいれば、実験が理由で干渉した者もいる」
「お前はどつなんだ？」

「さあ？」

アリエルは啓介の問い詰めをサラッとかわす。
まるで言外に“聞くな”と言っているようだった。

アリエルは深呼吸をすると啓介に忠告する。

「あ、そうそう。何か物にしがみついていた方がいいよ。下手すると飛行機とかが飛んでるレベルの高度まで打ち上げられちゃうから」

「……はいはい」

啓介は近くにあったブランコの事故防止用の柵に右手を置く。

それを見たアリエルはもう一度だけ深呼吸をした。

「じゃ、久しぶりに行使しますか」

アリエルがパチンと指を鳴らした瞬間だった。

戦闘機から発せられるような爆音がほぼ同時に四方八方から発生したかのような音が啓介の耳に響く。

台風の風速よりも強烈な風が発生し、周辺にあったありとあらゆるものが風に巻き上げられて吹き飛ぶ。

公園の木々は全てが根元から押し折れて桜や葉は一瞬で消え去り、アリエルのそばに立っていた電灯もガコンと変な音をたてながらひしゃげて捻じ切ったかのように折れてしまう。

近くの住宅街や建物の窓ガラスが粉々に砕け散り、住宅の壁に亀裂を刻み、駐車していた車を凹ませ、吹き飛ばす。

ほぼ一瞬。

パチンとアリエルが指を鳴らした瞬間だけでこの被害。

「……………」

啓介は地面に座った状態で目を見開いていた。

瞬間的に柵を掴んだことにより、命は助かっていた。

アリエルがこちらに被害が及ばないように調節したのもあったの
だろうが……

「ね、どう？信じる気になった？」

アリエルは微笑みながら啓介の顔を覗き込む。

啓介は呆然とした顔をしていた。

目の前の光景に頭の処理が追いついていないのだろう。

しばらくアリエルが啓介の目の前で左手を振りながら「おい？
見えてる？」なんて話しかけること数十秒。

「……な、なん、だよ、今の」

やっとひり出した声は随分と小さかった。

心の奥底から恐怖心がわきあがってくる。

目の前の存在は、ホンモノのバケモノだ。

啓介は今にでも逃げ出したかったが、腰が抜けてしまっていたのが立てない。

「今が私の超能力かな。まあ、まだまだ使えるんだけどね」

「……か、風？」

「うん。私は【風】の属性を持つからね。空気や風に関する超能力の行使は得意なほうかな。逆に地や火に関連したものは苦手かも」
アリエルはスラスラと聞いてもいないのに答えてくれる。

啓介はその姿を見て“コイツに敵意はない”と本能が判断したのが恐怖心が薄れていく。

「これで、超能力が存在するってコトと、私が普通じゃないってコトはわかってくれたかな？」

「……ああ、嫌というほどわかったよ」

啓介は立ち上がる。

するとアリエルは微笑む。

「それじゃ、私と契約して超能力者になってくれない？」

アリエルは啓介に手を差し出す。

「……断る」

だが、啓介は拒絶の言葉を口にする。

アリエルは目を大きく開く。

「な、なんで！？今の所って普通は契約するものじゃないの？雰囲気読んでよ！？」

「いや、だって……超能力なんてモンを見たら逆に得体が知れなさ過ぎてちよっと怖くなってきた」

「えええ！？ちょ、超能力が手に入ったら一気に変わるんだよ！
？昨日までの自分とおさらばして新しい自分ヨロシクできるんだよ
！？」

「いや、俺別に今の自分のままでいいって思ってるし。何よりも、
超能力者なんぞになってもし政府みたいな国家機関にばれてみる。
…人体解剖とか怖いっての」

「ヒーローになれるかもしれないんだよ！？」

「いや、拳銃とかナイフとか怖くてムリ。人を殺したり倒したりす
るのも抵抗あるし」

「えええええ！？」

アリエルが不満の声をあげる。

それに遅れて遠くからサイレンの音と人の声が聞こえる。

「…警察かよ！？」

啓介はハッとして辺りを見回す。

さきほどの暴風は間違いなく丘の下の方のほうからでも観測でき
たに違いない。

下手すれば被害が出ているかもしれない。

「やばい…」

この周辺の住宅に住む住人達の声も聞こえてきている。

先程の暴風による被害の確認だろう。

「（被害総額数百万は堅いぞ！？こんな所…見つかったら死ぬるッ
！！！）」

啓介はアリエルの手を掴むと公園から飛び出す。

「え？え、ええええ！？」

アリエルはいきなり差し出していた方の手を掴まれる。

「も、もしかして契約する気に！？」

「なるかボケエエエッ！！」

啓介は人目のつかないルートを走る。

先程の暴風でこの一体の街灯は全てが機能停止しており、真っ暗
になっている。

「（真っ暗でよかった）」

「ど、どこに連れて行くの!？」

アリエルの声を無視して啓介は走る。

あのまま、アリエルを放って置けば間違いなく警察に捕まりペラペラと真相を喋ってしまうだろう。

名前を明かしていないものの、そこから啓介に繋がる可能性なんてゼロではない。

「（ヤバイヤバイ。どれくらいヤバイかっていうとマジヤバイ!）」

啓介は公園から西のほうへと走っていく。

行き先は、自宅だ。

梅村啓介の自宅はこれといって特徴の無い一軒家だ。

ホームドラマとかでよく見ることがある二階建ての普通の家だ。

「ただいまー」

啓介は玄関の扉のカギを開錠すると真っ暗な自宅へと入っていく。

「お、おじゃましてーす」

それに続くようにアリエルも遠慮がちに入っていく。

啓介がすぐそばの壁についているスイッチを押して玄関の灯りをつけ、黒色の運動靴を脱ぐ。

アリエルは裸足なのでそのまま上がる。

「（よくよく考えれば、裸足なのに汚れていないってのも不思議だよな）」

泥や砂が全くついていないアリエルの足をチラリと一瞥すると啓介は廊下を歩いてリビングへと向かう。

扉を開けてリビングへ入った啓介は先程と同じように壁のスイッチで電気をつける。

「あー…お前はソファにでも座っててくれ」

後ろについてきたアリエルにソファの位置を指差しながら啓介は台所へと消える。

アリエルはキョロキョロとリビングを物珍しそうに見回しながらソファへと座り込む。

ちょーんという効果音でもつきそうなくらいに縮こまっている。

「…何でそんなに緊張してるわけ？」

「いやー…男の人間に連れ込まれるなんて初めてなもので」

「連れ込まれる……」

何やら妙に犯罪臭のする言い方に啓介は凹みつつ、考えれば無理矢理自分が連れてきたんだったと今更気付いた。

「あー…連れ込んだって…何ていうか、その、お前をあそこに置いていたら俺の未来が真っ暗になりそうだったもんだから……」

「この状況も他の人間に見つかればお先真っ暗になるんじゃないの？」

「……ソウデスネ」

啓介は色々と感情を込めた溜息を吐くと左手に持っていた林檎ジュースをアリエルの前にあるガラスの埋め込まれた木製のテーブルの上に置く。

「とりあえず飲み物でも飲め」

啓介はそう言ってアリエルの座っているソファの斜め隣にある別のソファにドカッと座り込む。

「い、いただいきまーす……でいいのかな？」

アリエルは両手で缶を持ち上げる。

「…今更だけど、お前って人間じゃないくせに飲み物飲めるんだな」「飲めるよ」

「何だよ…そういうところは人間と同じなのかよ」

「そうだねー。人間界の時間単位で言う一年くらいは何も食べなく

でも生きていけるけど、私達の中には食事を娯楽の一種だと考えているヤツもいるから同じといえば同じかもね」

「…どんなモン食ってるんだ？」

これは単なる知的好奇心である。

人間界を覗くのが趣味だとアリエルは先程言っていたのでもしかしたら同じようなものを食べているかもしれないと啓介は思ったのだ。

「地獄猫とか…地獄鴉とか調理して食ってるヤツは見たことあるよ。他は…氷結蛙とか血魚とか食ってるヤツもたまにいた」

「…お前は？」

なんとというネーミングの動物なんだと啓介は吐き気を催しながら思った。

人間が食べたら死にそうな感じがする。

「私は…果物とかばかり食べてたかな？肉類は…600年前に食べたのが最後かもしれない」

果物だけで生きていける辺り、体内器官も人間と全く違うのかもしれない。

啓介は短い溜息をつく。

「あーその話はストップな。…気分が悪くなる。…とにかく持ったままじゃなくて早く飲めよ」

脱水症状なんてあるかどうか知らないけどなったら困るし、と言葉を付け足す。

しかしアリエルは微動だにしなかった。

不審に思った啓介はアリエルに尋ねる。

「どうした、なんで飲まないんだ？」

まさか林檎が苦手なのか？そういやアダムとかイヴとかの創世記に出てきた知恵の果実って林檎だったような気が…いやでもあれは後から付け足されたイメージであって…もしかして墮天使にとって林檎は毒なのか？と、そこまで啓介が考えた辺りでアリエルが口を開く。

「開け方わかんない」

空気が停止した、気がした。

「…はい？」

「開け方わかんない」

「いやいやいや、いくらなんでもそれはないわー」

人間界を観察していたのならそれくらいはわかるだろ、と啓介はツツコミたくなる。

しかし、アリエルの困った表情を見るとこれはボケではないということがよくわかる。

「…もしかして、本当にわかんないのかよ？」

「本当だよ。私に人間の物の使い方なんてわかるもんか」

「マジかよ…」

啓介は自身の缶ジュースをアリエルに見せる。

「いいか？…缶ジュースの上面についている引き金みてーな…なんていうか、アラビア数字の「8」みたいなモノがあるだろ？あ、わからないと言わせねーぞ。…その穴の部分…ああ、そっちじゃなくてもう一つの穴のほう。…そう。…まあ、その穴に人差し指を入れて引つ張ればいい」

なんて面倒なんだろうかと啓介は感想を抱く。

ここまで常識を知らなさ過ぎると扱いに困ると啓介は思った。

とんでもないド変態ならばこんな純情（？）少女にアレコレとトンデモない間違った知識を与えようとするかもしれないが、梅村啓介はそこまで腐り果てた人間ではないのでそんなことはしない…と思う。

「おお、人間の考えるものは面倒だなあ」

見た目だけなら百点満点どころかオーバーして二百点くらいの美少女なのになあ…と啓介は思う。

「バカヤロー、郷に入りては郷に従えだ。人間世界に来たのなら人

間の常識に則ってもらうからな」

「りょーかいー」

アリエルは両手で缶ジュースを持って飲みだす。

啓介もジュースを少しだけ飲む。

「（綺麗な色した髪の毛だよな……。髪質も見たただけだからよくわからんが、サラサラそうだし）」

表現しにくい色をした髪だと啓介は思う。

無理矢理表現するなら夏の晴天の昼間かつ水蒸気や砂埃などのない綺麗な大気の状態である空の色を少し薄くしたような色だ。

「（自分で表現しておいてなんだが……よくわからないな）」

「ねえ、人間君」

アリエルは缶ジュースに注いでいた視線を啓介へと向けると口を開いた。

「俺の名前は、梅村啓介だ。人間って呼ぶな」

間違いではないがムカツく、と啓介は呟く。

「ああ、ゴメンゴメン。……じゃ、啓介」

「フランクだな」

「アレ、名字で呼んだ方がいい？」

「いや……好きにしてくれ」

啓介は少し戸惑っていた。

自分を下の名前で呼んでくれる異性など今までの人生の中でも一人しかいなかったたので耐性が低かったのだ。

現在では異性どころか同性からも名前（名字含）を呼ばれることはなくなっている。

「（そーいやアイツ元気にしてるかねえ）」

数年前に引越してしまった自分を名前で呼んでくれた存在のことを啓介はチラリとだけ思い出す。

しかし懐古はすぐに目の前の少女に打ち切られる。

「どうして、啓介は私との契約を拒否するの？」

「んあ？………契約？」

「公園で持ちかけたじゃん。契約して超能力者にならないかって」

「アレか…。マジだったんだ」

「信じてなかったの!？」

酷い!とでも叫びそうなアリエルを見ながら啓介は言葉を選んで話す。

「あのなあ…確かに超能力の存在は信じたし、お前が人間じゃないって言うのも十分に理解させてもらった。けどな、何で俺が超能力者にならないといけないんだ？」

「……」

「あと、お前らの真意が計り知れないから怖い」

確かに超能力は魅力的だ。

世界では既に否定された存在でありながら、目の前に存在しているソレ。

しかし、デメリットがメリットを上回ってしまうと啓介は考えていた。

「俺が、超能力を得てヒーローみたいに善人を助けて悪を挫く様な人間だったのなら俺は受けたかもしれない。けどな、俺はそこまで周りのことを考えられないんだよ」

常に自分のことで一杯一杯であるのに他人を守るヒーローなんて存在が務まるとは思えないと啓介は思っている。

「超能力を得たら間違いなく待つのは世間の奇異の目。俺一人が奇異の目で見られるっていうのならまだ良さ。でも、俺の家族も巻き込まれるのなら俺は契約を受けない」

人間は自分達と違うものを排除しようとする。

度が過ぎれば自分だけでなく無関係な家族にまで被害が及ぶこととなってしまうのだ。

「啓介って家族居るの?この家、私達以外に誰の気配もしないんだけど」

「この家には俺だけで住んでる。母さんは妹を産んだ時に力尽きて亡くなった。父さんも同じ日に別の場所で事故死…。兄貴や姉さん

は大学卒業後にどっかで働いて俺に仕送りしてくれてる。妹は隣の県にある私立の中学に通ってて寮暮らしだからいない。祖父母は俺が生まれたときにはもう亡くなっていたらしいし、知らない」

「ほぼ孤独じゃん。関係ないと思うんだけど」

「俺の名字は超レアなものなんだよ。わかるだろ？…これが佐藤や鈴木なら話は別だったかもな」

啓介はジュースを飲んで喉を湿らせる。

「それに、俺が超能力を得たら間違はなく私利私欲に使うと思うね」
「……」

「お前が俺に超能力を渡して何をさせたいのかは知らないけど――」

「私は人間観察が趣味って言ったでしょ？だから……くだらない運命通りに生きる普通の人間に超能力って言う特異なモノを与えたらどうなるのか、そしてどうやって運命を切り開くのが見てみたい」

「お前のワガママの押し付けじゃねえか」

遠回しに啓介の定められた運命は“失敗続きの人生”であると伝えられたようなものだ。

ちなみに啓介は自分のことを“性格・思考以外はきつと普通でありたい高校生”だと自称している。

「そうなるね。でも、人間だって超能力を得る事が出来れば、世界が変わるじゃない？」

「まあ…そうだな」

「でしょ？だったら……」

「でもムリ」

「なんで!？」

「……俺には俺の考えがある。人間観察したいのなら俺以外の人間に声をかければ良いじゃないか」

「……できないよ」

「何でだよ」

急に落ち込むアリエルに啓介は言いすぎたかなと少しだけ反省した。

「……………言えない」

「なんで？」

アリエルは悲しそうな笑みを浮かべる。

「啓介、貴方って優しい人だね」

「は？」

優しい、と異性に言われるのは初めてだった。

「だって、さつき自分なら超能力を私利私欲のために使うから要らないって言ったでしょ？」

「まあな」

「……………だったら言えるわけ無いよ」

「……………」

啓介は溜息をつくともソファから立ち上がる。

「アリエル、お前にどんな理由があって俺に契約を持ちかけているのかは…知らない。教えてくれないみたいだし。でもな、俺の考えを変えて俺に契約させたっていうのなら全部話してくれないとムリだと思うぞ」

「……………」

「…ところで、お前ってこれから何処かに行く宛あるの？」

「え…な、ないけど」

「あつそう。じゃ、好きにすれば」

啓介はいつの間にか飲み干した缶ジュースをゴミ箱に捨てるとリビングから出て行くこうとする。

「…啓介」

「あんだよ」

「ありがとう」

「…まあ、お前の気が済むまで自由にすればいいんじゃないの？」
アリエルも立ち上がると啓介の元へと歩み寄り、共にリビングから出て行った。

リビングに残ったものは彼女の飲みかけの缶ジュースだけだった。

【1.1】 華麗奔放な少女（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。

物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと思います。

【1、2】

神々の超越者（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【1.2】 神々の超越者

四月八日。

俺の住む国、日本国では卯月とも呼ばれているらしく、新年度や新学期の時期なので全国の学校や会社などでは入学式や入社式が行われる事は有名だ。

その八番目の日、つまり世間で言う灌仏会の日、俺はアニメにおける第一話の最初のカットにでも出てきそうな程によく晴れた空を見ながら今日から始まる学校へと歩みを進めていた。

これで桜でも舞っていれば文句ナシ百点満点の入学式日和なのだろうが、生憎な事にこの街の桜は昨晚の強風によってほとんど散ってしまい、今はもう三分葉桜にしか見えない。

あと、俺は高校二年生なので入学式がどうなるうとも関係ない。

だから桜なんてどうでもいい。

「高校二年生ねえ。よくもまあ留年しませんでしたってな」

そう、俺は日本のとある地方都市に住む只のしがな高校二年生だ。

県内でも有数の進学校に在校しているが、俺の住む県は他県と比べて学力が低いので全国平均レベルとなっているのが実情だ。

つまり、大して勉強ができるわけでもなければ、運動神経が良い訳でもない。

絵心だとか音楽性だとかそういうった芸術センスもない。

結論、只の高校生ってことだ。

大事な事だから二回言っておく。

「…眩しいな」

いつもより少々激しめの自己出張する太陽をチラリとだけ見ると俺は歩き出す。

学校なんて友達も居ないし、行っても意味が無い…のだが、将来のためにも行かなくてはならない。

時代がどれだけ進もうとも学歴社会だけは絶滅しなかったこともあり、この二〇三〇年でも高卒の採用率なんていうまでもない。

だが…

「…はあ。学校に行くのも…帰るのも嫌だなあ」

昨日の夜の件について考える時間が欲しかったのも理由だった。

「啓介、啓介ってさ…なんで自分のことを普通の高校生って言うの？」

「…さあな」

啓介は手元の携帯電話をチラリと見る。

時間は午前八時ちょうど。

学校に着くには少々早すぎたので教室には誰一人いないかもしれないが、彼としては一人で考える場所が欲しかったのでむしろラッキーだったかもしれない。

啓介は昇降口へ入ると自分の靴を履き替える。

「（よくよく考えれば、俺ってとんでもない体験をしてしまったん

じゃないのか？」

昨日のあのアリエルと名乗った少女。

人間離れた容姿や奇抜な服装、世間知らずという観点から見ると間違いなく“人間外の何か”にカテゴライズされなくもない雰囲気を用意していた。

「（超能力。アイツがいうには“因果律に反する本来持つてはいけないモノ”らしいが……。なんでアイツはそれを俺なんかに与えようとしたんだ？）」

啓介は考える。

梅村啓介は、この二〇三〇年を生きる只の何処までも普通で普遍的で凡人なスキルしか持たない一般人であり、決して前世が大魔王だとか実は王族の隠された継承者だとか忍者の末裔だとかそんな特殊な設定は一切無い。

両親が物心つく前に他界してしまったこともあるが、自分や兄妹にそんな隠された設定は無いはずだと啓介は考えている。

だから、テロリストが学校に押し入ってきて粹がった不良が見せしめに殺されたとしても、自分の片想いの女性（そんな人はいないが）が人質にされたとしても、親友が実は射撃能力抜群だとしても（親友なんていないが）、啓介はテロリスト相手に覚醒して戦えるような器を持った人間ではないのだ。

むしろ教室の隅でガタガタ震えているモブキャラの一人だろう。

「（アイツが言うには、俺の運命は“悲惨”らしいが……。それに憐れみを感じて超能力を与えようとした、ってわけでもなさそうだしな）」

未来の自分がどんな悲惨な目にあっているのかはともかく、現在の自分はわりとマシな方だ。

学校には通えているし、食べ物に困ったことも無い。

「（同情で能力与えるなら今頃人類の半数近くが超能力者になってるっつーの）」

恐らく同情だとか憐れみだとかそんなものではないもつと別の“

何か”が、アリエルを引きつけたのかもしれない。

だが、その“何か”がわからない。

「（…わかんねえな）」

啓介は階段を昇り終わると自分の在籍する教室【1・7】に入る。始業式が終了した後、新しいクラスを教えられてその教室へと変わるのだ。

この教室も今日で最後だ。

「（考えろ。考えるんだ。アイツが何故俺に目をつけたのかを…）」

啓介は自分の席である窓際の最後尾に座ると手を顔の前で組んで考え始める。

「（アイツの思惑が理解できない限り、どうやって行動すればいいのか…）」

「啓介は何で普通でありたいの？ 奇異の目で見られることには慣れているって言うってたのにどうして異端を拒絶するの？」

「言っただろ？ 家族のためだって」

啓介は教室に飾られた時計をチラリと見る。

時刻は午前八時三十分。

クラスメイトも全員がそろい、仲良く喋っている。

「（…アホくさいな）」

啓介からしてみれば、友達の何処がいいのかわからないのだ。

一人でも出来ることをどうして複数名でやるうとするのか、何故群れるのか。

昔、小学校低学年のときに啓介の担任は「人という漢字は二人の人間が互いに支えあっているものであり、人間は一人では生きていけない」なんて言っていたが、啓介からすれば「人っていう漢字は一人の人間が足を広げて作る」なんて言っただけでやりたい気分であった。

「（別に“無口キャラ”気取っていたわけでも“厨二病キャラ”気取っていたわけでもないんだけどな）」

とにかく人間はよく群れていた。

群れた人間は孤独な人間を見て哀れんだり、蔑むようになる。

そのルールは啓介に対しても適用されていた。

だから修学旅行にも文化祭にも体育祭にも啓介は全く参加しなかった。

「（まあ、そんなアホなことはどうでもいい。今はアイツのことだ）」

啓介にとって現在最も重要な議題は昨日出会ってしまった少女のことである。

あの後、変な成り行きで自宅に泊めてしまったこともあるが、アリエルは今頃啓介の部屋で情眠を貪っているだろう。

本人曰く「行くアテも帰るアテも無い」らしいのでしばらくは泊めてやるつもりだが…

一つだけ恐ろしいことがある。

「（兄貴か姉さんか…妹か）」

兄妹の存在だ。

啓介の兄なんて連絡は一ヶ月に一度はよこしてくれるものの何処

にいるかなんて全くわからない。

仕送りをしてくれているところを見る限りでは働いているみたいだが。

「（兄貴は問題ない）」

啓介の姉もどこで何をしているのかわからないが連絡は取り合っているし、たまに帰ってくる。

三月に帰ってきた際に「半年アメリカに行つて来る」なんてことを言っていたので多分大丈夫なはずだ。

「（姉さんも大丈夫）」

最後に妹だが、一番厄介である。

今年から中学二年生になった彼の妹は隣の県にある女子限定の学園に在籍しており、去年から近くの寮で生活している。

だが週末には必ず戻ってきて土日は自宅で過ごしている。

本人曰く「寮じゃ後輩や同級生が五月蠅い」らしいが、照れ隠しか本心かは啓介にはわからない。

「（問題は妹だアアーッ！！）」

今日は四月八日。

月曜日ではあるが、妹の在籍する学園での始業式は四月十一日である。

啓介の妹は一昨日の電話で「部活の合宿からやつと帰ってきた」なんて言っていたので間違いなく帰ってくると啓介は予想している。

「（鉢合わせになつて修羅場とかマジ勘弁願いたい……）」

啓介の妹は何故か自分と友好的な女性を嫌う傾向にある。

昔は「もしかしてお兄ちゃんを奪われるかもしれないという嫉妬じゃね？」なんて考えて自分で気持ち悪すぎて鬱になった記憶があるが、本当の理由はわからないままである。

「（まあ、女性の友達なんて後にも先にもアイツ一人なんだろうけどな）」

啓介は数年前に別れた（恋愛関係的な意味ではない）幼馴染のことをチラッとだけ思い出した。

辺りを見回すと既に教室に担任が入ってきて何やら連絡を話していたが、啓介は聞いていなかった。

「（ああああー…胃が痛い）」

妹がアリエルにどんな反応を示すのかが不安で仕方なかった。

「…嘘だよ。それはただの言い訳にしか過ぎない。…啓介は異端になりたいんじゃないの？」

「何でそういう考えになる？」

梅村啓介は考える。

堕天使アリエルについて。

「（種族は神々の超越者^{ゴッド・イーター}。…まあ、神に反抗する存在だって言うてたから悪魔や堕天使でも間違いは無いんだろうが…）」

自分の目の前に突如現われた少女の姿をした化け物。

そして自分を人外^{ヒトガタ}の存在にしようとする存在。

「（どうしてアイツは俺との契約だけに固執しているんだ？神との最終戦争のための手駒集め？それだったら俺以外でも全く問題は無いハズ）」

啓介は教室に目もくれない。

自分の世界に閉じこもって考えた。

「（俺が実は超能力の素質があるとかってか？…あり得ない。自分で言うのもアレだが、あり得ない）」

啓介が普通の高校生だから、とかいう訳ではない。

「（超能力は神の運命に反して得るモノ。その素質があるとすれば、全人類にある事になる）」

啓介は超能力やアリエルについて考えるが、世界中の学者が集まっても解決できないようなこの問題を啓介が解けるわけも無く、時間は無常に過ぎていった。

「普通を自称することは逆に異端に憧れているということだよ。自分分は異端になりたい。だけど異端になれない。それは啓介を傷つけた。だから啓介は二度とそんな思いをしたくないために普通を自称して異端から遠ざかるうとしたんじゃないの？」

「…とんだ暴論だ」

「当たってるんじゃないの？」

「知るか」

始業式が終わり、クラス替えを済ませた啓介は新しい教室の新しい座席に座っていた。

二年四組へと配属され、四十人の生徒で埋め尽くされた教室の廊下側の席の最後尾で啓介は溜息をつく。

男二十人、女二十人とぴったり半分で分けられたクラスであり、席は男女混合の出席番号順となっている。

頭文字が「ン」から始まるというとてもなくレアな名字を持つ啓介よりも後ろの名字を持つものなど当然の如く存在しないので彼が出席番号四十番だ。

去年…というか小学校のときからずっと最後尾であった啓介からすれば今更なのでなんの感情もそこには見出せないのだが。

「—というわけで、今日から一年間よろしくな」

教卓の前に立って挨拶をしている男性教師の挨拶を啓介は真面目に聞かなかった。

社会教師だったような気もするがそんなことでもいい。

啓介は新しいクラスメイトを眺める。

七人くらい前回のクラスメイトだった人間がいるが、どうせ交友関係もなかったのだし話しかけてくることも無いだろう。

担任の教師も挨拶を終えると次に明日の連絡などについて話し始める。

「…明日からまた憂鬱な日々の始まりか」

帰宅してから待っているであろう修羅場のことも考えると更に憂鬱になる。

HRも終了し、終業となる。

クラスメイト達は早くも友人を作り出したり、担任に話しかけたりしている。

啓介は目もくれずに教室を出る。

廊下で「何処のクラス？」なんて騒ぐ同級生たちの間を通り抜けて昇降口へと向かう。

行き先は言うまでも無く自宅。

「…やれやれ」

啓介にとって友達は必要ないのだ。

啓介にとって日常を重んじる気は無いのだ。

自分のことで精一杯なのだから。

「第一、なんで俺を選んだんだよ」

「違うよ。…私が啓介を選んだんじゃなくて、啓介が私を呼んだんだよ」

「……………はあ？」

「私達が人間界へと降臨することは簡単なことじゃないんだよ？…」

啓介は自分の運命を呪ったんじゃないの？心の底から本気で」

「…心の底から本気で神を憎んだヤツの前にお前らのうちの誰かが現われるって寸法か？」

「……………そうなるね」

「おかえりーっ」

「…なんでお前は人の家で堂々とくつろいでんだよ」

「いやあー人間の常識なんて知らないよ。私、人間じゃないし」

アリエルは居間でテレビを見ていた。

壁に貼り付けられているスクリーンテレビだ。

「それにしても、人間ってのは不思議な生物だね。どうして同じ形^{シケン}をした生き物同士で殺しあうんだか」

アリエルが見ているのは国营放送のニュースだった。

二十四時間ありとあらゆるカテゴリーのニュースを放送しているチャンネルであるが、啓介は大抵の情報をネットで仕入れるので滅多に見る機会がなかった。

「…お前達は、神々の超越者^{ゴッド・イーター}は同族で殺しあったりしないのか？」

「うーん…支配者が同じ場合——私の場合はサタン様っていうお方なんだけど、まあ支配者が同じお方だった場合は殺し合いなんてしないねえ」

「支配者が違えば、殺しあうのか？」

「私は平和主義者だし、殺し合いなんて数万年生きてきたけど…ほとんどしなかったよ。まあ、好戦的なヤツもいるみたいだし、そういう面じゃ人間と同じかもしれないね」

答えになっていないような気がするが、啓介は深追いしなかった。はぐらかされたのならどうせ追求しても無駄なのだ。

啓介は制服のブレザーを脱ぐとソファに放り、ネクタイも緩めると台所へと向かう。

テレビをチラリと見ると、そこには桜が満開というニュースが映っていた。

アリエルは桜よりも花見をしている人達の食べ物に注目している…気がする。

「お前、そういうイベントとか経験ないの？」

「私達にイベントなんていう風習はあまりなかったからね。…人間の界のイベントのほとんどって神様関係じゃん？」

「…なるほど」

「それに、私達の住む失樂園は環境の変化なんてないし」

「失樂園……」

初めて聞いたアリエルの本来の住処。

啓介は興味深そうな声を出した。

「次元と次元の狭間にある世界……とでも思ってくれたらいいよ。人間の言語じゃ説明がつかないような場所にある世界だから」

アリエルは故郷の話をする。

「説明がつかない……ねえ」

「当てはまる言葉が人間の言語に存在しないの。……全く、人間の言葉って不便だね」

「普通に使ってるじゃねえか」

啓介は突っ込む。

アリエルは日本人の自分と普通に会話できていないか、と。言つとくけど、私達の使う言語はこの世界じゃ使えないの。なんていうのかな……使おうとしてもこの世界とは別の存在から成り立つ言語だから発音できない……って感じ？」

「……ふーん」

「私が人間の言語を話す事ができるのは能力のお陰だよ」

「……アレ、能力って普通は一人一つじゃないの？」

アリエルは出会いの時、風的能力を使っていたはずだと啓介は思出す。

「人間はね。……私達は一人辺り数万や数百万、数億の超能力を身体に宿しているの」

「…………スケールがデカいなあ」

「その中の一つに言語を自動翻訳するような力があるというわけ」

「漫画風に言うならご都合主義展開だな」

「？」

「いや、何でもない」

啓介は冷蔵庫からお茶の缶を二つ取り出すと居間へと戻る。

「ほい。……お前、朝から何も飲み食いして無いだろ？だから飲んでる」

啓介はアリエルに缶を手渡す。

啓介はアリエルの隣（といっても間隔は開いているが）に座り、テレビを見ながら飲みだす。

アリエルは両手で缶ジュースを持って飲みだす。

「（…そっぴや、俺がマトモに他人に接するなんて久々だな）」

妹のような兄妹を除けば啓介が今までにマトモにコミュニケーションを取ってきた人間はアリエルを含めて二人になる（アリエルを『人』として数えていいのかはともかくとして）。

「（…そっぴや、昨日の件だってそっぴやだな。普段の俺なら知的障碍者に認定して大人しく去ってたはずだ）」

何が、自身を惹きつけたのだらうか。

啓介は横目でアリエルを眺めた。

「（…なんだってんだ？アイツが俺に惹きつけられた理由も、俺がアイツに惹きつけられた理由も）」

運命だの愛だの言うつもりはない。

運命なんて馬鹿げているとアリエル自身が公言していたし、何よりも啓介はアリエルに対して恋愛感情なんか抱いていないのだ。

翡翠色の瞳、やや濃いアクアブルーの髪は彼女を“異端”だと見せつけるようなものであると同時に美しさを表現するものにもなっている。

発育し始めの少女が纏うような色気ととにかく日本人と白人の良い部分のみを抽出して作ったような端正な顔立ちはあらゆる男を惹きつけるに違いない。

「（枯れ果てたジジイですら視線を奪われるような美少女…だもんな）」

外見年齢だけで見れば、十二〜十三歳くらいなので世のロリコン共に狙われても仕方ない気がする（中学生をババアと言つてのけるロリコンはともかくとして）。

「ねー、啓介」

「んー？なんだ？」

「私と契約して超能力者になってよ」

「だが断る」

朝から五回ほど既に繰り返している会話だ。

最早、情性でしか返答をしない啓介である。

確かに超能力は魅力的かもしれないが、デメリットの方が圧倒的過ぎる。

今更他者から奇異の目で見られることなんて気にも留めないが、自分の家族までもが奇異の目で見られてしまうのは嫌なのだ。

それに、超能力を得たところで自分は平和を守るようなヒーローでもなんでもない。

むしろ私利私欲のために超能力を使うことを考えるような人間だから、超能力なんて要らない。

それが昨晚のアリエルへの返答だった。

しかし、アリエルは納得せず昨晚から何度も契約を持ちかけているのであった。

「…俺は、超能力が必要なほどに人生に疲れてないんだよ。運命がどうであろうと俺は情性的に生きていくだけだよ」

アリエルは啓介の方を見る。

「人間は与えられた時間、有限を目的なく生きる存在でしかないんだよ？たとえ目的があろうともそれを達成することの出来る人間はほんの一握りだけ。理不尽だとは思わないの？生まれもった才能、その1つだけで普遍的な人間は異常なる存在、即ち偉人と呼ばれる存在へと昇華するんだよ？」

啓介はアリエルの瞳を見る。

汚れを知らない真っ直ぐな瞳に見えるが、実態はわからない。

下手をすれば吸い込まれそうな感じもする。

「才能とは先天的なものと後天的なものに分かれる。なんておバカな人間は言っているけど、後天的に得られる才能も、最初から内に秘めていただけであって何も無いところから発生するものではないんだよ。つまり、才能とは神から与えられたものであり、才能を行

使用する人間は神に愛された人間というわけなんだよ」

「…まあ、その理論は賛否両論が飛び交いそうだな」

「世界はね、運命に決定付けられているんだよ？ 所詮、神の掌で遊ばされているに過ぎないというわけ。啓介に運動神経がないことも、モテないことも、勉強が出来ないことも、友達がいないこと、童貞なことも全てが神によって定められている。アナタがどれだけ努力して生まれ変わろうとも所詮それは神が定めた範囲内での変化でしかないんだよ？」

余計なお世話だ、とアリエルに会う前の啓介なら言っていたかもしれない。

「今この瞬間に何処かで人が死んでいたとしてもそれは神に決定されたことであり、神の決定を超えて延命できるなんてことは絶対にあり得ない。その人は、今この瞬間に死ぬ為に生まれて育ってきたんだから。…神の創作した物語における出番が終了した役に立たない人間は“死”を以って退場するわけ」

哲学者達が喜んで議論を始めそうな話題をアリエルは話し続ける。外見年齢には何をどう捉えても似合わないであろう話題であるはずだが、アリエルだけは例外であるかのように似合っていた。

「悔しいとは思わないの？ アナタがいくら努力しても意味はないんだよ？ 童貞を卒業したいからといってモテようとして努力しようとも童貞のまま死に行く人間もいる。そう決められているから。…啓介もその例に漏れず、神によって人間界の底辺に位置づけられているんだよ？」

運命論、神は絶対である、才能こそすべて、絶対正義。

啓介にとっては哲学などどうでもいい議題であり、そんな禅問答をするためにアリエルと会話しているわけでもない。

「…お前が現世に降りてきた理由を知らない限り、俺はお前の誘いに答えを出せないんだよ」

「…」

「…答えてくれ」

アリエルは悲しそうな瞳で啓介を見る。

「私達はね、人間の強い願望によって現世に引きずり下ろされるの。勿論、現状に満足しているような人間が願望を持ってても意味が無い。ただどね、この世の全てに絶望した人間…すなわち、神を信仰しない人間が強い願望を持ったときに私達は現世に現われる」

「まるで俺が強い願望を持つてみたいじゃないか。確かに俺は神なんざ信仰してない。だけど、俺は願望を抱いたことなんて…」

啓介の台詞をアリエルは遮る様に話す。

「新しい自分」

「…」

「アナタはいつも世界を客観的に観測するような人間だった。主観を否定して、客観を大事にしていた。人間が遊んでいてもアナタはその輪に入れないし入るつもりも無かった。…だけど、それでもアナタは心のどこかで望んでいた。それだけじゃない。アナタは異端に憧れ続けていた。普通とか違う存在…才能を持った天才に憧れ続けていた」

「…まあ、否定できなくはないかもしれないな。人間の深層意識なんてわからねえし」

啓介は呟く。

「だから、私は現世に召喚されたの。…アナタが神の運命を呪い、“新しい自分”を望んだから私はあなたの前に現われた」

啓介は黙る。

アリエルは言葉にしていなくて、恐らく無理矢理現世に召喚させられているのだ。

それはアリエルの言動からして恐らく間違いない、と啓介は推測する。

「勿論、私は君の願いを叶える為にこの世界に降りてきたんだよ？人間が出来るであろう範囲で努力しても目立てないであろう君を死ぬ気で努力すれば物語の主人公になれるようにするわけ」

「…主人公なんて御免だね。あんな熱血的で疲れる役は俺にはムリ

だよ」

「なれるよ」

「……」

「とはいっても私が魔法でちょちょいのちょい、という感じに啓介を変えるわけでもない。アナタに、生まれ変わる為に必要なチカラを与えるだけ」

「結局は俺が努力しないといけないって意味じゃねえか」

「そりゃアナタが努力しなければ意味がないよ」

アリエルは啓介の右手を握る。

「勿論、無料というわけにはいかない。これは神に定められた法則、因果律、森羅万象の掟を破るわけだもの」

「そりゃあ……カミサマの運命とかいう枷を外すんだからな。それ相応の代償は必要ってか？」

何を代償とするのかは知らない。

魂か？感情か？金か？記憶か？家族か？友人か？社会的地位か？恋人か？

中世のヨーロッパで魔女狩りが発生した際の記録では『悪魔と身体を交える』とあったらしいが、そんなものではないだろう。

女性からしたら苦痛かもしれないが、男からしたら性欲発散になった上に力まで得てラッキーの二乗状態である。

まあ、相手が同性だった場合は苦痛かもしれないが。

「（……契約の代償か。確か、名前を変えるってのも契約にあった気がするな）」

神を否定し、悪魔を神と称える。

悪魔に生贄をささげる、なんて事もあった筈だ。

「……それで、代償ってのは？」

「……」

啓介としても代償の部分には興味がある。

契約するわけではないが、ここまで話を聞いておいて聞かないわけにもいかないだろう。

「
…」

だがアリエルは答えなかった。

ちよっぴり悲しげな笑みを浮かべるだけだった。

啓介は何も言えなかった。

【1.2】 神々の超越者（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。

物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと思います。

【1. 3】 お互いの想い（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。つまり、この物語はフィクションです。

【1・3】 お互いの想い

午後五時七分。

啓介はアリエルと顔を合わせづらかった事もあり、あのあと外出してブラブラと街を歩いていた。

「（…俺が本気じゃなかったから代償を教えなかったって事なのかな？）」

そしてアリエルに申し訳ないことをしたな、と考えた啓介はアリエルに何かお詫びをしようとしてスーパーから帰っている途中だった。

「（上手ってわけじゃないけどまあ…人間の食べ物を食べてもらうのも悪くないかもな）」

おかげで普段の夕食代の三倍近くもお金が消費されてしまった。

「（アリエルが滞在している間はともかく…アリエルが帰ったらしばらくカップラーメン生活だな）」

アリエルが失樂園に帰る日が何時になるのかはわからないが、それまでは呼び寄せてしまった責任もあるし面倒を見てやるべきだと啓介は考えていたのだ。

啓介は自宅への坂道を上っていると向かいからやってきた学生の集団を見つける。

丘の上にある中学校の生徒だ。

「（こんな時間まで部活ご苦労様だな）」

持っている用具からしてテニス部なのは間違いないだろう。

女子中学生たちが楽しそうに会話している。

「（…俺も、あんな光景に憧れていたって言うのか？）」
すれ違つと啓介は息を吐く。

「どうなんだろうか…」

契約しないことは決めてしまっている。

アリエルを悲しませる結果になってしまっだろうが、それは仕方

ない。

家族のためにもこんな博打は割に合わない……

「ん？」

啓介はそこまで考えて思考停止する。

「（あ、あつるれえー！？何か、忘れてる、と思って、たら……）」
妹。

「あああああああああ！？」

啓介は全速力で走り出した。

「（ヤバイヤバイ。マジヤバイ！どれくらいヤバイかっていうとマジヤバイ！）」

「た、ただいまぁーッッ！！」

啓介はボタンと音を立てて帰宅する。

下を直ぐに見る。

妹の靴があつた。

間違いない。

「（人生オワタ……）」

アリエルに事情を説明してすらいなかったので彼女が機転よく立ち回っていてくれるとは考えられない。

啓介は居間へと急ぎ、扉を蹴って開ける。

「あつ、お帰りー」

ソファに寝転がりながらお菓子を食べている少女——んがむらあおい 梅村葵は兄である啓介に挨拶する。

ネクタイを緩めたカッターシャツを着ており、ミニスカートを穿

いた恐らく帰ってきてから何一つ着替えていないままの姿である。

啓介と同じダークブラウンの髪色を持っており、ショートヘアの髪型だ。

顔の形を考えてもバランスが良く、一見軽そうに見える中に重みを感じるような髪形をしている。

スタイルも運動しているだけあって腰周りは細い。

女子校だけあってかやはりお洒落や身なりには気を使うのか、二キビなどは一切見当たらない。

化粧も全くしていないにも関わらず、中々の可愛さを誇る妹である。

大人気の読者モデル程ではないが、中堅どころのモデルくらいに並べそうな感じがする美貌だ。

「何処行つてたの？」

葵は気の抜けた声でたずねるが、啓介の両手にある袋を見ると驚いて立ち上がる。

「うわっ！？どうしたの？今日は珍しくご馳走？」

葵は啓介の元まで近寄ると袋を奪い取り、台所へと持っていく。

啓介は呆然としていた。

「……」

葵は不思議そうに啓介を見る。

「どうしたの？疲れてんの？」

「い、いや……」

啓介はプルプルと震えた手を使って何も無い所——部屋の隅っこを指差す。

「？」

「み、見えて、ない……の？」

「はあ？」

葵はポカンとする。

啓介の指差した方向には何も見えない。

別にゴキブリがいたとかそんな訳でもないように見える。

「…疲れてんのか知らないけどさ、ちょっとぐらい休んだら？」

葵は笑って台所へと消えていく。

買った品物を冷蔵庫に入れてくれていたのだろう。

「マジ、かよ」

啓介は頬をひくつかせる。

「（マジで葵にはアリエルが見えてないのかよ…！？）」

「け、啓介…」

啓介は部屋の隅っこで借りてきた猫のように正座して座っているアリエルを見る。

啓介は手招きでアリエルを呼び寄せると廊下へと出る。

「な、なんでお前が妹には見えてないんだよ！？」

勿論、小声である。

アリエルも察してくれたのか小声で回答してくれる。

「え、えつとね…いきなり知らない人が帰ってきたなーと思ったから」

「もつと的確に答えてくれ！」

「え、えーつとね…啓介以外には私の存在が認知されていないの。能力を使っているとかそういう訳じゃないの。自動的に一般人の意識外に置かれるようになってるの」

つまり、普通の人間はアリエルを見ることが出来ないという訳らしい。

だったら小声にすること無いだろ、と啓介は思った。

「…つまり、俺みたいな“召喚者”が超能力者にしかお前の姿は観測できないというわけか？」

「そういうこと」

「じゃ、じゃあ…どうするんだよ。いや、結果的には助かったが」

啓介は頭を抱える。

葵は全くアリエルの存在を認知できていないのだ。

アリエルの分の料理を作る口実が無くなってしまう。

「…仕方ない。葵は手伝わせずして俺が一人で作るか。元からその

つもりだったが」

啓介は息を吐く。

アリエルは丸い目でポカンと啓介を見ていたが、啓介が何をしようとしてくれていたのかを理解すると微笑む。

「啓介」

「あんだよ」

「ありがと」

アリエルはそれだけ言うのと階段を昇って二階の啓介の部屋へと入っていく。

後で持つて来い、という意味かと理解した啓介は溜息をつく。

そして居間へと戻ると台所に立っていた葵に話しかけた。

「おおー、葵。今晚は俺が作るからお前は居間でテレビ見るなりゲームするなりしてろ」

「当たり前じゃんか。私は料理できないんだから」

「…お前、まだ料理習得してなかったのか」

「い、いいから！…ってなんで、お兄ちゃん顔真っ赤なの」

「ぶっ…！し、霜焼けだよ」

「すっげー嘘臭いんですけど」

「い、いいから詮索するんじゃないやねえよ！欲しかったフィギュアが手に入ってウハウハなんだよ！」

「キモイ…」

「なにをー！？お前の腐った趣味の薄い本を捨てるぞ！？」

下から聞こえるワーワーギャーギャーと騒ぐ兄妹の声を盗み聞きしながらアリエルは啓介の部屋のベッドで笑う。

「…このままでもいいかも」

夕食を済ませた啓介は葵が風呂場へと向かうのを見届けると台所へと向かう。

皿を取り出したりして夕食の準備を終えた啓介は食事を持って自室へと向かう。

勿論、夕食ではなく自室で大人しく待っているであろうアリエルのためだ。

「（顔を合わせづらいなあ…）」

他人から感謝されたことなんてほとんどないのでアリエルのあの言葉はかなり強烈だった。

啓介は溜息をつくと自分の部屋の扉をコンコンと叩く。

「（自分の部屋だって言うのに…）アリエル、いいか？」

「どーぞー」

扉を開けた啓介は部屋の隅っこにちょこんと座るアリエルを見て呟く。

「借りてきたネコかお前は」

「どういう意味？」

「そのまんまの意味だよ」

決してお前がネコのように愛らしいという意味ではない、と心の中で言い放つ（ネコは嫌いだが）啓介は部屋の真ん中に設置されているガラスのテーブルに食事を置く。

「ここまでしておいてアレだけどよ、食べ方わかるか？」

よくよく考えたら箸を使った料理をアリエルに提供するのとは初めてだった。

昨晩は部屋にあったお菓子、今朝は食パンだったので問題は無かったのだが…。

「ふむ…この棒は何？」

アリエルが箸を持ち上げて色んな角度から見ながら尋ねる。

「箸っていうんだ。それを使って食べ物掴んで口に入れるんだ」

「ふむう…。どうやって使えばいいの？」

啓介はやっぱり、と思う。

フォークかスプーンを使った料理にすればよかった、なんて凹みつつ啓介はアリエルから箸を受け取って教えることにする。

「手前の1本——えっと静箸だったかな？ま、まあソレは親指の付け根と、小さなボール——ピンポン玉を握るようにして…曲げた薬指に渡した箸のほぼ中間を親指で押さえて固定して持つ」

啓介が自身の右手で今の講釈どおりに動きを再現する。

そして、アリエルに箸を渡して持たせる。

「こ、こんな感じ？」

「そうそう（覚えるの速いな。流石は人間と違うだけあるのか？）アリエルの右手を見た啓介は説明を続ける。

「もう1本——動箸は親指と人差し指と中指の3指でつまむようにして持てばいい。そうして食べ物を摘めばいいんだ」

アリエルは啓介の言ったとおりに指を動かす。

人間業とは思えない上達振りだ。

「（何をやらせてもそつなくこなすタイプかね…）まあ結局、箸の持ち方なんて千差万別だし…アリエルの使いたいように使えばいいさ」

「うん。それじゃ、食べるね」

「おう」

夕食は料亭で並ぶ日本料理の劣化版…のような品揃えだ。

アリエルは魚の煮付けに箸を伸ばして食べ始める。

失樂園に魚があったのかは知らないが、骨はちゃんと取り除いている。

「（…まあ、食ってくれるなら問題は無いな）」

啓介は壁にもたれてアリエルの食事風景を眺める。

ハムスターのような可愛らしさがなんとなく感じられる。

しかし、黙り込む空気は啓介にとって毒に感じてしまう（アリエ

ル限定)。

「…なあ、アリエル」

「なに？」

「…ちよつと、聞きたいことがあるんだけどいいか？」

何も話さないというのもコミュニケーションには悪いらしいので、
啓介は口を開く。

「アリエルってさ、失樂園から来たんだろ？」

「うん。まあ、そうなるね」

「昨日と今日の説明を聞いてて疑問に思ってたんだが」
「？」

「アリエルって何時、失樂園に戻るんだ？」

アリエルの箸の動きが止まる。

啓介は気づかずに尋ねる。

「いや、別に出て行って欲しいわけじゃない。よくわからねーけど、
俺が呼び寄せちゃった責任もあるみたいだし…。ただ、気になるんだよ」

「…」

「過去にお前達ゴッド・イーターが契約を迫った人間は全員が超能力者になってんのか？」

「…その辺はわからない。私だって全知全能って訳じゃないし、他の人達のことなんかねえ…」

アリエルは何事も無かったかのように質問に答える。

「…なんか引つ掛かるんだ。仮に全員が契約してたのなら、世界にはもっと超能力について色んな伝承が伝わってもおかしくない筈だろ？なんで超能力者の存在が一人も露見しないんだ？…まあ、俺の推測だと全員が契約してるなんてことは絶対にはずだけどな」
「？」

「…だったら何で俺が拒絶しているんだ、ってことになる。俺は世

界にとって普遍で普通で何のとりえも無い一般人だ。契約をせがまれる対象が一般人である以上、俺みたいなやつだっているだろ？」

「まあ、そうだね。啓介は普通の人間だし」

「…だから思ったんだよ。契約しなかったら神々の超越者が^{ゴッド・イーター}どうなるのか。何故超能力や神々の超越者の存在が世間に漏れないのか。

…答えを聞かせて欲しい」

「啓介ってさ、食事のときに空気をぶち壊す発言するようなお馬鹿さんなんだね」

「え、い、いや…確かに俺はコミュ障だけど今聞きたいのはそういうことじゃなくてだな…」

「不安にならなくても啓介の思っているような事態は無いから」

「いや、だから」

「ないから」

「……………そうか」

啓介としては空気をぶち壊すためにこんな質問を仕掛けたわけではなかったのだ。

妹がいない時にしか聞けないことだったので今、聞きたかったのだ。

「（はぐらかされた…。そんなに触れて欲しくない話題だったのか…？）」

啓介はテレビを見ながら食事するアリエルを見ると一言だけ謝って部屋から出て行った。

四月九日 午後一時三分。

翌日、学生達が食堂や教室で昼食を楽しく済ませる中、啓介は一人で屋上に佇んでいた。

右手には飲みかけの冷たいコーヒー缶が握られている。物心ついた頃から両親が居なかったことと兄や姉は数年前から家を出ていることから最低限の家事をこなせる啓介だったが、弁当を作るようなことは滅多にしない。

なのでいつもは食堂で済ませたり昼食を抜いたりする。

本日は啓介は昼食を抜いていた。

「ふわぁ……」

欠伸をかみ殺す啓介は落下防止用のフェンスにもたれながら考える事をする。

「（アリエル…か）」

人外の容姿をした人間そっくりの“バケモノ”。

彼女（外見と性別が一致するかは不明だが啓介は女だと捉えている）のことについて啓介は頭を悩ませる。

自分でもおかしいとは思っている。

他人に全く干渉しない、興味を持たない自分がなぜここまで一人の少女について考え込んでしまうのかが。

「（恋愛感情っていうよりは…妹？娘？）」

自分の深層心理など全く理解できないが、あの日あの時アリエルに惹かれたのは事実だ。

春期休暇限定の短期アルバイトの最終日を済ませ、貰った給料で何を買おうかと思案していた帰り道に啓介は近道で使うあの公園でアリエルと出会った。

「（まあ、アリエルに対する感情の件については保留だ）」

啓介は唇をコーヒーで湿らせて考えに一区切りを入れる。

「（とにかく、契約しなかった神々の超越者がどうなるのか。これが最大の疑問だ）」

アリエルに昨晚尋ねてみたがはぐらかされるだけで終わってしまった問題を啓介は考える。

気になるのだ。

むしろ、そこが紐解けない限りアリエルに対してどう接すればいいのかわからない。

「（なんでアイツははぐらかしたがるんだ？）」

明言しない、ということはまさか“帰れない”のかと啓介は考えてしまう。

「（俺みたいに神を信仰せず今の自分と世界に絶望する人間なんざ恐らく大量に存在している。一人が願うたびに失樂園から神々の超越者^{ゴッド・イーター}が引きずり降ろされるのなら神々の超越者は人類の何倍も存在することになる）」

あんなバケモノが人類の数倍も存在しているなんてバカなことがあつてたまるか、と啓介は思う。

「（いくら何でも…帰れないってのは無い筈。帰れないのなら失樂園の人口はどんどん減ることになるだろうし。…アリエルがいつてた上司とやらがそれを許すはずがないだろう）」

上司とやらがどんなバケモノかは啓介は知らないし、知るつもりも無い。

だが、自分の種族が減るのを黙って見過ごすようなバカではないと思っっている。

「（一定期間内に契約が成立しないのなら帰還するとかそういうモノなのか？だったらアリエルが俺との契約に積極的になる理由なんて無い筈。スルーして期間を待てばいいだけだし）」

しかしここまで考えて啓介はハツとする。

まさか、本当に？

「（アリエルのヤツ…俺が契約をしなかったら帰れないのか？）」
その考えしか啓介の頭の中には残っていない。

「（だとしたら、アリエルは…）」

啓介に契約の意志がない現在、アリエルは二度と失樂園に帰ることができないということになる。

しばらく考え込んだ啓介は唾を飲み込む。

「（なんつう押し売り商法だよ。しかも俺限定つてところが罪悪感をムダに抱かせやがる）」

アリエルが他の一般人にも見えているのなら他の人間に契約させて終了、という考えを実行できる。

しかしアリエルは啓介以外の一般人には全く感知できない存在であり、それは啓介しか契約対象がいないことを示していることにもなっている。

「（…どうすべきなんだろうか）」

結婚なんて墓場に入るようなもんだと考えている啓介からすれば、アリエルは別に居ても実害がない存在だ。

啓介個人の感情では、このまま一緒に居ても問題ないと思っている。

同棲なんて恋人らしい言葉が似合う関係ではないが、人間の常識を正しく教えてやれば立派な人間（？）として育ってくれるだろう。人に存在が感知できなくとも物には触れることが出来るみたいなので家事とかやってくれと助かるし、なんて啓介は考える。

しかし、アリエルはどう思っているのかわからない。

「（帰りたい、って思ってるかもな）」

誰だつていきなり異世界に飛ばされて二度と戻れませんかなんていわれたら絶望する、と考えた啓介はポケットから携帯電話を取り出す。

「（聞いてみるか）」

タッチパネル式の携帯電話で電話番号を打ち込む。

電話先は自宅。

電話の使い方は教えていないが、何となく理解してくれるだろうと啓介は願ってアリエルが出てくれることを祈る。

しばらく間が開いた後にプツリと音になる。

「（繋がった！）アリエル、俺だ。啓介だ。…聞こえてるか？」

「え…え…え…あ…う…」

何か言っているように聞こえるが遠すぎて聞こえない。

「受話器を持って喋れ。耳に押し当てるんだ」

自分の声が聞こえているかは知らないが使い方を教えてみる。

『あー、あー聞こえる？』

「ああ、聞こえる」

『こ、これ何なのさ。いきなり音が鳴ったと思ったら…』

「いや…スマン。使い方を教えておくべきだったな」

『恐る恐る触ったらいきなり啓介の声が聞こえるからびっくりしたよ』

アリエルの口調から少しだけ怒っているのが感じ取れる。

「あー…スマンスマン。…本題いいか？」

『謝っても……本題？何か用？』

啓介の真面目な声にアリエルも真面目になったのか尋ね返す。

啓介は意を決すると疑問をぶつける。

出会ってたったの数日しか経っていないが、中々良い関係を築けた二人にとってこの議題は関係を白紙にするものかもしれない。

だが、啓介は聞いてみたかった。

自分のために、彼女のために。

「…なあ、アリエルって失樂園には帰れないのか？」

『…昨日も同じ質問したじゃん』

「もしかして、俺が契約しない限り失樂園に帰れないのかよ？」

『どうしてそう思うの？』

啓介は自身の推理を全てアリエルに話す。

全てを聞き終えたアリエルは息をフウと吐く。

『……その通り、だよ。とは言っても契約してすぐに失樂園に帰れるわけじゃない』

「どういうことだよ」

推理どおりだったか、と心の中で呟いた啓介だったが、アリエルの言葉に耳を傾けなおす。

『契約後、超能力者となった契約者の最期を見届ける必要があるの。それを見届けて無事に私は失樂園へと帰ることになる』

仮に今契約したとしても啓介はまだ十六歳だ。

特に難病を患っているわけでもなければ、命に関わる怪我をして
いるわけでもない。

現在の日本人平均寿命は男性は八十八歳。

アリエルが元の場所に帰るまで軽く六十年近くはかかることになる。

「…なんで、黙ってたんだよ」

『…啓介は言つたでしょ？自分が特別になつて家族まで奇異の目で見られたくないから契約しないって』

「推測だけどよ、お前達は無理矢理契約を結ぶこともできるんだろ？」

『できるよ。呼び出したのに契約しないって頑なに拒絶されたときの最後の手段でね…。無理矢理契約してその場で殺して失樂園に帰るの』

「何で俺にその手段を使わなかったんだよ」

『…最初は使おうと思つてた。だけど、啓介が私を邪見にせずに扱ってくれたのが嬉しかったの。…啓介が私の存在を拒絶しない限り、啓介の意志を尊重しようつて思つたの』

「…おもいつきり邪見にしてるじゃねえか」

『私を悲しませたつて思つたらご馳走作つてご機嫌伺つてくれたし、寝る場所が無かった私に自分の寢床を貸し与えてくれた。私が不自由してないかつてずっと気にかけてくれた。…今までこんな風に接してくれた人間はいなかったし、内輪にもそんな存在は居なかったから…すっごい嬉しかった』

啓介は言葉を出せなかった。

アリエルは恐らく一度人間界へと召喚された事があつたのだろう。電話の使い方やテレビ、缶ジュースを知らない所を見る限りでは数百年以上前のことだと思ふが。

『…啓介がね、私をずっと傍においても良いって思ってくれてるならこのまま契約しなくても良いかなって思ったりもした』

「……もし、俺がお前と契約せずに死んだらどうなるんだ」

啓介の疑問はそこだった。

『……………多分、未来永劫の時間を彷徨い続けると思う』

言いたくなかったのかアリエルはポツリと呟くように啓介に教える。

「…俺」

『こんなお涙頂戴劇や啓介の感情を揺さぶって契約するのはイヤだからね。啓介が、自分のために契約したいと思ったときしか私は契約しない…から』

俺は何を言うつもりだったんだろうか、と啓介は考える。

考えなく咄嗟に出そうとした言葉は何だったのか…

「（アリエルに対して恋愛感情を抱いているわけじゃない。それは完全にわかる。間違いない。…だけど、どうしてアリエルを守ってやりたいと思うんだろうか）」

友人のような関係、家族のような関係をアリエルに求めているのか？と推論を立ててみる。

しかしやっぱり啓介の考えは纏まらなかった。

『…出会ってホントに数十時間だけど、啓介は優しいと思うよ？友達居ないとか性格悪いとか自分で言ってるけど、優しいと思う。だから私の話を聞いてアナタはすごく悩んだと思う。でも、自分の道を行ってほしいの』

「…そう、だな。…ありがと、何かムダに元気でした」

啓介は少しだけ赤面しながら微笑む。

電話の向こうのよくわからない関係の存在に。

「…アリエル、葵にバレないように過ごしていてくれよな」

『大丈夫。あの人なら今は外に出かけてるから』

「そうか。…なんか悪かったな」

『大丈夫だよ。…私こそごめんなさい。黙ってて』

「…俺のためだったんだろ？いいさ」

どんな種族でも女は強いな、と思った啓介はフェンスに預けていた身体の重心を前に押し出し「よっ」と声を出して地球の重量に再び逆らいはじめる。

「あと…今日も早めに帰るけどよ、今日は買い物手伝ってもらうかな」

『私って他の人に見えないんだけど』

「隣で何食いたいか言ってくれ。俺が買う」

『…ありがとう』

「ああ。…じゃ、そろそろ授業だし切るわ」

アリエルと少しばかり話して電話を切る。

時間は午後一時十五分。

あと五分ほどで五時限目の授業が始まるだろう。

「…次は政経か」

啓介は憑き物が落ちたようなスッキリとした顔で屋上から出て行った。

「（ま、考える時間はまだあるさ。…今超能力について考えなくても、な）」

【1.3】 お互いの想い（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。

物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと思います。

【14】 委ねられた決断（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。つまり、この物語はフィクションです。

【14】 委ねられた決断

アリエルは受話器を同じ場所に降ろすと啓介の部屋へと戻るために階段を昇る。

「（今日のご飯かぁ…。テレビでやってた白いカレーみたいなモノがいいかも）」

啓介の部屋に戻ったアリエルは啓介の部屋を見渡す。

昨晚も啓介はアリエルにベットを貸して自身は一階の居間のソファで眠っていた。

妹の葵に「自分の部屋でなんで寝ないの？」と問い詰められ、「深夜アニメ見てたら寝オチした」とわけのわからない言い訳をしていた啓介を思い出してアリエルは少しだけ笑う。

「（私が昔来た時とはすっごく様変わりしてるんだよね…）」

啓介に曰く現在は西暦二〇三〇年らしく、ここは日本と呼ばれる地球の最東端部分に位置する島国らしい。

アリエルは机の上に出されたままの世界地図を見る。

「（私がいた場所は曖昧だったんだけど…。契約者はなんて言ってたっけな）」

特に特徴の無い男だったとアリエルは記憶を懐古する。

力だけを求めていた男は自分に全く見向きもなかった。

面白くない人間だったのでよく街をぶらついて人間の会話を盗み聞きしていたのを思い出す。

それ以外にやることがないとても退屈な世界だった。

どっかの島に流されて死んだので失樂園に帰ることが早くできてラッキーだった点だけは評価するが。

「（多分、二百年位前だと思うけどなあ。まあいいや）」

アリエルは棚に飾られているフィギュアを眺める。

水着姿とかメイド姿とかそんなフィギュアはないが、幅広い種類のフィギュアが見られる。

「（学校って…楽しいのかな）」

アリエルはふと考える。

自分のような存在は生まれた時点で最低限の知能のようなものを宿しているので、勉強なんてものは必要ないのだが…啓介を見てみると学校とやらがどんなものか気になるのだ。

「（…迎えに、行ってあげようかな）」

アリエルはベットで惰眠を貪りながらそんなことを考えていた。

啓介は目を覚ます。

終業のチャイムにより教師が出て行ったようだ。

「（六時限目の古典は実に面倒だったな…）」

教室の前に置かれてるスクリーンパネルをぼんやりとした顔で眺める。

黒板なんていう物が日本の教育から消えて早くも二十年、現代の日本ではノートも鉛筆も使わない教育方式がとられている。

床に固定された机は少しだけこちら側に斜めに傾いており、机の表面にはタッチスクリーンが二つ設置されている。

机の右隅っこにあるUSBの二つの挿入口に自分専用のUSBを挿入し、タッチスクリーンに【アプリケーション・ノート】【アプリケーション・テキスト】を表示させて授業で重要なところを書き写したり、教科書を読んだりするのだ。

ノートと教科書を電子化したものであり、上のスクリーンに教科書のデータを、下のスクリーンにノートのデータを表示する。

「（大人たちは技術の躍進だの言ってるけど…俺からすれば小学校

からずつとこうだったしなあ」

啓介も周りの生徒と同じようにノートパソコンを取り出してデータを読み取らせる。

途中から爆睡していたのでほとんど書き込んでいないが。

「（今日の授業もコイツでお終いだし、とつとと帰るかねえ）」

鞆に入れているUSBケースに古典専用のノートデータが入っているUSBを片付けると全部がそろっていることを確認して帰りのHRが始まるのを待つ。

クラスメイトたちはワイワイと担任が戻ってくるまでの時間に友人同士でお喋りを楽しんでいるが関係の無いことだと啓介は心の中でばやく。

三分ほどして担任が教室へ戻ってくる。

「えー、明日の連絡だが――」

「（どうせいつもと同じ平和な日常だよ。別に明日も今日と変わらっこない）」

担任が明日の連絡を言っている間に啓介は廊下を覗く。

空は快晴。

夕焼けが綺麗だ。

「あと、最近話題になっている通り魔事件についてだが」

啓介は通り魔、という言葉に耳を立て初めて担任の言葉に注目する。

「（通り魔?）」

テレビのニュースを中々見ないのでどうもご当地限定の事件や物事に関しては疎い啓介だったが、流石に地元で通り魔ともなると知らないはずが無い…のだが。

「先日、我が校の近くで不審者らしき人物が目撃されている。怪しい人物を見かけたら逃げるようにしろよ」

「（不審人物ねえ…）」

「通り魔の目撃情報と不審者の容姿が似ているらしいからな。通り魔はテレビでも言っていたようにナイフと拳銃を所持している。犠

犠になった一般市民も五人。全員が高校二年生だ」

「（変質者…じゃないよな）」

「男子が四人、女子が一人犠牲になってることもあるし、なるべく集団で下校するように。警察も警備を強化して見回りしてくれてくれるが、安心はするなよ」

啓介は溜息をつく。

友達がいらない上に近所に同じ学校の生徒は全くいない彼には死ぬといっているようなものだ。

終礼が終わるとクラスメイトたちもそろそろと教室を出て行く。

通り魔のことについて話しているのだろうか。

「（とにかく、とっとと帰ってアリエルと一緒に買い物にいったやらないとな）」

啓介も立ち上がろうとするが、「梅村」と担任に呼び止められる。

啓介は心の中で舌打ちすると教卓へと向かう。

「なんですか？」

「今日、六時限目の授業寝てたらしいな」

「寝てないです。睡眠を取ると同時に学習するという効率良いスタイルで勉強してただけです」

「それを世間一般では睡眠学習というんだ」

「…」

「とにかく、居眠りした罰として社会科室の資料整理を頼んだぞ」

「いや、罰が割に合わないんですけど」

社会科室は向かいの校舎の三階にある。

あんな人気の無い不気味な場所です資料整理なんて拒絶したい。

「（アリエルに早く帰るって言っちゃったしなあ）…用事があるんで全部はムリですけど、一部なら」

「全部だ全部」

「一部」

「全部だ！」

結局、全部の整理を啓介は任されることとなってしまった。

午後四時三十分 市内のとある喫茶店にて。

『我々としても困るのだよ。あまり騒ぎは起こさないでいただきたい』

「申し訳ございません」

カフェの外に配置されているテーブルの上にノートパソコンが置かれている。

ノートパソコンには「SOUND ONLY」と表示されている。
『情報不足な事についてはすまないと思うが、こうも無関係の人間を巻きこみすぎるのはな…』

暗い赤色のオフィススーツを着た女性が座っていた。

周りは人の通行もまあまあ多い場所だというのに何者かと密談していた。

「私というよりは相方が騒ぎは大きくしているのですがね」

『林真一か…。あの暴れん坊を選んだのは間違いだったかもしれない』

銀座や歌舞伎町辺りで見かけそうなオシャレに気を使った女性はサングラスを外す。

「まあ、大体絞れていますのでそろそろ決着はつくはずですよ」

『第零次接近遭遇があつたのは間違いなく四月七日の深夜です。丘の上の公園を中心とした謎の暴風が発生した事件です』

『…』

「人間界では力の九割を封じられているにも関わらず、あの暴風を

巻き起こしたということは降臨した存在は間違いなく【風】の属性を秘めた存在でしょう」

『【風】か…』

「残留思念の濃さからかなり力の強い天使です」

通信相手の初老の男性はしばらく考えていた。

『…風に関連する存在で尚且つそれまで現世に存在しなかった堕天使』

「“獄炎に座す者”と考えられますが」

「だろうな。あの女狐なら超能力を見せてつけて契約を迫るだろう。

かつて数百年前にとある“革命騒ぎの宝くじを最後に引き当てた男”に力を与えたのもヤツだ。…恐らく、今回の契約相手も契約すればとんでもない未来を引き当てるかもしれんぞ」

何を言っているのか一般人に全く理解できない会話だった。

『…八坂美鈴』

「はい」

『失敗は許されない。必ず、契約相手を見つけ出せ』

「はい」

『契約済みの場合は仲間に引き入れるのだ。知恵のリンゴの予言では“二十四番目”になる未来が見えるらしい』

「…二十四番目!？」

『そうだ。だから他の組織に渡ってしまえば、必ず障害となる。…仲間に引き入れる事が出来なかった場合は――』

「わかっています」

八坂は初老の男性の声を遮って返事すると通信を切る。

「（…わかっているわよ）」

八坂はノートパソコンを閉じると傍に置いていたコーヒーカップを持ち上げてコーヒーを飲む。

「…冷たいわね」

午後四時四十二分。

「いつてきまーす…」

アリエルはこっそりと扉を開けて外へと出る。

家に帰ってきた葵にバレないようにこっそりと家を出てきたのだ。

「（たまには啓介を労って迎えにいつてみようか）」

アリエルは歩き出す。

空を飛ぶ能力を使ったり、レポートすれば簡単なのだがアリエルは歩いて迎えに行く事に決めていた。

「（まあ、人間臭く生活してみたいってのもあるんだけど）」

どうせアリエルの姿は一般人には見えないのだが、アリエルはこうして歩いている。

「（学校の位置なんて簡単簡単）」

自分には思念を辿る能力がある。

啓介から来た電話の発信源に向かえばいいだけのことである。

「さあーて…帰ったら今日は何して遊ぼうかな」

午後四時五十八分。

「なんで居眠りしただけで罰ゲームなんだか…」

相変わらずな世間の自分に対する冷たさに啓介は少しだけ凹みつ

つ、本棚に本を仕舞っていく。

二十世紀と二十一世紀に起きた歴史的大事件について記された本を片付けていく。

「歴史は苦手科目だ」

啓介は本棚の一番上に本を仕舞い終わると「ふう」と息を吐いて、背筋を伸ばす。

ポキポキと少しだけ背中から音が聞こえるが啓介は気にしない。

「さあーで、独り言いってても空しいだけだし……とっとと帰るか」

啓介は部屋を出ると渡されていた鍵を使って教室の扉を閉める。

「（さて……職員室に鍵を渡して……）」

啓介は橙色に染まった廊下を小走りで駆け抜けて職員室を目指そうとする。

角を曲がって渡り廊下を通過して職員室のある校舎へと入る。

そして階段を下りて一階へと向かう。

「ちょっといいかな」

啓介は職員室の前に佇んでいた黒服の男に話しかけられた。

見ない人物だ、と思った啓介は眉をひそめる。

「なんですか？」

「いやいや……ちょっと探し物をしていてね。手伝ってくれないかな」

「……何ですか？」

今日は厄日だと心の中で呟きながら啓介は尋ねる。

目の前にいる男はとても普通には見えない。

銀色のボタンや銀色のラインが入った真っ黒なコート。

身長は啓介より十数センチほど高そうなので百八十後半くらいだろうか。

ロングブーツを着用しているようだが、膝よりも長いコートなのでよくわからない。

「とある人を探してるんだ」

「生徒の保護者ですか？　だったら職員室で聞いたほうがいいと思うんですが…」

「いや、保護者ではないね」

「だったら客人ですか？」

どう見ても校長や教頭に会う人の服装とは思えないのだが、一応聞いてみる。

「いや…教師に用があるわけでもない」

「…何ですか？　俺も忙しいんですけど」

ちよつとだけ奇立ちを見せた啓介だったが、男のほうは気付いていないというよりも気付いていて無視しているような顔をしていた。

「そうだね…とある人物が持っているモノが欲しいんだ」

「つまり、その人物を探してると？」

「そういうことになるね」

啓介は溜息をつく。

回りくどい会話は苦手なので単刀直入にしてほしい。

「…それで、誰をお探しなんですか？」

「墮天使」

啓介の動きが止まる。

男のほうはニヤリと笑みを浮かべる。

柔和な笑みではなく、相手を自分の罠に陥れたときのような笑みだった。

「知っているはずだ。君は…いや、お前は“墮天使”と名乗った生物を」

「…」

啓介は目を見開いた。

「（どうして、知ってるんだよ…！？）」

「どうして知ってる、って顔してやがんな。ハハッ！もしかしてオメエ、墮天使なんてぶつとんだ存在がこの次元に存在するっていうことを知ってるのが自分だけだとも思ってたのかア!？」

男は本性を表す。

荒々しい口調で目の前で動揺している啓介に言い放つ。

「な、なん……」

「墮天使共は哀れな運命を嘆き、神を憎んだ人間を見つけては契約を迫る。なぜかって？理由は簡単だ。墮天使共は“自分達の手駒”が欲しいんだよ！運命ラグナロクの日に備えて神の軍勢と戦う為の手駒が欲しいから、神の玩具ニンゲンに手を出してんだよ」

啓介は後ずさる。

男は下品な笑いを発しながら啓介を見つめる。

「墮天使はオーバーロードとして人間の世界に今まで干渉してきた。あいつ等は神の一番のお気に入りである玩具ニンゲンを自分達のいい様に弄繰り回して一泡吹かせてやると同時にアイツの喉元を食いちぎってやるっていう理由のためだけにあいつ等は地球を、人類を好きなように弄繰り回してやがる」

「……」

「あいつらの身勝手な計画のせいで俺はこんなクズみたいな世界に叩き込まれてんだ……ッ!！」

男は今にも歯を砕きそうなくらいの歯軋り音を立てる。

「お、お前……何者だよ!？」

啓介は怯えながら男に向かって尋ねる。

「ああん?……ここまでいえば、わかるだろ?」

「超能力者だよ」

啓介は踵を返して走り出す。

荷物なんか一瞬で捨てた。

目の前の男は危険すぎる。

「逃げちゃダメよ」

左から聞きなれない新しい声が聞こえたと同時に啓介が大きく吹き飛んで壁に激突する。

肩を蹴られたと認識するには数秒かった。

啓介は地面に転がる。

痛い。

肩の骨にヒビが入ったような痛みを感じる。

「いったあつ……！！」

啓介は肩を抑えて座り込む。

座り込む啓介を見下すように黒服が口を開く。

「ごめんねえ」。痛いでしょ？まあ、骨折れるくらいの勢いで膝蹴りを入れたんだから痛いわよね」

「遅いぞ」

男と同じ服を着た女性。

どう見ても仲間だろう。

となると、

「（超…能力…者か！？）」

男は道端に倒れている酔っ払いを見るように哀れみをこめて啓介を見る。

「なんで自分が超能力者に襲われてんのかがわかってねえみたいだな」

「う…ぐうう！！」

肩の痛みで声が上手く出ない。

啓介は涙が溢れそうな痛みを必死に堪える。

女は啓介を見ると溜息をついて男に提案を持ちかける。

「…ねえ、林…説明してあげてもいいんじゃないかしら？」

林と呼ばれた男は舌打ちをする。

「時間が無いんだよ。わかってんのか？」

「回答無用で殺しちゃうと目覚めが悪いわ。：大丈夫よ。情が移ったわけじゃないから」

「……ならいいがよ。じゃ、八坂が説明しろ」

「はいはい」

林は啓介の前髪を掴むと引つ張りあげる。

「アナタ、墮天使アリエルをこの世界に呼び寄せたでしょ？」

「……」

啓介は涙目で二人を睨みつける。

「聞いたこと無いかしら？ユダヤ教やキリスト教の天使の名前で“アリエル”という名前を」

啓介は神話に詳しくないので聞いたことが無かった。

林はそれを何となく察したようで、八坂の代わりに続きを喋る。

「……知ってるかどうか知らねえが補足だけはしておいてやる。神々の超越者^{ゴッド・イーター}つてのは元々は神に使えていた天使だった奴らだ。奴らは落書帳^{せしよ}通りにルシファールと共に神に反旗を翻して墮天使を名乗るようになったんだよ。……まあ、話を戻すが、墮天使アリエルは天使どもを束ねる天使長であつたと同時に風や空気に精通した天使だったわけだ。それはあいつ等が墮天した後も変わっていない」

「……！」

つまり、アリエルは神々の超越者^{ゴッド・イーター}の中でも上位に位置する存在だということになる。

啓介は驚きを隠せなかった。

威厳も何も感じられない少女のように見えていたのだが、外見や雰囲気だけで彼女を見るのは大きな間違いであつたらしい。

八坂は愕然とした啓介の顔を見ると笑う。

「そんな怪物の怪物と契約されてしまうと、アナタも契約主の強さに沿うように世界を掌握するだけの力を得るに違いないわ。それはとっても私達超能力者にとって困ることなのよ」

「超能力者つてのは世界に約二千五百万人も存在している。勿論、全員が世界を掌握するような力を持っているわけじゃねえが、大国

を一人で滅ぼせるような力を持つ奴は何万人も存在する」

超能力者の世界は常に絶妙なパワーバランスで成り立っているらしい。

つまり、啓介とアリエルの存在はそのパワーバランスを崩壊させるような危険因子として世界中から認識されているということになる。

「世界中にいる超能力者の九十九パーセントは何らかの組織に配属しているの。…国家の特殊部隊やテロ組織のような“一般人が住む世界”とは遠くかけ離れた“血で血を塗る世界”で超能力者たちは自分の保身のために日夜隣国の特殊部隊と激突したり、テロリストを排除したり、破壊工作を仕掛けたりしているの」

「お前ら…血も涙も、ねえな」

啓介は憎しみを込めて言い放つ。

「そうねえ…。私達は自分の環境を壊されたくないのよ。バランスが崩れてしまえば一気に世界は第四次世界大戦へと傾く。そんなことになれば今度こそ地球上から文明というモノは姿を消すわ。それは私達としても避けたいことなの」

「俺達が喜んでこんな世界にいても思ってたのならとんだ勘違いだな」

林も八坂も啓介に反論する。

「俺達はな、自分の大切な人や環境を守る為に、国家にそいつらを保護してもらう為に国家や組織の手足になって働いてんだよ！自分の大切なもののためなら他人の命ぐらいどうってことねえ！！それが人間ってヤツだ！」

林は啓介に唾を飛ばす勢いで怒鳴る。

「それに、パワーバランスが崩壊して自分の大切なものがある環境をつぶされるなんてイヤなのよ」

「…矛盾、してやがるじゃ、ねーか」

「？」

啓介は目の前の大人二人に言い放つ。

「バランスが崩壊して欲しくねえ、のに…破壊工作する、なんて、よお」

「…そうね。普通に考えたらそうなるわ。説明が足りなかったわね」
八坂が説教をするように説明する。

「裏世界にはとある予言ができる超能力者がいるの。的中率百パーセントの絶対に未来が見える存在。その人がね、“墮天使アリエルと人間の契約を絶対に阻止せよ”って言ったのよ。“もし、契約が成立すれば、二十四番目がこの世界に誕生することになる”とも言ってたわ」

「二十四番目…？」

聞き覚えの無い数字だ。

アリエルからも聞いたことの無い超能力者に関する情報。

「これから死んでいくお前に関係はねえよ。…とにかく、テメエが世界にとつての害になるとだけ覚えておけばいい」

「まあ、あなたの言っていた矛盾についての回答だけど…私達のような下っ端が何千回と破壊工作しても一つの組織が不利になったり潰れたりするだけで全世界に強大な影響を与えるわけではないの。

だけど、貴方を除いた二十三人のような存在が一人でも生まれるだけで影響は全世界の組織に及ぶ。つまり、パワーバランスが滅茶苦茶になるのよ」

「……………」

啓介は何も言えなかった。

「ま、あいつらは俺達の意志に関係なく俺達の深層心理が望んだからだとか抜かした理由で契約迫って俺達を世界の闇に陥れる迷惑な存在だしな。…テメエも運が悪かったな。普通レベルの墮天使と契約していたら闇に堕ちるだけで助かったってのに、上位レベルの墮天使を呼んじまって…」

話は終わりだ、という林は呟く。

どんな超能力を使うヤツらなのかはわからないが、普通の人間では敵わないような雰囲気が出されている。

幾多の戦場を潜り抜けてきた傭兵の様な雰囲気を感じさせた。

「説明はこれくらいかしらね。…さて、遺言は？」
女は引き金に触れる。

「…」

啓介は声が出なかった。

恐怖で声が出ない。

「…ぶるぶる震えやがって。見てるとムカツク。…とっとと殺して帰ろうぜ」

男は面白くない芸人を見るような冷めた目で啓介を見る。

啓介は絶望する。

「（畜生…。なんで、俺が…こんな奴等に…!!）」
なんとというクソツタレな人生だったのか。

啓介は悔しくて涙しか出なかった。

押し付けられた銃から、ガチツという音が聞こえる。

ハンマーを押し上げた音だ。

「（畜生!! 誰でもいいから…助けてくれ、よ…）」
弱弱しくなる悲鳴は、心の中でしか叫べなかった。

「ま、来世で幸せな人生を過ごしなさい」

啓介は全てを諦め、目を瞑った。

「啓介？」

しかし、悪魔は彼を救った。

啓介の危機を救ったのは聞き慣れた声だった。
汚れを知らない純粹さを感じさせる声だった。

「アリ…エル…？」

啓介が呟く。

目の前の光景が彼には信じられなかった。
どうしてアリエルがここに？

何故？

「ほう、まさかお目当てのものが自分から来るとはな」
林がニヤリと笑う。

「貴方達、啓介に何してるの？」

アリエルは八坂の持つ拳銃を見て少しだけ驚く。

「殺すのよ」

「なんで…？」

「邪魔だから」

アリエルの顔から表情が消え失せる。

啓介はぞつとした。

少しだけ、墮天使としての顔を見たような気がした。

「…超能力者？」

「ええ、そうね」

「^{LEVEL}強度は？」

「律儀に教える必要は無いわ」

「…この時代になっても、まだ存在してたんだ」

アリエルは呟く。

啓介は苦しそうな表情でアリエルを見る。

「（…アリエル）」

「忠告しとくが、お前は助からねえぞ」

「！？」

啓介は自分の思惑を見透かされて目を見開く。

林は侮蔑の表情で啓介を見ると説明する。

「^{ゴッド・イーター}神々の超越者は人間界に滞在する間は人間に対して戦闘目的で超能力を行使することを許されていない。詳しくは知らねえが、掟らしいぜ」

「そうね。仮にあの墮天使が防御系超能力を使おうとしてもムダよ。人間と戦闘目的で対峙しているのだから掟の効力で超能力は使えな

い。まあ、逃亡するためなら使えるかもしれないけど」

啓介は絶望した。

「（アリエルは、身を守れないってことかよ…）」

自分を助けるどころかアリエルの命が危機にさらされている。

「っ…！」

啓介は齒軋りする。

自分の弱さに対して苛立った。

「…それで、墮天使は私達に何をして欲しいのかしら？」

「解放して。いや解放しろ」

「聞けないお願いね」

アリエルは左手を前に出す。

「あら、超能力は使えないんでしょ」

「使う」

「掟はどうしたのかしら？」

「知るか」

「掟を破ったらどうなるかはアナタがよく知ってるんじゃないかしら」

「どうでもいい」

「…随分と入れ込んでるのね」

「お前には関係ない」

アリエルの左手の人差し指から赤色の光が現われる。

何らかの能力の発動準備のようなものだろうか。

啓介はアリエルが自分のために掟を破ろうとしているのを理解してしまった。

啓介は力を振り絞って叫ぶ。

「アリエルッ！！もうやめてくれ！」

「！」

「…逃げてくれ」

啓介は頭でわかっていてもそれしか言えなかった。

この場で啓介を捨ててアリエルは逃げたとしても契約する相手を

失ったことでアリエルは永遠に人間界をさ迷うこととなる。

しかしアリエルをこの場に置いていては、殺されるか掟の罰で死よりも恐ろしい罰を受けることとなるだろう。

「（他の超能力者に、アリエルが見えるなら…見えるなら、誰か親切そうなやつを見つけて…暮らしてくれたほうが、まだ、マシだ）」

八坂は溜息をついて啓介を見る。

「素晴らしいくらいにピュアな愛ね」

啓介は八坂をギロリと睨む。

「愛、なんかじゃ、ねえよ…クソツタレが」

「………まあ、あっちの方は発動しようとしても掟で潰れるから放っておくとして」

八坂は拳銃を啓介の胸に押し当てる。

「残念ね」

「やめろ！！」

アリエルは叫ぶ。

超能力を今にも行使しようとしているが、掟の効力により上手く発動できていないようだ。

無理矢理発動すれば暴発して啓介を助けるどころか殺してしまうことになるので踏み切れないのだ。

「啓介ッ、逃げて！」

「（…俺だって死にたくないさ）」

「啓介ッ！！」

アリエルは走り出す。

超能力を発動できない状態で飛び込むなんて我を忘れてしまっている、と八坂は思った。

「蜂の巣になりたいなら殺してやんよ！」

林が自分の持っていた銃をアリエルのほうに向ける。

「！！！」

啓介はその姿を見て感情が高ぶる。

自分の命を犠牲にしても拳銃を奪い取ってやと思った。

「やめッ…！」

パン！と音を立てて銃弾はアリエルの方へと飛んだ。

銃弾はアリエルの肉に捻りこまれ肉を千切って進む。

「ぐっ！」

左肩を打ち抜かれたアリエルは膝をつく。

「やめろおおッ！！」

啓介は今まで生きてきた中で一番だったと言える程に力を発揮して暴れる。

諦めたと思つて油断していた八坂にタツクルをして床に叩きつける。

打ち付けられた衝撃で落とした拳銃を啓介は大きく蹴り飛ばす。

「うわああ！！」

「チッ」

林は啓介に向かって舌打ちをすると同時に銃弾を放つ。

銃弾は啓介の右肘を貫通したが啓介は林にむかつて飛び掛った。

「うおっ！？」

ひるむと考えていた林は完全に意表を突かれる形となり、啓介に飛び掛られる。

啓介は殺意を持って林の首に噛み付く。

「ぐああああ！！」

歯が折れるくらいに力を入れて林の肉に歯を食い込ませた。

ブチブチと肉が切れる音がした。

啓介は噛み付いた後に右手を伸ばして林の両目に指を突き刺した。

「ぐっおおおお！！？」

啓介は林が痛みで倒れるのと共に床へと転がるがすぐに体勢を立て直して逃げ出す。

「待ちなさいッ！」

八坂が体勢を立て直して懷から武器を取り出す。

十五cmほどのナイフ——クナイだ。

八坂は変わった色をしているクナイを三本取り出して啓介に投げつける。

啓介は背中を向けて逃げていたので三本とも背中に突き刺さる。

「ぐうッ！」

啓介の口から苦痛に苦しむ声が漏れる。

一瞬だけよろけたが啓介は走り出す。

「アリエル！」

啓介はアリエルの右手を掴むと引つ張って角を曲がって逃げていく。

「チッ！」

八坂は舌打ちをする。

「（逃げられた）」

林が目を押さえて床を転がっているが八坂は見向きもしなかった。

「（早急に見つけて殺すか？ いや、学校自体を爆破しても……。しかし一般人に手を出すのはルール違反。仕方が無い被害だったということにするか？）」

八坂は床についた啓介の血を見る。

「（これを追いかけていけばアイツは殺せる。それに、あのクナイには毒が仕込まれている。……そう長くは持たない）林、意識はあるかしら？」

「ぐッ……あるさ」

「……一旦体制を立て直すわよ」

「……どうするんだ？」

目を押さえながら立ち上がる林に八坂は答えた。

「学校を爆破するわよ」

【1.4】 委ねられた決断（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。

物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと思います。

【15】 地獄への招待状（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。つまり、この物語はフィクションです。

【15】 地獄への招待状

啓介とアリエルは戦場となった校舎の隣に位置する校舎の四階にある美術室へと退避していた。

学校外へと逃げようとした啓介だったが、門には黒ずくめの人間が数人ほど立っていたので校舎内へと戻るしかなかったのだ。

「ぐッ…ううう！」

啓介は背中刺さったクナイを引き抜く。

血がドロリと流れて床に落ちる。

こういうときは抜かないほうがいいと聞いた事があつたような気もしたが、啓介は刺さっているのが痛くて仕方なかった。

身体の底から何かが出てくるような気分には啓介は口から何かを吐き出す。

赤色の液体だ。

血が塊で啓介の口から出てくる。

「だ、大丈夫!？」

アリエルが泣きそうな目で口から血を吐く啓介を見る。

「（し、死ぬ…）」

毒でも塗られていたのか啓介の身体は思うように動かない。

啓介はアリエルの左肩を見る。

弾痕はどこにも見られない。

「（超再生か）」

アリエルの身体は見た目こそ只の人間だが、実際は人外が存在だ。銃弾を撃ち込まれたくらいじゃ死にやしないのだろう。

「し、しっかりして！」

アリエルは啓介の首後ろに手を添えて啓介に話しかける。

「（携帯電話も壊れた。助けは呼べない。…どうする）」

死にそうだというのに冷静だな、と啓介は頭の片隅で思った。どのみち自分は長くは無い。

良くて数十分、悪ければ数十秒後には死ぬ。

「（…最期の悪あがきでもして、戦うか？）」

アリエルの声を聞き流しながらぼんやりとした意識で啓介は考える。

「（でも、今の俺じゃあいつらの超能力で殺される。さっきは運が良かっただけ…）」

「しっかりして！死んじゃうよお……」

アリエルの瞳から涙が零れ落ちる。

「（今の状態で、最善の、選択…）」

「け、啓介え…」

「（……………これ、しか…ないか）」

啓介は覚悟を決める。

最善の選択で、アリエルを助けてることができて家族にも迷惑をかけないかもしれない最高の手段。

「し、死なないでよお…」

「ア、リエル…」

啓介は顔を上げてアリエルの顔を見る。

アリエルは泣いていた。

啓介は震える右手でアリエルの右手を掴んだ。

「契約、してくれ」

『つまり、逃がしたと？』

「申し訳ありません。しかし、仕留めることはもつ出来ます」

『ふむ…』

「下部組織の人間を使って校舎内にいた一般生徒・教職員は全員催眠術で昏倒させていますので事件の露見も問題ありません」

『ならよい。…傷の修復が終了次第、すぐに死体を回収しに行け』

「はい」

ノートパソコンが閉じられる。

八坂は息を吐く。

「……」

「どうすんだよ」

「死体を確認するわよ」

「わかってるけどよ…腑に落ちないんだよ」

「…あら、昔のことでも思い出した？」

「違え。……あのジジイは何もわかってねえんだよ」

「そうね…。死んでるわけがないわよね…」

二人は知っている。

追い詰められた草食獣は時に信じられない行動をするということ
を。

アリエルは啓介の言葉を疑った。

今、目の前の男はなんと言った？

「…お前を、家族を、俺の世界を守るために…力を貸してくれ」

「…啓介」

啓介はアリエルの右手を掴む。

「俺は、このまま、後悔して、死にたくないんだ。だから…」

「ダメ！」

アリエルは知らないうちに叫んでいた。

「啓介…死ぬ気なの？」

「…」

「私、前にも言ったよ？…超能力は代償を必要とするって」

「…」

「代償って簡単なものじゃないんだよ！？死よりも苦しい苦痛なんだよ！？」

「…」

アリエルは啓介を説得しようとした。

確かに、超能力を得ることが出来たのならばあの二人組みにも勝てるかもしれない。

だが、超能力は完全にランダムであり、啓介に何の力が宿るのかなんてアリエルにすらわからない。

契約が無事に完了したとしても攻撃系でなかったらどうしろというのだ。

「…」

「啓介…」

アリエルは頭の片隅で考えていた。

「（確かに超能力者へとシフトアップすれば啓介は人間の身体を捨てて生き長らえる事が出来るかもしれない。でも、こんな状態じゃ…。いや、何よりも啓介が特攻を覚悟しているっていうことが問題…）」

超能力を得るための代償を乗り越えるには「自分が生きたい」という意志が必要だ。

「啓介、私やアナタの家族の為に戦って死ぬつもりなんですよ？そんなのダメ！」

「…俺が契約して死ねば、アリエルは戻れるだろ…？」

「何を言ってる…」

確かに契約後に契約者が死ねばアリエルは無事に失楽園へと戻る

ことが出来る。

それが啓介の言う守れる手段だと言うのだろうか。

「…ダメ。啓介が自分の為に契約するんじゃないのなら私は契約できない」

「頼む」

「ダメ」

「頼む」

「ダメ」

「…後悔したくないんだ」

「…」

啓介はアリエルを抱きしめる。

アリエルは啓介の契約への意志の強さを感じ取ってしまった。

「（ダメ…だよ）」

「頼む」

「……………約束して、くれる？」

アリエルは啓介を抱きしめ返す。

「生きて帰ってきて…！」

「……………」

啓介は黙り込む。

自分の今の姿はどう見てもただの死に掛けだ。

災害医療の現場ならトリアージで即刻赤色か黒色を押されても仕方が無いだろう。

「…」

「私とずっと一緒に居て…！」

それでも、啓介は目の前の少女を見ていると急速に生への欲望が戻っていくような気がした。

まだ生きていたい、と。

「……………わかった」

啓介はアリエルを離す。

「俺は、絶対に帰ってくる」

啓介はアリエルに宣言した。

「……………本当に？」

「ああ」

「……嘘じゃないよね」

「本当だ。だから……」

啓介は時間が惜しかった。

だからアリエルを急かした。

「契約する、んだね……」

「ああ」

アリエルは目を瞑っていたが、啓介には何かを考えているように見えた。

「啓介」

アリエルは目を開くと覚悟を決めた。

「生きて帰ってきてね」

アリエルは啓介の頬に両手で触れる。

「絶対に、意識を保って」

アリエルは顔を啓介に近づけた。

啓介はこんな状況だというのにドキツとする。

むしろこんな状況だからこそ目の前の異性に種を残そうとする本能が蠢いているのか。

アリエルは目を閉じた。

雲が風で動いたことにより、夕日の光が美術室に差し込む。

光は美術室の床を照らす。

しかし、美術室に映る影は一つだけだった。

客観的時間にして僅か十秒、啓介の主観的時間にして一時間にも感じ取れたその行為はアリエルが離れたことによって終わりを告げた。

「（アリ、エル……）」

啓介は目を見開いていた。

身体中がガンガンに痛いというのにその痛みすらもこの瞬間だけは忘れていた。

アリエルは顔を少しだけ紅く染めていたが俯いていて表情が良く伺えなかった。

啓介はアリエルに手を伸ばそうとした。

「耐えて」

アリエルが何かを呟いた気がした。

啓介はアリエルの呟きを理解しようとした瞬間に身体の奥底の異変を感じ取った。

「（なん、だよ…！？）」

浮かんでくる気持ち悪さに啓介は口を押さえる。

「（はき、そう）」

啓介の口と手の隙間から赤色の液体がドロリと零れ落ちる。

「（血…？）」

何故、と考える前に啓介を頭痛が襲った。

「ぐっ…うううううっ！」

四十度を超える高熱と頭痛に啓介は苦しむ。

苦痛で口が少しだけ開く。

喀血にはあり得ない量の血が零れ落ちた。

「うぐっ……」

もう一つの手で口を押さえようとした啓介は気付いた。

「（鼻からも…血が出てる？）」

鼻の穴からも血が零れていた。

啓介は驚いた。

「ぐっ…うううううっ！」

口から手を離して頭を押さえて啓介は倒れこむ。

頭痛で意識が飛びそうになる。

高熱で意識が朦朧とする。

「（やば…い）」

口から大量の血を零す。

すると身体に至る所で痛みが発生した。

「ぐうつ……わああああ！」

啓介は痛みで床を転げまわる。

全身の神経が鉄でブツリと切られたような痛みを感じて啓介は涙を流す。

全身の感覚が麻痺していく。

苦痛しか感じない。

「（イタイイタイイタイ！！）」

啓介は気がついていなかったが、耳からも血が流れていた。

爪と皮膚の間からも血が流れ落ちる。

啓介は目の前の景色がぼんやりとするのを感じた。

「（意識を、持て）」

実際には意識が朦朧としていたのではなく、目から大量の血が流れていることと頭の毛穴から大量の血が流れていることによる視覚遮断なのだが、啓介は感覚が麻痺して気付けなかった。

啓介は全身の細胞が好き放題に暴れ回るような感覚に襲われていた。

細胞が意志を持って動いている感じた。

身体が引きちぎられそうな苦痛に耐えながら啓介は目を閉じる。

血涙が目も閉じてても大量に流れる。

「（死ぬッ……！）」

血管の中を虫が蠢いている様な感覚に襲われた啓介はもがき苦しむ。

全身の穴という穴から血を噴出しているその姿はこの世のものは思えなかった。

苦痛に指が震える。

というよりも制御が出来なくなっていた。

「（痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い……！）」

感覚が完全に麻痺してしまってもおかしくないのに痛みだけは延

々と啓介を刺激する。

聴覚も視覚も完全に破壊されてしまい、啓介は自身の状況と目の前の景色を見ることが出来なくなった。

真っ赤なのか真っ黒なのか良くわからない色に目の前が染まる。

頭をハンマーで殴られているような痛みを放つ頭痛に耐えながら啓介は考えた。

「（耐える！）」

身体が溶けていくような痛み、身体が燃えるような痛み。

この世のありとあらゆる苦痛を混ぜ込んだような苦痛が彼を襲う。

「（イ……イタ……イタイ）」

思考能力が奪われていく。

自分が今何をしているのかすら考えられなくなる。

自分が何者なのか、自分が何処にいるのか、何故こんなことをしているか。

「（耐……え……ろ）」

血管が破裂した気がした。

骨が全て溶けていくような気がした。

目玉が萎むような気もした。

完全に自分の身体の意志を奪われる。

幽体離脱したような感覚で、身体がなくなった気がした。

身体がなくなってもこの苦痛はまだ続くのか。

「（……………！！）」

言葉にならない苦しみ、口から放たれる。

いや、叫んでいるのか、口を開いているだけなのかすらわからない。

そもそも口を開いているのかすらわからなくなってきた。

「（……………！！）」

啓介は左右から往復ビンタのように顔を蹴られているような苦痛に耐えながら意識を持つとする。

しかし、苦痛は啓介の意識を奪おうと更なる苦痛を与えてくる。

自分が罵られる苦痛だった。

姉に罵られている気がしたような気がしなくも無かった。

何故生まれてきたんだとか、死ねばいいのにとか、お前のせいで人生滅茶苦茶だとか。

アリエルにも罵られているような気がした。

私を失樂園へ戻してだとか、どうして私を苦しめるのだとか。

兄に罵られている気がしたようにも感じた。

お前のせいで生活が大変だだとか、お前の性格がムカツクだとか。妹に罵られているような気がした。

学校のクラスメイトに罵られているような気がした。

街で見かけたことのある人間に罵られた。

見たことも無い両親に罵られた。

幼馴染に罵られた気がした。

世界中の人間に非難されている気がした。

「（ ）」
意識が、心がズタズタに裂かれていく。

「（ 耐 ）」

精神的苦痛と肉体的苦痛に晒されながらも啓介は必死に耐えた。

何故耐えているのかすら忘れたが、必死に耐えた。

理性が潰れても必死に耐えた。

本能が消えても必死に耐えた。

「（ ！ ）」

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

「（ 苦

）」

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

「（ 痛

）」

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

「お前は何故、力を求める」

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

「俺を大切に思ってくれた人を守りたい」

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

『悪魔と契約するということがどれだけ愚かな事か貴様は理解しているのか』

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

「俺が誰も守ることが出来ないっていうのが、神様の決めた運命だつていうなら…俺は悪魔と契約してでも守ってみせる」

耐えた。

耐えた。

耐えた。

『その心意気、良しとしよう。…では、我が名を言ってみろ。さすれば力を貸し与えてやろう。貴様の知っているはずだ。我が名を』

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

「……………^{サタン}悪と闇の征服者」

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

『契約成立だ。我が娘を悲しませるでないぞ』

耐えた。

耐えた。

耐えた。

意識が強制的にプツリと切られていく中、啓介は変なことを思った。

「（…誰と、会話して、たんだ？）」

「八坂」

「何かしら」

「日本政府とギルドの連中が水面下で動き始めているって報告が下部組織から来た」

「そう。…そろそろ行くべきかしら」

ちょうど爆弾の設置を終えた後だったのか八坂は立ち上がる。

「お礼参りで行こうじゃねえか」

林の身体からは先程の怪我が無くなっていた。

「あの二人が何処に逃げたかは知らないけど、校舎内にいるのは間違いない。とつとと消すわよ」

「わぁーってる。…ギルドや日本政府と衝突するのは出来る限り避けたいな。…両方とも強大な組織だし」

二人は校舎内へと入る。

「油断は禁止よ」

「わぁーってる」

「いつでも能力を使えるようにしておきなさいよ」

「わかつてる」

「い……え……」

真つ暗な世界で何かが聞こえた。

「い……え……」

誰かの声だ。

啓介の意識は急浮上していった。

「啓介……」

啓介は目を開ける。

夕日の光が差し込んだので目を少しだけ細める。

「啓介、大丈夫!？」

耳から頭にキンキンと音が響く。

「アリエル……か」

啓介は頭痛の残る頭を右手で押さえながら立ち上がる。

「た、立っても大丈夫なの？」

「大丈夫。……うん、眩暈がするけどすぐに慣れる」

啓介は嬉しそうなアリエルを見ると質問をする。

「……あれから、どれくらい経った？」

「啓介が血を出し始めてから……十分くらいかな」

「……そろそろ見つかるだろうな」

啓介は床を見て絶句する。

「うわぁ…これって全部俺の血？」

「うん」

「よく死ななかったなあ…」

啓介は自分のしぶとさに初めて感心した。

しかしアリエルは啓介に真実を話しかける。

「違うよ」

「えっ？」

「啓介は一度死んだといっても過言じゃないもの」

「どういうことだよ？」

「長くなるけどいいの？」

「気になるから話せ」

アリエルは傍に置いてあつた机の上に座ると啓介に説明を始める。

「啓介は私との契約によつて全身から血を噴出し、地獄以上の苦しみを味わつた。それは覚えているよね？」

「あれを忘れられるつて言うヤツは相当図太いな」

「…啓介は私とキ、キ、キスをして契約したけどね、あれには意味があるの。あ、勿論キス以外の契約方法もあるんだけどね。……私

はね、キスをして啓介の魂を食べたの」

「はい？」

超能力だの天使だの神様だの聞いてきた啓介からすれば今更魂が出てきたところで驚きなど無いのだが、“食べた”という表現には驚いた。

「勿論、魂を失つたら肉体は滅ぶんだけど…私達は魂を食べる代わりに偽魂^{レプリカ}を肉体に埋め込むの。…魂についての説明は長いから省くけど心臓のようなものだと思つてくれても構わない」

「…つまり、心臓が入れ替わつたつてコトか？」

「そういうことになるね」

飲み込みの早い啓介にアリエルは感心しながらも説明を続ける。

「心臓が入れ替わつたことにより、啓介の“人間の血液”は身体から追い出されることとなる」

「それがあの喀血やら血涙か？」

「そういうことになるね」

「うへえ…血液って普通は百二十日くらいかけて入れ替わるんだけどなあ」

啓介がげんなりしたような声を出す。

「…その百二十日という時間を十分に短縮したからあの苦痛が発生したの。“人間の身体”はそんな超人的な現象に耐えられるわけがないし」

啓介はアリエルの向かい側にある机に座る。

自分の転げまわっていた床には血がべつとりとくつついている。

出血多量死の死体以上の血量だ。

「偽魂^{レプリカ}は“超能力者の血液”を生成して身体の各器官に送り出す。勿論、人間の身体じゃ超能力者の血液は劇薬過ぎて苦痛に襲われるんだけど」

「それも苦痛の原因か」

「そうだね。…まあ、十分間の苦痛を乗り越えたら身体中に超能力者の血液が行き渡るからそれで苦痛も止まるんだけどね。…ああ、そうそう。床についてる血も制服についてる血もしばらくしたら気化して消えるから大丈夫」

アリエルの言った瞬間に床や制服から水が蒸発するよつな音が発生する。

赤黒の血は徐々に透けていつて見えなくなる。

「うつへー…」

「……………それにしても、啓介…よく生き延びたね」

「そうだな…」

「病弱な人や高齢者、子供だったらあの過程で九割がショック死しちゃうんだけど…」

「えっ」

「病気を患っていたりする大人でも死ぬ確率が高いから怖かった…」
「えっ」

「十代が一番死亡率低いのもやっぱり健康な世代だからかなあ……」
「えっ」

生命の危機に飛び込んでいたことを改めて思い知った啓介は背筋が今になって冷たくなってきた。

アリエルは机から降りると啓介に抱きつく。

「生きてて良かった」

「え、あ……ああ」

啓介は顔を少しだけ赤くする。

しかし今現在の状況をすぐに思い出して真剣な顔つきへとなる。

「アリエル」

「………わかってる」

アリエルは名残惜しそうに啓介から離れる。

「アリエル、俺の身体に宿った超能力を教えてくれ。契約前にはわからなくても契約後だったらわかるんじゃないのか？」

「……うん。わかるよ」

「だったら教えてくれ」

啓介も机から降りる。

両者は夕方の教室で向かい合う。

「梅村啓介、アナタに宿った超能力は——」

「……」

啓介は唾を飲み込む。

攻撃型能力であってくれれば、ヤツらに対抗することの出来る可能性が見えてくる。

でも他の能力だったら——

啓介は不安を覚える。

アリエルは啓介の不安そうな顔を見て少しだけ悲しそうな顔をして申告した。

「【現実逃避】です」
「ファンタジスタ」

【15】 地獄への招待状（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。

物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと思います。

【1. 6】 夢（げんそう）を右に、現（ぜつぼう）を左に（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。つまり、この物語はフィクションです。

【16】 夢（げんそう）を右に、現（ぜつぼう）を左に

四月九日 午後四時五十七分。

徳島県徳島市 私立創生高等学校に二人組みの男女が侵入。

同日 午後五時一分。

同高校の生徒である梅村啓介が二人組みの男女に強襲される。

同日 午後五時七分。

梅村啓介、ラッキーにより二人組みの男女からの逃亡に成功する。

同日 午後五時十三分。

梅村啓介、堕天使アリエルと契約を交わす。

同日 午後五時二十九分。

二人組みの男女は再侵攻を開始する。

同日 午後五時三十四分。

「…わざわざテメエから来てくれるとはな。 苦しまずに楽に死にたいってか？」

「違いよ。 テメエらをぶちのめしに来たんだよ」

梅村啓介、二人組みの男女と交戦を開始。

「オイオイ…」

林は自分の額に左手を当ててやれやれとでも言いそんな顔をして溜息を吐いた。

「オイオイオイオイ…まさかマジで言ってるのかよ！」

林は自分の目の前の階段の踊り場に立つ啓介を見て大声を出して怒鳴る。

「さっきのラッキーパンチが何度もあると思ってんじゃねえぞ！！」

「そりゃ…そうだろうな。基本的に俺ってラッキーとは縁が無いし」

「ふざけてんじゃねえ！！」

林は目の前が真っ赤になった気がした。

元々怒りっぽいのは自覚していたが、年下のクソガキにこうも簡単にあしらわれるとムカついてしょうがなかった。

林は啓介を睨みつける。

小動物くらいなら射殺せそうな殺気が啓介を襲うが啓介は気にも留めなかった。

「……成程な。テメエ、あの堕天使と交わったか！？」

「…」

「超能力の秘密を全部知って、尚且つ契約するなんざとんだイカレ野郎だなあオイ！」

「…」

「超能力を得たばかりの素人であるテメエが歴戦の俺達に勝てるんでも思ってるのか！？」

「思ってる」

怒鳴り散らす林の隣で八坂は口を開く。

「…堕天使の協力は得られないとわかっていて私達に挑戦するといふのね」

「そうだな。俺は本気で前達を潰す」

「…体から血の後や傷が綺麗さっぱり消えていること、私達が辿っ

ていた血痕の消失。これらからすると貴方は間違いなく契約を交わしていることになる。…そうじゃないと私の毒が回ってとづくに死んでいるもの」

毒が回って死んでいると思ったからこそ二人は啓介をあ場で追いかけなかったのだ。

契約すると怪我が完治するという特性を知らなかったが、相応の代償を払うということを知っていた啓介なら死に掛けの身体に鞭を打って死を超える苦痛を与えるなんて行為を行うとは思わなかったからだった。

「（それに…あんな重傷で契約の儀を行うなんて普通はあり得ないし…）」

八坂は啓介を見つめると懷から拳銃を取り出す。

啓介は黒く光る拳銃を見ても黙ったままだった。

「アナタ、これを見ても怖くないのかしら？」

「そんなちやちな物で俺を殺せるとでも？」

「まあ、思っていないけど。…アナタが超能力者になったというのなら銃弾なんか効かないだろうし」

能力強度がいくつなのかは知らないが、最底辺の超能力者であっても銃弾程度では死にやしないだろうと八坂は考えていた。

超能力者が人間と区別される理由のひとつに『再生能力』が挙げられるからだ。

「（銃弾が身体を貫通したとしても傷は直ぐに塞がる。肢体を切断や脳天や心臓を数発撃たれない限り、超能力者は簡単には死ねない）」

例え車に轢かれようとも一日すれば複雑骨折だろうと完治させることが出来てしまう。

酷い火傷でも二日で完治する。

しかしこの特性にも例外が存在する。

「銃弾や刀で斬られたくらいの傷じゃアナタは殺せない。自身の傷の修復を見たアナタ自身が一番理解してるんじゃないかしら？でも

ね…欠点も存在するのよ」

「…」

「一つ、怪我を負っても痛覚だけは残っているから殺せなくとも動きを鈍くさせたりは出来る。二つ、超能力を用いた攻撃によって負った怪我は通常攻撃による怪我よりも治療が遅い」

「…」

「それに超能力者とはいえ、撃たれたら傷の修復までに数分はかかる。その間にアナタを殺せば良いだけよ」

八坂は弾を装填して銃口を啓介へと向ける。

「大人が二人がかりで子供一人を殺そうとするなんてねえ」

「三十年前なら色々言われたでしょうけど、今の時代じゃそういう考えは古いのよ」

ダァン！と銃弾が銃口から飛び出す。

その銃弾は正確に啓介の顔へと向かって飛んできた。

が、銃弾は啓介に当たることなく後ろの壁に撃ち込まれた。

「遅エ」

啓介は首を動かしただけで銃弾を回避すると階段を蹴って林へと飛び掛る。

「（早い！）」

八坂は啓介のスピードに一瞬だけ目を見開いて驚いたがすぐに対応する。

「甘いぞガキがあー！」

林が啓介の身体を掴もうとするが啓介は身体を捻ってそれをかわす。

「うおおおおー！」

啓介は壁に設置されていた消火器を力ずくで取り出すと林の顔へと投げつける。

「させないわッ！」

しかし消火器は林に当たる直前で何故か破裂し、中身を辺り一面に弾けさせた。

舞い散る粉を吸い込んだのか咳き込みながら八坂は考える。

「（粉末式の消火器！…煙幕のつもり！？）」

「甘えぞおお！！」

しかし煙幕代わりの粉末は一瞬で吹き飛んで視界を元に戻した。

啓介は右手で顔を防いでバックステップで距離をとる。

二人は逃げた啓介を追いかけて廊下へと向かう。

「こんなもんで俺達を倒したつもりかよ！？」

林は啓介に向かって怒鳴り散らす。

「…」

「状況はデメエが圧倒的に不利だぜ！？」

「…」

「何か喋れよおお！！」

「それがお前の能力なんだな」

「…」

啓介の放った言葉に林と八坂は固まる。

「そっちのデカブツが消火器の粉末を吹き飛ばせる程の能力…。まあ俺の見立てじゃ“風を操る能力”か？その能力を持っている。そして、こっちはまだ詳細がよくわからねえが、女のほうはデカブツに投げた消火器を破裂させるほどの能力…。“物を斬る能力”か“物を破裂させる能力”か？よくわからねえけど」

「…一瞬でそれを見抜くなんてアナタ本当に平凡な高校生かしら？」
「さあーてね。平凡を嫌った平凡な高校生なのには変わりないかもしれないけど」

啓介は左手を開いたり閉じたりしながら喋る。

「まあ、能力を披露してくれたんだし…俺も能力を披露してあげないと割りにあわねーよな」

啓介は左脇を締めて右手を横へと翳して目線を前へと向ける。
そして、右足を後ろへと下げる。

「俺の能力は…」

啓介は左足に力を入れて前へと飛び出すと右掌を廊下の窓ガラスに当てて前へ押し出すように力を入れる。

「コイツだよッ!!」

啓介の右掌に弾かれた窓ガラスはバキンと音を立てて割れた。

それに習うように啓介と二人の間にあった全ての窓ガラスが音を立てて割れると同時にジェットエンジンのような音を立てた暴風によって二人の元へと飛んでいった。

「!!」

「ファンタジスタ【現実逃避】…?」

啓介はアリエルの言葉を反復するように呟く。

「人類の使っている用語で説明するならば…この能力は暗黒種ダークマターと呼ばれるカテゴリーに属する超能力であり、人類と私達が邂逅して以来の歴史上一度もこの世に発現しなかった“未知の超能力”と呼ばれるものに該当するの」

「未知の超能力…」

アリエルは両手の指で遊びながら啓介に説明を始める。

「簡潔に言ってしまうならば“相手の超能力をコピーする能力”。

コピーした超能力は同属性…この場合は暗黒種ダークマターにカテゴライズされている能力を除いてどんな超能力でもコピーすることができる。例えばそれが地球上を氷河期へと変えるほどの冷機を操る能力だったと

しても相手の記憶や感情を改変する能力だったとしても相手と喋らずに交信する能力だったとしても…同属性でない限り、どんなに強大な力であろうとどんなにしょうもない力であろうと完全にコピーすることが出来るの」

「…完全コピーか」

よくマンガやアニメに登場するコピー系能力は“不完全コピー”ばかりだ。

それは勿論、強さのインフレを抑えるための措置であるとわかっているのだが…啓介には気になる点があった。

「完全コピーって…強すぎる気がするんだが」

こういう強大な力には制約がつくものである。

先程の暗黒種^{ダークマター}はコピーできないという点以外での欠点は無いのだろうか？

「勿論、制約も欠点も数多く存在しているよ。私達の身で扱うならそんな制約は存在しないんだけど、元となるハードが人間である以上…制約を設けないと人間の脳に能力が収まりきれないの」

「つまり、脳の容量や人間というハードでは本来扱いきれない力つてコトか」

「そうなるね」

アリエルは溜息をつく。

「まあ、啓介の手にしたこの力…^{ファンタジスタ}【現実逃避】は制約が多い方だね。同属性をコピーできないだけではなく、左手で能力に触れないとコピーできない、触れた回数しかコピーできないっていう制約が存在しているし」

「左手限定？」

「正確に言えば左手の指先から左肩までかな。…コピーした能力自体は右手でも使えるけど、コピーする時は絶対に左手だけでしかムリ。あと、別の能力発動中でも左手自体にはコピーできる能力が残っているから防御としても使えなくもないかもね」

「どついう意味だ？」

アリエルからのアドバイスに素直に耳を傾ける啓介だったが、このアドバイスだけは気になったので深く説明してもらったことにした。「さっき触れた能力をコピーするって言ったけど…それは“能力者”本体に触れてもコピーできるし、“能力者が放った超能力”に触れてもコピーできるの。だから…例えばけど、能力者が放った火球に触れてもその能力をコピーすることが出来るの」

「熱いじゃねえか」

「大丈夫。左手に当たった超能力攻撃は無効化されるから触れても熱くないし冷たくないよ」

「そういう問題じゃねえだろ…」

「ぐうおっ!？」

林は風でガラスの破片を纏った暴風を跳ね返そうとするが相手側のほうが威力が高いこともあってか跳ね返せずにガラスの破片をモロに受ける。

「くっ!!」

八坂は顔を背けて背中ではガラスの破片を受け止める。

暴風はガラスの破片を二人の肉へと押し込む。

二人の身体のうちここに切り傷が生み出され、肉が裂ける。

二人を通り抜けた暴風は奥の壁へと激突し、消え去る。

「くっ………っそおおおおおお!!」

林が激昂する。

激昂したせいで顔中の傷口から血の流れる量が増えたが、彼は気にしなかった。

「俺の…俺の目がアアアアアアア！」

林は左目と右目を押さえる。

ガラスの破片で切れたようだ。

林は激痛に耐え切れずに床を転がりまわる。

床を転がる度に床に散らばったガラスの破片が林の身体に突き刺さる。

「いくら超能力者といえども…切断された肢体の再生や脳の再生、臓器の再生は難しい。それは目玉にも適応されると踏んでいたが…見事に正解だったみてえだな」

啓介は目を押さえて痛がる林を見下すように言葉を放つ。

「どれだけ力が強くても盲目になった以上、ソイツは使い物にならないハズだ。…あとはお前一人だな」

啓介は八坂を指差して宣言する。

八坂は苛立ち混じりに啓介に向かって言葉を吐く。

「……確かにこの男はもう使い物にならないかもしれない。敗因は慢心ね。だからこそ、次は本気でいくわ」

「…本気出すなんて大人気ないな」

「四の五の言ってる場合じゃないのよ」

八坂は懷から鎖で繋がれた棒を取り出す。

「ヌンチャクか…」

「只のヌンチャクじゃないわ。ダイナマイトを埋め込んだヌンチャクとでも言うべきかしらね」

「…マジかよ」

啓介は後ずさる。

どれくらいの威力かは知らないが、ダイナマイト直撃なんていくら超能力者でも死ぬに違いない。

「さて、今から本気よ」

「ッ…！」

八坂のファイティングポーズに啓介は身構える。

「【現実逃避】は“触れた回数しか能力を行使できない”という欠点以外に大きな欠点がもう一つ存在するの」

アリエルは窓ガラスの淵を指でなぞりながら啓介に説明する。

「それは“相手の能力を知覚していなければならない”という点。相手の持つ能力を実際に『見て』『触れて』『覚えて』『感じて』おかなければ、能力を行使できないの。勿論、相手の能力を知覚していない状態でも触れればコピーはできる。だけど、使うことは出来ないの」

「厄介だな。他人から聞いた程度じゃ能力を知覚したって言うことにはならないのか？」

「ならない。アナタ自身が“相手の能力がどういう能力なのか”を知っておかなければならないの」

「つまり、実際に体験して初めて使えると？」

「そうなるね。…だから、偶然触れた相手が雷を操る能力者だったとするけど、その場合啓介はその人が実際に能力を使っているシーンを見なければいくら“雷を操る能力”だと理解していても使えないの」

いくら数学の公式を理解していても実際に問題を見てみなければ公式を活用できるかどうかかわからないようなものか、と啓介は納得する。

「俺はあいつらの能力をコピーして戦うにしてもあいつらの能力がどんな能力かを見破らないとダメってことか…」

啓介は困ったように呟く。

あの二人が超能力者だというのは何となく感じ取れるし、あの身

体能力も人間のものではないと推測できる。

だが、実際に能力を見た事が無いのだ。

悩む啓介を見ていたアリエルは啓介に最後の説明を投げかける。

「正直な話、今回の戦いは本当に不利な戦いになると思う」

「…どうしてだ？」

ファンタジスタ

「【現実逃避】が『最強』にも『最弱』にもなれる理由だけだね、
“手数の多さ”が挙げられるの」

「どうということだ？」

アリエルは胸元で両手の指を絡めながら不安そうな顔で説明をする。

ファンタジスタ

「【現実逃避】は相手の能力をそのまま写し取る能力。逆に言えば、
相手と同じ能力で戦うことになる。炎の能力者に炎で挑むようなもの
のだもの」

「！」

「啓介は今回が初めての戦闘。敵は二人。…黒服の女相手に黒服の
女の能力で戦っちゃダメだよ」

相手と同じ土俵で勝負すればどう見ても自分が負けるのは目に見
えている。

ファンタジスタ

「相手が知らない能力で相手に戦いを挑めるから【現実逃避】は『
最強』と呼ばれているの」

複数の能力で相手を追い詰めることが出来る（＝手数が他の能力

ファンタジスタ

者に比べて多い）からこそ、【現実逃避】は最強と呼び名高い能力
の一つとして君臨しているのだ。

逆に何もコピーしていないということは相手の能力を写し取って
戦うしか道がないという訳であり、相手と同じ土俵で戦うこととな
る。

そうなれば、敗北は必然となる。

ファンタジスタ

だから【現実逃避】は『最弱』とも呼ばれている。

「…あの二人組みの能力を解析して二つの能力を上手く使い分けて
戦うことが唯一の勝利に繋がる手段…ってことか」

啓介は自分の不利さを実感し、不安になる。

「私達^{コピト・イーター}の身体に触れても啓介は能力をコピーすることができないの。
私達^{コピト・イーター}は一人が数百万もの能力を有しているから…」

つまり、複数の能力を持つ相手に触れても能力は何もコピーできないというわけになる。

アリエルの加護は受けられない。

「（本当に背水の陣だな）」

啓介は息を吐くとアリエルの頭を右手で撫でた。

「（超能力者としての榊村啓介が生きている左手じゃなくて人間としての榊村啓介が生きている右手で撫でることがコイツに対する信頼の証か…）」

アリエルは少し赤い顔で啓介にされるがままになっていた。

「…アリエル、お前はもつと上層の階に移動するか隣の校舎へと移動してくれ。不可能な場合は俺が時間を稼いで移動ルートを確保する」

「…その方が、啓介の邪魔にならないっていうのなら」

啓介は頷く。

「…じゃ、頼んだぞ」

「（あの女の攻撃を回避して倒した男に触れる！これで相手を叩きのめすしかない！）」

啓介は八坂の又ンチャク攻撃を回避すると林に向かって走り出す。八坂は又ンチャクを左手で持ち直すともう片方の手で拳銃を取り出して啓介に向かって撃つ。

啓介はまだ馴染まない身体を限界まで動かして銃弾を回避する。

「甘いわ」

八坂が右手で空気をなぎ払うような動作を行う。

啓介は嫌な予感がして頭を屈める。

すると啓介の頭上の天井の蛍光灯が粉々に碎け散った。

「（爆発させる能力！？いや…）」

「考えてる暇じゃないわよ！」

啓介が能力の解析に頭を奪われた瞬間だった。

八坂が右手に持っていた拳銃で啓介の背中を撃ちぬいた。

熱を持った鉛が肉をブチブチと裂いていく感覚に啓介の余裕が失われ、恐怖が心の底から上がってくる。

「（痛…ッ！）」

啓介は一瞬だけ目の前が真っ白になるがそれでも構わずに走り、うずくまって倒れている林の頭に左手で触れる。

「死になさい！」

八坂はもう一度啓介の背中を撃とうと引き金を引いたが銃弾は出なかった。

「（弾切れ！？）」

「デメエが死ねッ！」

啓介はくりと身を翻して右手で拳を作ると目の前の壁を殴るような動きで空気を殴った。

殴られた空気は竜巻のような暴風の矢を生み出し、八坂へと放たれる。

「（まずいッ！）」

八坂は両腕で前を防御したが叩かれたことによって生み出された空気は八坂の腕の骨を砕いて八坂の身体に直撃する。

「がつ…あ…あああ！」

骨が碎ける音が廊下に響いたような気がするくらいに痛そうな骨の折れ方をした八坂は廊下の奥へと弾き飛ばされる。

「まだまだアッ…！」

啓介は左手で林を五回殴って気絶させる。

そして八坂の元へと走り出す。

「（間違いない！あの女能力は“爆発する能力”でも“破裂する能力”でもない！）」

啓介は右足で床を力強く踏み砕く。

すると足の裏で強力な風が発生し、啓介を一気に吹き飛ばす。

「（恐らくは“指定したものを膨張させる能力”！威力は人を殺せない程度に弱い。しかも指定には時間がかかる上に精度は甘い！）」凝縮が出来ない辺り、相当不便な能力だと啓介は考えた。

凝縮も操ることが出来るのなら相当使い勝手が良くなるだろう。

「（空気や風は膨張させても逆に威力を強くさせたりとデメリットしか存在しない！だからアイツは攻撃を能力で受け止めることが出来ないんだ）」

啓介は立ち上がる八坂の顔に向かって右足で蹴りを繰り返す。

鼻の骨がぐしゃりと鳴る音がした。

八坂が壁に叩きつけられ、ズルズルと力なく床に落ちていく。

啓介は風の発動を止めて着地する。

「……う……う……」

八坂は呻き声を上げながら折れた腕を使って立ち上がろうとする。啓介はそばに転がっていたダイナマイト入りヌンチャクを持ち上げる。

「（これをどうにか処分してこいつらをどうにかすれば終了…かもしれないけど）」

どうするべきか。

「（殺したらコイツらと同じ穴のムジナだ。それだけは絶対に避けたいし、家族にも顔向けできなくなる）」

色々一般人から爪弾きにされる啓介だが、それくらいの倫理観は備えているし、殺されかけたからといって殺し返すというのも憎しみを憎しみで塗るようで啓介的に好きではない。

「（本当に大事なものを守るためなら人殺しだってできる、なんて

いうけど……」

啓介は警戒を解かずにヌンチャクを床に落とすと八坂から距離をとる。

八坂は口から血の塊を吐き出す。

フードは既に外れており、顔があらわになっている。

二十代後半くらいの……歌舞伎町辺りにいそうなキャバ嬢のような中々美しい顔立ちをしていたが、血まみれで髪の毛もボサボサ、その美貌は見る影も無い。

「はは……」

八坂は力なく笑う。

啓介は眉を顰めると八坂に一步だけ近づく。

「何笑ってんだよ」

「ははは……」

「答えるよ」

「……………」

「……………」

「……………アンタの、勝ちね」

八坂の顔は見えない。

ガラスの無くなった窓から夕日が差し込む。

左から刺さる夕日の光に目を細めながら啓介は八坂の顔を見る。

「このゲーム、アンタの勝ちよ。……おめでとう」

「ゲームだあ？こちとらお前らのせいで超能力者になっちまうわ身体中ズタズタにされるわで大迷惑だ」

「……………超能力者になってしまった以上、アンタはこのまま生き続ければ間違いなく“二十四番目”へとシフトアップされる」

「二十四番目……ねえ。いい加減何を示してるのか知りたいもんだが」

「……………これからわかることよ」

的を射ない回答だ、と啓介は思う。

「……………私達はアンタに敗北した。……既に下部組織から上層部や通信を傍受している他組織、スパイを通じて世界中の超能力者や裏世界

の組織にアンタの存在は知れ渡るでしょうね」

「それがどうしたってんだ」

たかが一人の能力者が増えたくらいでどうこうする問題ではないはずだ、と啓介は思う。

「アンタのその能力、“コピーする能力”で間違いないわね」

「さあてね」

「…そんな能力がカテゴライズされるカテゴリーなんて一つしか存在しないわ。」

「…」

「明確な線引きがされない不明確な能力のカテゴライズされるものなんて暗黒種ダイクマターしかないわ」

暗黒種。

アリエルも言っていたが、どうやら他のカテゴリーよりも注目されやすいらしい。

「アナタって本当に運の悪い男ね」

「…」

「“獄炎に座す者”に気に入られ、“二十四番目”と予言され、手にした能力は世界でまだ十三種類しか確認されていない超希少種の暗黒種ダイクマター…」

「……そうかい」

「まあ、これから始まる絶望の日々に苦しんで死ねばいいわ」
八坂は血を口から吐きだす。

「世界中の組織はアナタをどうするか議論するためにしばらくは刺客をよこされることも無いでしょうね…」

「つまり、しばらくは安全って訳か？」

「そうなるわ……」

ゼエゼエと苦しそうに息をする八坂だったが、啓介は同情しなかった。

「……でも、こうやって刺客を撃退し続けていくつもりかしら？」

「うるせえ。撃退するに決まってるだろ」

「……………その無謀さ、キライじゃないわ」

八坂は折れた腕を動かして胸を押さえる。

「……私達はそのうち下部組織によって回収されるから心配は要らないわ。……まあ、処分はどうなるか知らないけど」

「……」

「安心していいわ。……さっきまで敵だったヤツの言葉なんて、っ
て思つかもしれないでしょうけど……裏組織は証拠隠滅だけは一流だ
から……明日から何事も無かったように生活が戻るでしょうね」

「……」

「……もう行きなさい」

「……」

夕日の光が二人をさびしそくに照らしていた。

「……」

啓介は踵を返して廊下を歩いて去っていく。

勝負は、終わったようだった。

午後五時四十八分。

「……そう。私達はまだ生かしてもらえるのね」

『そついうことになります』

「……ということは、組織にとって私達はまだ死んでもらいたくない
つて訳ね」

『……………』

「……まあ、薄々感づいてはいたけど……私達はあの少年を覚醒させ
るための餌だった訳ね」

『そうでしょうね』

「あの少年を“二十四番目”にして組織にでも加盟させる気だったのかしら…上は」

『恐らく』

「…ま、そんな考えは安易過ぎるけど」

『？』

「感じたわ。…今日、あの少年と戦って感じた」

『何を…ですか？』

「…“悪魔”って実在するのね」

『？』

「上に報告しておいてくれないかしら」

『はい』

「…“梅村啓介を子供だと思って甘く見るな”ってね」

その日、四月九日。

世界中の多くの人間にとっては何の変哲も無い一日だったかもしれない。

しかし、世界の真実を少なからず知る者たちにとっては大きな衝撃を受けた一日であり、この世界に新たな不安定要素が生れ落ちた一日でもあった。

『遂に“二十四番目”となる因子がこの世に生れ落ちた』

『“二十四番目”は東アジアに住んでいる』

『“二十四番目”は男子高校生』

『“二十四番目”は日本の四国に住んでいる』

インターネットのとある巨大掲示板の片隅の片隅。

一般人が見向きもしないようなインターネットの辺境の地にソレちえのリンクはいた。

『“二十四番目”は世界のパワーバランスを大きく乱す存在へといずれ昇華するであろう』

『“二十四番目”は“獄炎に座す者”との契約により、“新世代の能力”を手中に収めた』

『五十年間空席であつた“0”へと居座る可能性を持つ存在である』

『有史以来の記録に全く記されていない未知の能力』

『現在の序列は第二十四位』

何が書かれているのかは普通の人間なら理解は出来ない。

だが、普通ではない人間には理解できた。

「…ふうーん、哀れな新入りさんが落ちてきたんだ」

青色の長髪を持つ美しい女性は大都会を歩きながら呟いた。

「新世代の能力…。これまた厄介な」

金髪であり、海沿いのカフェで休暇を楽しんでいた男性は呟いた。

「獄炎に座す者…。これまた面倒な堕天使が降りてきたものだ」

赤と黒が混ざった髪を持ち、玉座に座っていた男性は呆れたように呟いた。

「…日本人？四国？」

茶色の短髪を持つ真剣を二本携えた少女は呟いた。

「空白の座席がドンドン埋まっていくなあ」

黒色の髪を持ったジャージ姿の少年は楽しそうに呟いた。

「…どんなヤツが現われようとも興味なんざねえよ」

黒色の髪を持った軍服の少年は舌打ちと共に呟いた。

「日本人かあ…。やっぱり信仰の関係かな」

薄紫色のツインテールを持った少女は半裸でベットに寝転びながら呟いた。

「二十四位かあ…。格下には興味ないね」

死体の上に座りながら黒髪の少年は呟く。

「……そう」

光の差さない建物の奥で黒い長髪の少女は悲しそうに呟いた。

「悪魔と契約しちゃう辺り、相当のイカレ野郎ってことか」
檻の中で緑色の髪を持った男性は呟いた。

「コイツは遊んでくれるのかな？」

金髪の少女は誰もいない公園で呟いた。

「…私にとって有益となってくれるのなら使ってやろうじゃないか」
高層ビルの最上階から街を眺めていた初老の男性は呟いた。

『二十四番目は世界を真っ白に変える存在へとなるだろう』
『ありとあらゆる概念を打破し、ありとあらゆる存在を変える』
『新世代の能力を用いて国を滅ぼすであろう』

「国？滅ぼす？どんなバカだよ…」
雲を眺めていた男は呟く。

「中々楽しませてくれそうな玩具じゃないの」
玉座に座る少女は呟いた。

「真っ白？どういうことだ？」
銃を組み立てていた少女は呟く。

「破壊者ってわけか？いやでも…ゼロ…？」
誰もいない楽屋で男性は呟く。

「日本人…。なら殺すしか道はないな」

暗闇の中、息絶えた女性の傍らで男性が呟く。

「男子高校生。さぞかし精神が歪むでしょうね。こんな世界だと」
台所で料理を作っていた女性は呟く。

「悪の破壊者なのか正義の破壊者なのか…。気になりますね」
誰もいない職員室で女性はボソリと呟いた。

「……日本人か」
男性は満員のバスの中で呟いた。

「食べると美味しいのかしらね…」
高級レストランで大量の料理を前に並べた女性は呟いた。

「…いい男かもしれないわね」
地下室で女性はうつとりとした声で呟いた。

「ようこそ、このクソツタレな世界へ」
教室で大勢の学生が喋っている中、女性は楽しそうに呟いた。

この日、世界は大きく指針を変えた。
それが絶望へと繋がっている道なのか希望へと繋がっている道な

のかはまだ誰も知らない。

【1.6】 夢(げんそう)を右に、現(ぜつぼう)を左に(後書き)

追記(2012年1月5日)

一部の文章を修正したり追加したりしました。

物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと思います。

【17】 愚者（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【17】 愚者

日本のある平凡な町に住むちよつと変な高校二年生である柊村啓介は、あの日に起きた事件で大切な人達を守る為に天使の様な姿を持った悪魔と契約を交わし、魂を売り飛ばして超能力なんていうこの世のあらゆる物理法則を無視したとんでもない物を自分の身体に宿した。

その結果、謎の襲撃者を撃退し、どうにか危機は去った訳だがその代償はとんでもなく大きかった。

「啓介、言い忘れていた事があつたんだけど…」

「何だ？今更な気がするが聞いておこうじゃないか」

「啓介の魂つてどうなったと思う？」

「え？……能力と交換して……どうなったんだ？」

「…契約つてどういう意味かわかる？」

「意志の合致による法律行為だったか？」

「…つまり、私と啓介の間にはルールがあるって訳になるの」

「ルール？」

「そう。掟」

「……………よくよく考えたらそうなるわな。で、俺とお前の間にはどんなルールがあるって言うんだ？」

「私の欲を満たすこと」

「…は？」

ゴッド・イーター

「神々の超越者には、食欲・睡眠欲・性欲に続く四番目の欲…第四の本能のようなものがあるの。それを契約者が満たし続けてくれることが契約の延長に繋がるというわけ」

「契約の延長…。ってことは、契約って破棄できるのか!？」

「え。で、できなくはないよ…？私の第四の本能を満たし続けてく

れなければいいんだから」

「ナルホド。では、契約の破棄を――」

「でも、契約が破棄されたら死ぬよ？」

「……………」

「契約が破棄されればアナタの身体から偽魂^{レプリカ}が消失するの。でもそうしたら偽者とは言え魂の無くなった身体が生き続けられるとでも？」

「デスヨネー」

「啓介の魂は私が持っている。啓介が私との契約を破棄したり、私の欲を満たしてくれなかったら啓介の魂は自壊して輪廻転生のループにも入れずに永遠に幽霊になって世界中を彷徨うしなくなるからね」

「……ちなみに、アナタ様の第四の本能って？」

「『好奇心』」

「……………」

「それじゃ、死なないように頑張ってね。こればかりはどうしようもできないし」

「なんという暴虐。先に言えと啓介は怒ってやりたがったがあの時にアリエルの静止や話を跳ね除けて契約を迫ったのは啓介自身である。」

「まあ、背中に毒を塗られたクナイが刺さって生命が風前の灯なんという状況で悠長に話を聞ける奴がいるわけはないのだが。」

「（つまり、俺はアリエルを“楽しませ続ける”必要があるって事かよ……）」

「本来のアリエルは人間の取る行動に潜む潜在意識や人間の生き方に興味を抱いていた存在であり、数百年以上もの時間を使って人間界を観察し続けていた。」

「なので彼女は普通の人間の普通な生き方をあまり好まない傾向にあるのかもしれない。」

「平凡な一生よりもデンジャラスでエキサイティングな一生を選ぶ」

タイプだ。

つまり、啓介はアリエルにとって面白くない行動（＝普通の人間と同じ行動）を取ってしまったえば、機嫌を損ねてアリエル持つ啓介の魂はアポトーシスを組み込まれた細胞の如く自ら崩壊することとなる。

「なんという無理ゲー。辞退したくなってきた…」

「辞退してもいいけど、その時もバッドエンドだから気をつけてね」
… 勿論、啓介はまだ生き延びたいのでアリエルとの契約に渋々付き合うこととなった。

とは言ってもやる事は超能力を得る以前と変わりがなかった。

そもそもあの超能力は対超能力者専用というどこぞの右手で幻想を殺す主人公と同じ日常に全く生かせない能力だったので不良に絡まれたからって超能力で一撃必殺！というわけではなかった。

もう少しマシな物はなかったのか、と啓介は思ったりもした。

まあ、動体視力の強化は対人戦ではこの上なく役立った点、神経の強化も以前までの自分の限界以上の力を出せるという事で学校での体育も楽になったという点では大いに感謝していたのだが。

それに、アリエルに「啓介の自然体を観察したいから私の機嫌を伺う為に生きるのはナシね」と言われてしまった事もこの平凡な生活が続いている理由の一つにもなっている。

「（…まるで主従関係だな。俺が主だったら危険過ぎて即刻警察行きなんだろうけど）」

このように主従関係的な関係を結ぶことになってしまった啓介であつたが、別にアリエルから命令されたりアリエルのご機嫌を伺っ

たりせずに地位は対等として過ごしていた。

四月二十日。

土曜日なので学校はない。

啓介は長期休暇時はアウトドア派であるが、普通の土曜日や日曜日はゲームしたり本を読んだりネットサーフィンしたりして過ごすインドア派という大変中途半端な人間であり、その通りに今日は自宅に引きこもっていた。

そして何もやる気が起こらなかった啓介は自室でテレビゲームをして遊んでいた。

「（暇だな）」

やる気がいまいち感じられない表情で壁に張り付けられた薄型テレビの画面を見ていた啓介だったが、ゲーム内で操作しているキャラクターは無駄のない動きで敵を撃破していた。

アリエルも同室しており、彼女はベットに寝転んで啓介の後姿を眺めていた。

傍から見ればまさに同棲状態。

「ねえ、啓介」

「なんだ？」

しかし会話からはラブコメの匂いも雰囲気も全く感じられない。むしろ友人同士の会話のような雰囲気だった。

「身体、痛くない？」

「大丈夫だろ。あの超再生って後遺症とかあんの？」

数日前の校内での戦闘によって負った傷のことを言っているのだ

ろう。

確かに背中を銃撃された啓介だったが傷は完全に塞がっており、銃弾を受けたなんて言っても一蹴されそうなくらいに傷跡も残っていない。

「ないけど……」

「だったら大丈夫だろ。俺の身体に異変は生じてないと思うぞ？」

身長は百七十四cm。

体重は五十二kg。

体格も髪型もなに一つ変わっていない。

「……そうだね」

「心配しすぎだよ」

ゲーム内では啓介の操作するキャラクターが無傷で最難関のステージのボスを葬っていた。

相当な腕を持っているようだ。

「……でも痛かったでしょ？」

「当たり前だ。俺は撃たれ慣れてる訳でもないし、喧嘩なんて小学生の頃までだ」

喧嘩や争いをあまり好まなかったというよりは力が無かったので刃向かえなかった、という表現の方が正しい。

「超能力者になって動体視力や反射神経が一流アスリートですら敵わないレベルになっていなかったたらあいつらには普通に負けていただろうよ」

勿論、相手側も超能力者であるので同等クラスの身体能力は持っていたのだが。

「今回は、奇跡だったんだろうよ」

本来起こるはずのない奇跡。

アリエルに視えた啓介の本来の運命では一度たりとも彼の前に現われなかったモノ。

「（……俺の運命がどうだったかなんてアリエルにしかもわからないことだ）」

今更だが、アリエルが嘘をついていただけの可能性だつてなくはなかったのだ。

だが、それでも啓介はアリエルを信じた。

人見知りする啓介が、出会って数日にも満たなかった存在を信用したのだ。

「あの信用がアリエルによつて操作されたものだつていうのなら今俺がこう考えていることだつて存在しないはずだし…。アレは、間違いなく俺の本心…ってことでいいんだよな」

啓介はアリエルを信じた。

それは間違いなく運命とやらに大幅な軌道修正を仕掛けたと啓介は今、直感で感じていた。

「（運命が捻じ曲がつて神の加護を受けられなくなったとしても、俺は俺だけのものだ）」

だから啓介は改めて誓った。

神ではなく自分自身に。

「（俺の世界を…自分で守っていくんだ）」

——同時刻　日本のとある場所にて

「たあ！」

人の近寄らない山奥の滝壺の傍の巨大な岩の上に少女がいた。

外見から判断するに年齢は十六・七歳であり、高校の制服を着用している。職業は高校生であろう。

上半身はカッターシャツだけ着用しており、ブレザーは傍に捨てられていた。

髪型は数センチくらいの小さなポニーテールだったが、結び方から察するに普段からの髪形ではないようだ。

「はっ！」

少女の腰には黒を基調としたゴスロリチックな銀装飾がつけられたベルトが装着されており、とても長いので少女の腰を二周半くらいしている。

しかもそのベルトにはゴスロリチックな装飾がされている銃のホルスターの出来損ないのようなものが二つ程左腰のベルト部分に繋がっており、そこに長さ一メートル程の刀を仕舞う鞘が差されていた。

靴も黒色の厚さ二cmくらいの厚底レザーブーツでパンクとゴスロリが入り混じったような装飾がされていた。

「てあっ！」

剣道に熱心な少女と捉える事ができるかもしれないが、彼女の服装が剣道とはかけ離れすぎて彼女を剣道少女だと捉えることが出来る人間は少ないだろう。

むしろ、“殺し屋家業の女剣士”のほうが似合うくらいだ。

「……ふう」

少女は左手と右手に持っていた日本の真剣を鞘に仕舞うと肩からぶら下げていたタオルで顔の汗を拭った。

時刻は昼間で人がめったに近寄らない山奥。

刑事ドラマで殺人事件の舞台に使われそうなくらいに立派な滝だ。土曜日の昼間に高校生の少女が一人で滝つぼにいたなんていうことと自体が異質すぎるのだが、彼女はそういう他人からの目を一々気にするような性格をしているわけではないのでそのことを異質と感じる者は誰一人としていなかった。

「……………」

少女はブレザーを持ち上げると埃や砂を払って左手の人差し指と中指にかけて背中に垂らした。

そして二メートルも下の地上へと軽く跳躍して降り立つ。

厚底ブーツじゃ只では済まないような地形なのだが、少女は怪我もせずに麓へと向かって歩き始める。

「……」

少女は右手でベルトに付いていた携帯電話専用のホルスターから携帯電話を取り出す。

そして片手で携帯電話を操作し、とあるインターネットのページを開く。

「……」

そこは、インターネットの辺境の地。

誰も見向きもしないくらいに寂れた場所にひっそりと存在する場所。

この世全ての超能力者の動向が書き記されている場所。

『第十七位、異常なし』

「相変わらず、何処から視えてるんだか……」

少女は忌々しそうに文面を眺める。

しばらく文面を眺めていたが急に画面が切り替わり、音楽が携帯電話から流れてくる。

着信だ。

「……」

少女は少しの間だけ出るべきか悩んだが、やがて小さな溜息をついて電話に出た。

「もしもし」

『御機嫌よう。体調はいかがですかね？』

「セクハラなら他所の女に言っただけだよ」

『失礼な。社交辞令ですよ』

「黙れ。私達の世界に社交辞令なんてものがあるの？」

少女はイライラしながら電話の相手と話す。

『まあ社交辞令なんてございませぬけどね』

「……用件をさっさと話せ。一体何？」

——内容はわかってるくせに、と少女の心に誰かが囁く。

『……わかってるでしょう？』

「うっさい。私はアンタたちのお遊戯けんりよくあそびの駒として働くほど暇じゃないし、駒になるなんてイヤよ」

少女の口調が徐々に苛立つてくる。

『全く……仮にも貴女の上司なんですけどね、私って』

「だったら上司らしくしろ。あと、用件だけを話せ。アンタと話しているとイライラしてしまうが」

『やれやれ……。まあ私も忙しいですし要件だけ言ってしまいましうか』

「……」

『アナタに上から緊急任務が届いています』

「知るか。なんで私が上の為に血塗れにならないといけないのよ」

少女の歩く速度が少しだけ速まる。

小石をジャリジャリ踏み鳴らして進んでいく。

『いくら我々として駒として十分に機能しない玩具を雇い続けるのは不可能なのですが』

「……」

『アナタの正体が世間に露見せず、アナタの世界が保たれ続けているのは我々のおかげでしょう？』

「私の世界なんてとくに壊れてるわよ。……五年前に」

『まあ、貴女は立っているだけでも十分にパワーバランスを我々にとって良い方に傾けさせてくれる要因なので他の下っ端よりは使い物になるんですがね』

「だったらそれでいいじゃない」

『ダメですよ。たまには動いているところを見せなければいけませんし』

つまり、デモンストレーションだ。

「……イヤよ。やる気出ない」

『相変わらずですね。自分に関係の無いことには一切の興味も関心も持たないそのスタイル…』

「知るか。他人の目に構うなんてこと、もう疲れただけだつての」
少女は電話の相手のお願いを一方的に断り続ける。

しかし、電話の相手の機嫌が悪くなることは一切なかった。

『では、やる気が出るような情報を教えいたしましょうか』

「はあ？」

少女は怪訝な声で聞き返す。

『貴女の“世界”とやらに残る最後の希望の命が狙われているようですよ』

少女は歩みを止める。

『貴女がこの世界に足を踏み入れた理由は“あなたの世界を構成する要素の大半が壊されてしまったから”でしたね』

「……」

『復讐の為にこの世界に入った貴女が“残った自分の世界”を大事にしているのはよく理解しています』

少女の携帯電話を持つ手に力が入る。

『“貴女が貴女でいられる最後の希望”。その者の命を狙っている輩がいるのです』

「……………誰？」

『それを知りたいのなら任務、受けてくれますね？』

「言え」

『……………受けてくれますね？』

「……………チッ！」

少女は殺意を込めた舌打ちをする。

誰に向けたものかは彼女だけが知っていた。

『……ありがとうございます。知恵のリングによれば作戦決行日は五月五日だそうです。それまでは足取りが不明確で掴めません』

「……」
『ですので、作戦決行日に襲撃地点に貴女が赴いて直接保護するという形に——』

バキッ、と音が少女の手元から聞こえた。

「（……餌にするってコト？）」

少女は怒りに任せて握り潰した携帯電話を重要なチップだけ抜いてその場に捨てる。

そして少女は再び歩き出す。

「（私に怨みを持つ奴等の計画？それにしても知恵のリングに作戦が筒抜けにされているコトを考慮できていない。私を狙った犯行なら上の奴等が私を寄越さずに勝手に対処しやがるハズ）」

少女は山道に到着する。

ここからは登山者の通行が多いので人がよく通る場所だ。

「（つまり、私を狙った犯行というよりは“あの人”を狙った犯行？）」

彼女の記憶の底に眠るあの方は、自分の大切な親友だ。

自分とは違ってこのような世界に足を踏み入れるようなバカではなかったはずだ、と彼女は考える。

「（……あの人に“何らかの価値がある”からあの人を命を狙うということになる。……価値？何の？）」

少女はバス停の前に立つ。

人は他に誰もいない。

「（……調べてみる必要はありそうね）」
少女の決意は誰にも知られること無く少女の底に沈んでいった。

「ふむ…」

「どうしたの？」

夜、啓介はテレビを見ながら唸った。

隣で黄色のパジャマに着替えているアリエルは尋ねる。

「いやぁー…俺ってホントに変わったんだな、と」

テレビでは宇宙人やらUMAやらの特番がやっていた。

こういった特番から超能力という言葉が消えて世界はもう随分と経過した。

「超能力者…かぁ」

「……その、御免ね」

「謝らなくていいっての。…俺が決めたことなんだし」

啓介はアリエルを見ずにテレビを見ながら答えた。

「…ただ、どうやって生きていくべきなのか迷ってただけだよ」

「………」

「超能力者は世界に少ないっていうことはわかってる」

「そんなことないよ。この世界に超能力者ってザコ含めて二千万はいるし」

「………えっ？」

今更暴かれた衝撃の真実。

「だからこそ、己の保身や世界征服みたいな野望のために巨大な組織が出来たりしているんだよ？」

「………そういえばそうだな」

啓介は溜息をついてソファの背にもたれる。

何かショックだったらしい。

「…とは言っても、世界中に数十億もいるうちのたった二千万。…」

異端であることには変わりないと思うけど」

「……だろうな」

アリエルは微笑む。

「啓介は、異端になってどう思った？」

「別に。……ただ、“自称・性格思考以外普通の高校生”っていう看板は降ろさないとと思っていただけだ」

「これからどう名乗るの？」

「……他の奴に比べて比較的普通でありたい高校生”でどうよ？」

「……相変わらずネーミングセンスがないね」

アリエルは残念そうな目で啓介を見る。

「うるせえ！」

啓介はふて腐れて頭をソファの背もたれに置いて視線を天井へと移した。

「まあ……私はそんな啓介が大好きだからいいんだけどね」

アリエルの言葉が隣から聞こえてきた。

「……あつそ」

「顔真つ赤だよ」

「やかましい！」

人間を辞めても、目の前に化け物が現われても、命を狙われても、日常はそんな簡単には変わらないものなのだ、と啓介は改めて実感したのだった。

【17】 愚者（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。

物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと思います。

【2-1】 通行禁止（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【2-1】 通行禁止

五月四日。

非日常はひょんなことから舞い降りてきた。

「中華料理が食べてみたい」

自宅のリビングで学校生活の疲れを癒すために思う存分だらけていた自称・性格以外はマトモな高校生であるんがむらけいすけ 梅村啓介に彼のパートナー（決して恋愛の意味ではない）のアリエルはこう言った。

「…はあ？」

突然何を言い出すのだろうかと思介は隣に座っていた外見超絶美少女のアリエルを眺める。

今、テレビの番組で中華料理が特集されているが…それに影響されたのだろうか？

「いきなりどうしたんだよ？」

「中華料理とやらが食べてみたい」

「いや、それはわかった。俺が聞きたいのは理由だ」

「テレビで特集されていたから」

「…短絡的過ぎる」

啓介はここ一ヶ月の間の食事を思い出す。

超能力者になったことで脳の性能と回転率が人間時代に比べて大きく飛躍したこともあってか全部思い出せた。

「確かに、和食と洋食ばかりで中華料理は一度も食べてはいないな」「デスヨネー。だから私は食べてみたいの。ドゥーユーアンダスタン？」

地味にイラッと来る英語の発音だったが、啓介は何も言わなかつ

た。

「じゃ、明日中華料理でも食べに行くか」

十年以上独りで暮らしてきた啓介であつたが、料理は得意ではない。

人に振舞えるレベルのものを作ることが出来るだけであり、料理に対するこだわりも興味もいまいち存在しない。

決してよくアニメやマンガの主人公などが持っているような家事スキルを有しているわけではないのだ。

だから啓介は自身があまり食べたいと思わない料理は作ることが出来ない。

中華料理はその部類に当てはまる。

「えー…明日あー？」

アリエルが不満そうな声をあげるが啓介は溜息を突いて状況を説明する。

「あのなあ…。今の時間を考えてみるバカ。現在の時間は午後八時三十七分。さっき夕食も風呂も終わってあとは寝るだけだ。…今から店に行くつもりか？」

ぐっ、と声を詰まらせるアリエルに啓介は追い討ちをかける。

「だいたい食ってばかりだと太るぞ。俺のパートナーがピザだとか勘弁願いたい。だから中華料理は明日な。Do you understand？」

アリエルに比べて無駄に綺麗な発音かつドヤ顔で啓介は言い返す。中学時代の三年間、英語を専攻していただけのことはあつた。

アリエルはうーっと不満そうに唸るがハツとすると左手を顎に当てて何かを考え込む。

「そうだね…そうだねそうだね」

「？」

「明日、啓介はこのテレビに出てる場所に中華料理を食べに連れて行ってくれると」

「は？」

啓介が口を開けて啞然とする。

「今からこの場所に行くには距離があるし、何よりもお店が閉まつてゐるからね。うん、啓介って相変わらず優しいね」

何というポジティブな思考回路。

啓介は嬉しそうなアリエルの笑みに一瞬だけ詰まるが直ぐに反論を開始する。

「待て待て待て！テレビに映つてゐる場所がどこだかわかつてんのか！？神戸だぞ神戸！日本国の近畿地方にある兵庫県の県庁所在地だぞ！？そして俺達の住んでいるここが何処だかわかつてんのか！？」
「日本国の四国地方にある徳島県の県庁所在地である徳島市だよな？」

「わかつてんじゃねーか！わかつてて言うとかお前マジ鬼畜！」

「大丈夫だよー。距離にして百キロメートルだよ？全然大丈夫。一時間とちよつとで着くでしょ」

「距離なんざどーでもいいんだよ！金だよ金！」

「大丈夫なんじゃないの？数日前にお兄さんからお金が振り込まれたんでしょ？」

「バカか！？一か月分の生活費だよ！」

「でも一昨日お兄さんから『ゴールデンウィークに友達や彼女と思つ存分に遊べる分のお金を振り込んでおいた』って電話来てたよね？」

「なんで知つてやがる！？あの時、俺は一階のリビングにいてお前は二階の俺の部屋にいただろ！？」

ゴット・イーター
神々の超越者は地獄耳がデフォなのかと啓介は戦慄する。

アリエルは嬉しさを隠さずに言い続ける。

「啓介って日頃から友達いないじゃない？」

「何で知つてんの！？俺言つたっけ？」

「いや、私が千里眼で啓介の学校生活覗いてるの」

「ストーリーかよ！？いくらパートナーでもやって良いコトとダメなコトってあると思うよ！？」

確かにアリエルくらい美少女なストーカーだったら大歓迎だが、と啓介は思う（ただし人間限定で）。

「だって他にすることないし」

「イヤイヤイヤ！この前ゲーム買ってあげたじゃん？」

「クリアした。主人公達のレベルも限界まで上げて道具も全部ゲットして裏ダンのラスボスも撃破した」

「すごい！とんでもないゲーマーだよこの子！」

「まあ、とにかく啓介は友達いないんだからさ……」

「……（アリエルに友達いないって言われるのもツライな）」

ちなみに啓介は友達が出来ないんじゃないかと友達を作らないだけだと考えている（本当かどうかはわからない）。

「か、彼女といけばいいじゃない？」

アリエルが両手の指でもじもじとしながら恥ずかしそうに啓介に言う。

「お前、数刻前に俺に『彼女いない』って発言したよね？俺をそんなに苛めて楽しい？」

彼女が出来ないという懸案に関しては啓介は『彼女を作らないんじゃないかって彼女が出来る程のツラではない』と考えているので既に半分諦めている。

「（なんで不細工なのに生きてるのかだって？そりやお前…配られたカードで勝負するしかねえだろが！）」

誰に言ってるのかわからないが啓介は心の中で吼えた。

まあ『整形』というイカサマもあるので彼女を作ることとは可能といえは可能なのだが。

「け、啓介は何を言ってるのかな？私、そんなコト言ったわけ？」
「言ったよ！」

アリエルは頬を少し赤く染めて啓介に尋ね返す。

「で、でもさほら…か、彼女ってパートナーと同義じゃん？パートナーといえば二人組で、彼氏彼女の関係も二人組！パートナーもカップルも同義だし、大丈夫じゃない？勿論、私は恋愛感情的な意味

で啓介が好きだと言っている訳ではないからね？変な勘違いはダメだよ？私達は清く美しく正しいパートナーとして付き合っていくんだから！」

「（何を言っているんだろうかこの人は）」

「彼氏彼女の関係をカップルと言うでしょ？カップルって元々はフランス語の『結びつき』っていう意味の言葉から来てるじゃない？それで『結びつき』といえは同義語で『繋がり』『絆』『腐れ縁』『相関』『関係』とかあるじゃん？パートナーっていう関係だって十分に意味は同じだよ！？だ、だから…私が彼女になってもいいんじゃないんでしょうか！？」

最後の方は敬語かつヤケクソ気味に言い放っていた。

「ちよつと待て。お前は俺をどうしたいと？」

「だ、だからわ、わ、わ、私の彼氏になりませんかね！？」
アリエルは赤面で叫ぶ。

「仮に俺とお前が彼氏彼女の関係になったとしても神戸に中華料理を食べに行くということに関して何のつながりも無い気がするんですけれど」

「か、か、彼女連れで神戸に行けますよ！？」

「イヤ、お前の姿…他人に見えないじゃん」

傍から見れば只の妄想彼女と歩いているだけである。

うわ、痛々しい。

まだ最近売れている恋愛シュミレーションゲームを持ち歩くほうがマシである。

…いや、そつちも同じくらいに痛々しい。

「言ってなかったけど、契約後の神々の超越者ゴッド・イーターって自在に姿のオンオフが可能になるんですよ？」

「マジで！？」

確かにそれならアリエルは外見だけは今世紀トップクラスの美少女（しかし中身は怪物かつ精神年齢は憶測だが数千歳）なので連れて歩くとこの世の我が同胞や永遠の怨敵の心に再起不能レベルの傷モテないおとこたち イケメンども

を与えることが出来そうだが、多分ムリだろうと啓介は思った。

「（俺達ってそういう雰囲気出せそうにないだろうし）」

当事者にはそう感じ取れるらしいが傍観者の目にはどう映るのやら。

「だ、だから如何でしょうか!？」

アリエルが聞いてくる。

「そうだな……」

「う、うん」

「ん……」

「うん」

「わかった」

「本当に!？」

驚くアリエル。

喜びよりも驚愕のほうが少し大きいようにも見える。

「明日、神戸に二人で食いに行くか」

啓介はアリエルに向かって言い放った。

「……そうか、そうですね。私って何やってるんだろ。バカ。私ってホントバカ……。冷静に考えたら私達ってそういう関係になったらダメだもんね。別に掟で禁止されているわけじゃないけど、異類婚姻譚なんてゴメンだ。って啓介言ってたし……。アレ、だったら私が人間になれば解決するんじゃないや……。いやいや、啓介と私はプラトニックな関係であって……」

「何をボソボソ言ってるの? オマエ」

待望の中華料理食へに行くってのに何を落ち込んでいるんだと啓介は疑問を抱く。

「いや、食へに行くのは嬉しいんだけど……。何ていうかちょっと

自分の理性の脆さに落ち込んでいただけ」

「ふーん（そっぴゃコイツ、あの学校での戦闘時も理性を失ってたし…結構理論派に見えて実は感情に流されやすいのかもね）」

啓介は立ち上がるとテレビを消す。

「それじゃ、俺は寝るけど…どうする？」

「ふえっ！？こ、これはまさかの『シャワー浴びてくるから』的な発言の類語！？い、いやでも…私達はプラトニック・ラブな関係であり…あれ、プラトニック・ラブってどういう意味だっけ？ってか私達は友情を築く関係であって…いやでも正直求められたら断れる自信がないというかなんていうか…。いやいや確かにそういつた行為は可能といえば可能ですけど…」

「（一度テンパると連鎖してテンパり続けるみたいだな。しかし何て言ってるかよく聞こえん）」

「いやいやいや。こういう時ってどうするんだっけ？えーっと『不束者ですがよろしくお願いします』だっけ？いやいやアレは嫁入りする時の…って私達結婚も婚約もしてないってば。落ち着け、落ち着け私。私達は健全なお付き合い…じゃなくて健全なパートナー付き合いをしている訳であって…」

「どうすんの？一緒に寝るのか？」

啓介の自宅に空き部屋は存在していない。

妹の部屋を勝手にアリエルに使わせるとどうなるのかわかったものではないし、兄や姉の部屋なんてとっくの昔に物置になっていて目を背けたくなるような物量がそこには存在している。

だから啓介は自分の部屋のベットにアリエルを寝かせて自身は床に布団を敷いて寝るような生活を送っている。

「い、一緒に寝る！？こ、これはやっぱり誘っているとしか…いやでもアレだよ…アレ？アレってなんだっけ？」

「いい加減、話聞いてくれない？」

翌日。

五月五日。

啓介とアリエルは神戸へと向かう高速バスに乗車していた。

ちなみにアリエルが数刻前に車内で「よくよく考えると初めてだよね。二人で遠いところにお出かけするの」なんて無邪気な顔で啓介に言ったものだから啓介の顔が真っ赤になったりもしたのだが、啓介の赤面も時間が経ったのでだいぶ収まったようだ。

アリエルは窓側の席で外の景色を楽しそうに眺めている。

啓介は通路側の席で背もたれに倒れながらアリエルを眺めていた。

「（まあ、こんなに楽しんでくれるなら浪費しても構わないかもな）」

「

啓介はそんなことをぼんやりと考えながら行き先について持っているだけの記憶を掘り起こそうとする。

元々、県外から出ることなんて数えるくらいしか経験の無い啓介にとって神戸は未開の地だ。

歴史や地理の授業で何度か名前を聞いたことがあるくらいである。

「ねえ、啓介。神戸ってどんな場所？」

記憶の採掘作業がアリエルの質問で中断され、啓介は意識をアリエルへと戻す。

「何て言っただんだ？聞いてなかった」

「だから、神戸ってどんな場所？」

「（調べてなかったのかよ）」

啓介のパートナーとなって以来、人間界の常識について色々と熱心に調べていたアリエルだったが、未だに土地に関する情報にまでは十分に手が回っていないらしい。

勿論、啓介も実際に行ったことなんてないのでネットやテレビで得た情報しか知らないのだが。

「神戸。日本国の兵庫県の県庁所在地として機能する大都市であり、日本全国に十二箇所しかない『帝都』の一つだな」

地理の授業で教師が言っていたことをそのままアリエルに伝える。
「『帝都』？」

「えーっとな…確か二〇〇七年に新日本政府が始動させた『不死鳥計画』ってヤツで生み出された日本を代表する巨大都市のことを言うんだ」

「日本を代表するくらいに大きいの？」

「第三次世界大戦の末期に日本で革命が起こったこともあって終戦後かなりゴタゴタしたらしい。それで新日本政府が東京に集約されていた政治機能や他の機能を全て分散させたんだ。その分散先が十二箇所の帝都」

「ふーん」

アリエルは熱心に啓介の話に耳を傾ける。

「帝都ってのはそれぞれ何かに特化されているんだ。例えば、今から向かう神戸は『学問・研究』に特化された都市だから別称で『学園都市』って呼ばれていたりする」

「つまり、勉強に特化されているって訳だね？」

「そういうこと。他の帝都も…仙台だと『工業』に特化された『工業都市』だし、福岡だと『経済』に特化された『経済都市』だ。那覇だと『観光』に特化された観光都市、広島だと『軍事』に特化された『軍事都市』ってな」

「ほうほう…。でも神戸に中華料理の町があつたよね？」

「そりゃ、学問に特化されているだけであって他の機能もある程度はちゃんと充実しているさ。神戸は帝都になる前から観光地として有名だったらしいし」

啓介はアリエルの質問に答えていく。

「ふーん…。で、気になったんだけどなんで、日本政府はそうやって何かに特化された街を作って他の街をほったらかしにしたの？」
「それはだな…ん？」

啓介はアリエルより向こう側の窓に目を向ける。
アリエルもつられて窓へと視線を向ける。

「おおっ……」

「綺麗だね」

海だ。

二人の乗っているバスは淡路島から神戸の間に架かる橋を渡っていた。

徳島と淡路島を結ぶ橋の時はアリエルがバスに対してはしゃいでいたこと啓介自身も車酔いに耐えていたのでお目にかかる機会を逃したので二人ともその景色に見惚れていた。

「（年に合わないんだろうけど……こういうデカイ橋から見る海って初めてだから少し興奮するな）」

啓介もアリエルも黙って景色を眺めていた。

他の乗客たちも景色を見ているようだ。

「（なんかこういうの見てると今日、コイツと来て良かったなって思うな）」

啓介は気が抜けていた。

仕方が無いだろう。

アリエルは超絶美少女だし、今日はゴールデンウィークであつたし、休日であつたし、初めて見た景色であつたし――

あの日のようなことがあつたのもあの日だけだ。

彼の頭からは完全に超能力のことが消え去っていた。

それはアリエルも同じであり、彼女も完全に油断していた。
だから――

「ピンポンパンポン、只今より当車両は行き先を神戸から“地獄”へと変更しまーす」

忍び寄る魔の手に気づくことができなかった。

【21】 通行禁止（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。

物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと思います。

【2・2】 天罰少女（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【22】 天罰少女

啓介は何が起こったのか理解できなかった。

海に見惚れているといきなり自分達の前の座席に座っていた男が立ち上がった――

「よお、元気にしてたかな？新人クン」

赤色の髪に唇につけられたピアス。

身長は百八十センチくらいで、年齢は…大学生くらいだろうか。服装はパンクな雰囲気を感じさせる。

そして服装や雰囲気似合う凶暴そうな顔つきだった。

「(まさか――)」

啓介は心に溢れていた幸せな感情が急速に冷えていくのを感じた。そして、すぐさま目の前の男を排除することを決めた。

「平和ボケしすぎてたなア…オメエ」

啓介は右手で顔をガツと掴まれるとそのまま後ろに押された。

アリエルが何かを言おうとした瞬間、男は楽しそうな叫び声を発しながら啓介の頭で窓ガラスを突き破った。

最後尾座席にいた啓介は後ろの窓ガラスごと男によって外へと押し出される。

「(ガツ――!!)」

啓介はバスから叩き落され、コンクリートの地面に叩きつけられてゴロゴロと転がっていく。

「さアて、楽しいお遊戯の時間だ！」

男もバスから飛び降りて床に伏せている啓介の前に降り立つ。

「いやいやいや…超能力者二人相手に善戦した新人だって聞いてたから…ちつとは期待したんですけどねエ」

啓介はフラフラと立ち上がる。

窓ガラスに叩きつけられた際にガラスで切ったのか左耳と後頭部が切れて出血していた。

「いつてえ……………」

袖を捲くつていたので両手の腕の部分の皮膚はボロボロに破れており、痛々しかったが啓介はチラリとだけ見ると慌てもせずに放っておく。

額を右手で押さえながら啓介は男の顔を見る。

「いきなりなこと過ぎて脳の処理が追いつかないってか？」

「うるせえ…。十分に目の前の現実を直視してるっつーの」

刺客が現われた、という現実には啓介は最悪な気分へと変わる。

あの時、あの八坂が再び刺客が現われる的な発言をしていたことを啓介は思い出していた。

「お前、あの時の二人組みの仲間か？」

「まっさかア！俺とアイツ共は完全に敵対組織！敵討ちする義理なんざねえーよ！ギャハハ！」

啓介は去っていったバスのことを思い出す。

今頃お騒ぎになっているかもしれないが、こんな超非現実な戦いに一般市民を巻き込むわけにはいかないので放っておいてもらいたい。

むしろ、アリエルのことが心配だった。

「…まあいいさ。刺客だか何だか知らないけど…俺の幸せになる予定だった休暇を邪魔したことで地獄送りで許してやる」

「オイオイ…お前、俺が誰だかわかってんの！？^{LEVEL5}小上位能力者だぜ！？」

「知るか」

また新しい単語が出てきたが啓介は気にも留めない。

恐らく強さのレベルを表しているのだろうが、啓介はどうでもよかった。

「（邪魔するならぶっ飛ばす）」

啓介は左手の指をワキワキと動かす。

「（残っている超能力はあの時のゴツイ男の風の能力が四回。これをアイツの超能力の解析及びコピーに回して回りにある物を使いな

がらアイツの能力と残った風の能力で倒すしかない」

ほぼ一月ぶりになる超能力の発動なので無事に発動できるか少し心配だったが、啓介は左手で拳を作ると男に向かって走り出す。

「うおおおお！！」

「おッ、やる気か？」

交通量が多い橋の上での戦闘だ。

車には十分に気をつける必要がある。

啓介は男が右手を挙げたのを見て右足を前に押し出して急ブレーキで止まり、その勢いを使って身体を右に回転させて左足を使って風の能力を発動させる。

「だあぁっ！！」

啓介の蹴りから生み出された暴風の塊は男の身体を目掛けて突進する。

「悪いな。俺にそんなものは通じねえ」

男は向かってくる暴風の塊に向かって右手を振り下ろす。すると暴風の塊は真ん中でスパツと綺麗に真っ二つになって男の左右を通り過ぎていく。

そして橋のガードレールを突き破って消滅した。

「…なんか恐ろしいものをみた気がするな」

啓介はポツリと呟き、後ろから走ってきた車をかわす。

クラクションを鳴らされたがそんな心配をしている暇は無いと啓介は頭を切り替えた。

そもそも、あの暴風に反応できるなんて人間の動体視力を超えている。

いや、超能力者なので確かに人間以上の動体視力は有するのだが、あの二人組みでさえ反応できなかった暴風をあつさりと対処してしまうとは。

「…で、オマエはこんなもんで俺を倒せるとでも？舐められたモンだぜ！この不知火紅蓮様しらぬいくれんもよお！」

「ソウデスネー」

適当に返事を相槌を打って啓介は考える。

「（憶測だが“斬る能力”か？あと、指定した物を斬るというよりは…腕自体が剣みたいな物であって…それを使って斬っているだけみたいだな。でも、“かまいたち”のような能力にも見えなくも無いんだよな）」

啓介は右手で目の前のもをなぎ払うような動作をして風の能力を発動させる。

右掌から放たれた風の弾丸は周りの風や空気を取り込むように回転しながら大きくカーブして不知火の左側面へと突っ込んでいく。

しかし、不知火は左腕でガードするように風の弾丸を受ける。

すると、風の弾丸は真つ二つに裂けて消滅した。

「ハッ！同じ手をちよつとばかり変えたからって俺に敵うとでも——」

「思っていますよ」

啓介は不知火が弾丸を斬った瞬間に風に乗って凄まじいスピードで不知火の懐へと潜り込んでいた。

「テメエがどんな能力を持つてるのかイマイチわかんねえけど…どうやら勝てなくはなさそうだな！」

「ぐっ…ああ——！！」

啓介は左ストレートを不知火の腹に風の勢いを利用して打ち込む。何かを潰した様な感触がしたが啓介は気にせず右ストレートを続けて叩き込む。

風に乗ったままの状態で啓介は身体を捻らせて左肘を不知火の顎に打ち込んでトドメに右足の踵で不知火の首を狩り飛ばした。

不知火は橋のガードレールを巻き込んで橋の外へと吹き飛ばされて落ちていった。

「思ってたより、身体が無茶な戦闘に馴染んできたな…」

啓介は自分の左手を見る。

最初の時の皮膚が破れた傷の修復が始まっていた。

ハイスピードカメラで皮膚の再生を見ているような気分だと啓介

は気味悪くなつて目を背ける。

「（アイツの能力に関しては色々と推測があり過ぎて使用できるかどうか微妙だな）」

風の能力も後一回しか使用することが出来ない。

刺客がどれくらいの頻度で来るのか、刺客がどんな強さを持つているのかは知らないが少しでも手数を増やすためにもアイツの能力を知っておきたいというのが啓介の考えだった。

啓介は橋の隅に移動して車との事故を防ぐ。

「色々と考えたけど……やっぱり一番有力なのは――」

「“身体が刃になる能力” って知ってるか？」

今度の啓介の対応は早かった。

風的能力を使って自分のいた場所から慌てて緊急回避をする。

その瞬間、啓介が先程まで立っていた地面が斬られた豆腐のように崩れ落ちていった。

「ッ――！！」

「油断してやがるなあ……。俺の死を確認するまで油断するんじゃないよ……！」

不知火が崩落した地面の部分から這い上がってくる。

口から血を吐いていたが、不知火本人はまだピンピンとしていた。「オマエが表の世界の住人だってことはわかってる。だから人殺しも出来ない。する勇気がない」

不知火は自身の左手の指全てを刃に変形させながら啓介に近づく。「だがな、俺達裏世界じゃそんな甘ったれたルールが通じねえんだよ……！」

「オマエはもう表世界の住人じゃねえ……！」

「……」

「俺に勝とうが負けようが、オマエはどのみち裏世界に落ちていく！」

「……」

「超能力者の世界ってのはそういうものなんだよ！！」

不知火はニヤリと口角をあげると啓介を見つめる。

「かかってこいよ。本気で俺を殺してみろ。じゃなきゃ、死ぬぜ？」

不知火は奇声をあげながら啓介へと走り出す。

啓介は不知火の左手振り回しを身体を捻ってかわすとバックステップで距離をとる。

不知火はそれでも直ぐに距離を詰めて啓介に対して腕を振り回す。

啓介は必死に全ての攻撃をかわしていく。

「オラオラオラオラア！！どうすんだオマエ！？死ぬぞオ！」

「（ヤバッ……！！）」

近接戦は喧嘩慣れしていないこともあってか啓介はかなり苦手だからこうやって敵の攻撃をかわすだけでもかなり精神力と体力と集中力を浪費させる。

相手に触れるなんて不可能過ぎる。

「ハッ！」

不知火は啓介の首目掛けて右手を伸ばす。

啓介は首を刃にして攻撃を受け止めた。

「成程成程オ……。コピー能力かあ？」

「（使っちゃった……。でも仕方ねえ！）」

これで使える能力は後一回。

啓介は迫ってきた車をよけるためにもバックステップで再び距離をとる。

「（とにかくここじゃ不利だ！場所を変えないと……）」

「逃がすか！」

不知火は自身の左足を刃に変形させるとサッカーボールを蹴るように地面を斬った。

不知火から放たれた斬撃は啓介へと向かって突き進む。

「やべっ！」

啓介は全力で身体を動かして斬撃を回避した。

「まだまだア！」

不知火は左手で地面に突っ込んで五本の指で斬撃を放つ。

しかし五つの斬撃は啓介を狙ったものではなく、地面を抉り取っていく。

「（あの野郎！まさか…）」

不知火が下で唇を舐め回した。

次の瞬間、コンクリートの地面がガラガラと音を立てて崩れていく。

「うおおお！！！」

啓介は全速力で走って崩れていくポイントから離れようとする。

しかし、崩落のスピードは早い。

急ブレーキで停車していた車や反対車線の道路まで巻き込んで海へと沈んでいく。

そして啓介も――

「うわああああああああああああ！！！」

大概の人間が不安を覚えるであろう浮遊感に啓介の背筋が凍りつき、恐怖を覚える。

足が何にもついていない感覚というのは気味が悪い。

啓介が手を慌てて伸ばすが橋には届かない。

下は海。

学校の授業で水泳を取っていたくらいの水泳経験しかない啓介では泳ぐことは出来ても岸にたどり着くのは不可能に近い。

それに橋の下の潮の流れは非常に複雑であり、人間が泳げるような場所ではない。

「（死ん、だ――！？）」

啓介の心に絶望が浮かび上がる。

やはり神の加護を捨てた存在に奇跡は起こらないのだろうか。

しかし、新たな運命は啓介を見捨てなかった。

ドサリツと啓介の身体が何か堅い物の上に落ちる。

「いつ……たあっ……！」

いきなりの予想だになかった苦痛に耐える啓介はひっくり返って背中を摩る。

そこで啓介はあることに気付く。

「（……水じゃない？）」

啓介は目を見開いて起き上がる。

そこには妙な光景が広がっていた。

啓介と共に落ちた車や瓦礫が宙に浮いていた。

否、橋へと向かって上昇していた。

「（一体……何が……！？）」

啓介の乗っていた瓦礫も橋へと引き寄せられ、瓦礫が橋の地面にくっつく。

まるで最初から何も無かったかのように元通りになっていた。

啓介は遠くにいる不知火の姿を見る。

彼の顔は驚愕に溢れており、それは彼の仕業ではないということを示すと同時に彼の計算外の事態でもあるようだった。

啓介は呆然と目の前の光景を見ていた。

「な、何が起こったってんだよ……！」

不知火が狼狽しながら吼えた。

「誰の仕業だアアアッ……！」

「私よ」

啓介の頭上から声が聞こえた。

啓介は上を向くが太陽の光でよく見えない。

ただ、啓介の記憶を刺激させるような声だった。

「誰だデメエツ！あのクソガキに仲間がいるなんて聞いてねえぞ！」
「仲間じゃない。私は上からの命令を遂行するためにやって来ただけ」

橋の命ともいえるケーブルが少し揺れる。

そして啓介の前に何者かが降り立つ。

「大体、任務以前に困るのよ。四国と近畿を結ぶ重要なラインを断絶させるなんて日本政府どころか超能力の存在の漏洩を嫌う組織から総スカン喰らっても文句言えないわよ」

少女だ。

年齢は十六・七くらいで啓介と同世代に見える。

「それにアンタ見てるとすごくイライラする。あのムカツク女を思い出させるツラね」

「あア！？」

ハイヒールのレディースブーツに似たゴスロリとパンクが入り混じった底の厚さ五センチ位のレザーブーツが啓介の目に映る。

最低限の肉がついたスラリと伸びている美脚、黒を基調としたゴスロリ的な装飾がつけられたとても長いベルトと短いスカート、銃のホルスターのようなものに差されている二本の物騒な得物。

「ま、アンタの事情なんて知ったこっちゃないし、それ以前に私は上からの任務もアンタの所のボスの思惑にも興味は無い。私は私を守る為にここに来た」

「訳のわからねえことをべちゃくちや喋ってんじゃねえぞ！」

茶色のショートカットに両手に装着された銀装飾の黒色の指なしの手袋、鎖骨が見えるくらいにボタンが外されたカッターシャツ。

少女の格好はどう見ても一般人ではなかった。

異様な雰囲気纏った少女は溜息をつくと鋭い目つきで不知火を見つめる。

「……ま、いいわ。私も済ませたいことが沢山あるのよ。だからとつとここで――」

そして少女は左腰のホルスターに差されている日本刀に左肘を乗

せて宣言する。

「消えろ」

不知火が何かを言い返す前の行動だった。

少女は超能力者でも簡単には再現できないようなスピードで不知火の懷へ飛び込む。

そして、左手で得物を抜いて全てを終わらせるための動作を行う。少女が抜いた惚れ惚れするような美しさを持った日本刀は不知火の胸に赤い線を作る。

そして、少女は右手で不知火の首を掴みあげ、左足を地面に固定して右手を思い切り振る。

不知火は悲鳴を上げることなく橋から落ち、海へと消えていった。

僅か十秒。

たったの十秒で啓介が苦戦した相手は瞬殺されてしまった。

啓介が驚愕で声を出せずにいると少女は啓介のほうを振り返り、啓介の元へと歩いてくる。

姿が近づくに連れて啓介の昔の記憶が強く刺激される。

こんな服装の知り合いなどいないと啓介は思ったが、脳は強く思い出せと命令する。

後姿ばかりで見えなかった顔が見える。

とても美人だ。

アリエルとはまた別の美しさを感じさせる。

というよりはアリエルとは真逆のベクトルを進んでいると言えるような美しさだ。

何もかもがアリエルとは違う。

アリエルを竹取物語のかぐや姫のような儚さと美しさを持った美

人と表現するのなら、こちらはキリツとして芯の強い大和撫子のよ
うな美人だ。

守られるというより守る——そのような表現が良く似合う。
それと同時に啓介は思い出した。

「……………マジかよ」

その記憶は啓介がまだ子供だった時の記憶。
自分が小学生になり始めたころの記憶。
自分の手を引っ張って常に遊んでいた存在。

「まさか……………」

背は大きく伸びた。

顔つきもあの頃と比べてとても変わった。

雰囲気も服装も全てが変わった。

声も変わった。

だが、何かが啓介を確信させたのだった。

「理奈…か？」

「久しぶり……………啓介」

十年前に別れた梅村啓介の幼馴染、かこいりな 梶理奈は突然の再会に戸惑い
ながらも歓迎するような微笑を見せた。

【22】 天罰少女（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。

物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと思います。

【 2 3 】

底辺の抱いたパラノイア（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。つまり、この物語はフィクションです。

【2 3】 底辺の抱いたパラノイア

啓介は目の前の美少女の再会を意味する言葉を聞いて啞然としていた。

目の前にいるのは彼の幼馴染であつた梶理奈。

理奈は右手を啓介に差し出す。

「あ、ああ………」

啓介は理奈の手をとって立ち上がる。

立ち上がった啓介は自身の服をパンパンと叩く。

埃や砂といったゴミは落ちたものの、最初のバスから叩き出されてローリングした際の服の傷ばかりはどうしようもなかった。

皮膚のように再生するわけではないので啓介は自身のみすばらしい格好を見て溜息をはく。

「大丈夫？」

「ああ……何とかな」

啓介は自身の右腕を見る。

ぐしゃぐしゃに裂けた皮膚の再生が始まっていた。

理奈はそれを見ると顔を強張らせて啓介の右手をガツと掴む。

「お、おい!？」

「………啓介、なんで皮膚が再生してるの？」

理奈は啓介の皮膚の再生を見ながら尋ねる。

「え、い、いや………」

どう答えたらいいのか迷う啓介に理奈は核心をつくような言葉を出す。

「まさか……契約した？」

「………ああ」

理奈の顔が恐ろしいような気がして見れない。

啓介は変わった幼馴染に少しでも恐怖を覚える。

「……とにかく、ここはまずいわ」

啓介は辺りを見回す。

炎上する車やひび割れた地面。

人は逃げてしまったのか放置された車だけが残っている。

「何が？」

「こんな異変を警察が放っておくわけが無い。私達も直ぐに離脱しましょう」

「…そうだな」

「私の能力で一時的に地面を復活させているだけで私が能力を解除したら直ぐにこの場所は崩落するわ」

理奈は啓介から手を離すと歩き出す。

そして捨てられた赤色のスポーツカーに乗り込み、啓介に手招きをする。

「（奪うのかよ！？）」

啓介の驚きを含めた視線に理奈は平然と言い返す。

「非常時よ。津波や地震の際に運転手がキーをつけたまま逃げるのと同じこと。非常時だから使えるものは何でも使わせてもらおう。ほら、乗って」

理奈はキーを回して車のハンドルを握る。

啓介は隣の座席に座る。

「…もう兵庫警察が既に動き出しているはずよ」

「どうするんだよ、逃げ道ねーぞ！？」

「とにかく警察が到着するまでの時間を考えると淡路へと向かうべきね」

理奈は車をUターンさせる。

「ちよ、ちよちよちよと待つてくれ！」

啓介は慌てて理奈の提案に不満を告げようとする。

「分かつてる。啓介の墮天使のことでしょう？あの子は無事に神戸に入ってる。だから少し遠回りになるかもしれないけど、一旦淡路に戻って連絡船で神戸へ向かうか、四国まで戻って徳島、和歌山の近畿經由ルートなり瀬戸大橋を渡る中国地方經由ルートなりで神戸

へと向かったほうがいいの」

理奈はアクセルを思い切り踏み込んで発進させる。

それと同時に理奈の能力が解除されたのか崩落が再開する。

完全に規定の速度を超えたスピードでスポーツカーは崩落する橋を逆走かつ爆走する。

「……ところで、理奈」

「やっと名前呼んでくれたね。……で、何？」

「ダメ元で聞くけど免許持ってるの？」

「忘れたの？私の誕生日と年齢」

「……デスヨネー」

同日。

午後五時二十二分。

梶村啓介と梶理奈の二人は帝都・神戸へと到着していた。

「計算外だったわ。……橋の崩落によって淡路からの連絡船は休航。

徳島から和歌山への連絡船も日本政府の命令により休航。大鳴門橋だつて通行禁止にされるギリギリのところまで通行成功。瀬戸大橋も封鎖される寸前に無理矢理強行突破。警察に追われながら岡山に入つてどうにか警察を巻いて戻ってきたのね」

「完全に俺達犯罪者だよな。乗っている車は盗難車。しかも警察の静止振り切つて規定以上のスピードで爆走。あと無免許」

顔を見られなかったのは奇跡としか言いようが無い。

理奈はスポーツカーを道路の脇に停車させるとキーを差したまま降りる。

「いいのかよ……カギ」

「乗り捨てるのが車強盗の基本よ」

数年も見ない間にすっかりと変わってしまった幼馴染にショックを受ける啓介だった。

そして数分ほど理奈に案内されて啓介は中華街へと到着する。

「ホントにここなの？」

「多分、アイツのことだ。テレビに映ってた中華料理専門店の前で待つてるだろ」

明石海峡大橋の前で待つてくれている可能性もあったが聡明なアリエルのことだ、恐らくここで待つていてくれるはずだと啓介は信じたかった。

「（姿は目立つからオフにしている可能性が高い…。だから名前を叫べない。ってか人多いなオイ！）」

啓介は二分ほど人ごみを押し分けて進み、目的の場所へ到着する。そこに、彼女はいた。

アリエルはポツンと片隅で体育座りをして寂しそうに待つていたが、啓介を見るとぱあっと表情を明るくして走ってくる。

「良かった！啓介ホントに良かったよ…」

アリエルが涙声で啓介に抱きつきながら喋る。

ちなみに姿はオンに切り替わっている。

「悪いな。…ボロボロになっちまったし、こんなナリじゃ店には入れないな」

「いいよ…。啓介が無事ならそれでいい…」

啓介は少し恥ずかしそうにアリエルの抱擁を受け続けていた。

「（相手が人間じゃないと分かかっていてもこの容姿だし…相当ヤバイなあ。いや、恋愛感情とか性的対象って言う目で見てないから！）」

誰に言い訳をしているのか分からない啓介だったがとりあえず心の中で叫んでおく。

「啓介、一緒に帰ろう？」

「あ、ああ…」

涙目のアリエルの上目遣いに啓介がドキッとする。

頭では必死に人外の怪物だと否定していてもやはり限界はあるらしい。

「（ヤバイ。この雰囲気はなんか非常にむずむずする！誰かHelp me!）」

SOSを発進する啓介に救いの手は舞い降りた。

「啓介！置いていくつてどういこと!？」

理奈が人ごみから少し怒りながら現われた。

アリエルは理奈の姿を見て呆然とする。

理奈はアリエルを見ても何も思わなかった。

「…ソイツが、啓介の墮天使？」

「あ、ああ…アリエルっていう名前だ。本名か偽名かは知らないけど」

「ふーん」

理奈は興味なさそうにアリエルをチラッと見るが、すぐに視線を啓介に戻す。

啓介はその反応に意外性を感じた。

「…珍しいな。普通、アリエルの姿見たら綺麗とか言いそうな気がするんだが」

「別に。神々の超越者^{ゴッド・イーター}って人外レベルの美男美女ばかりだから見飽きた」

少し機嫌が悪そうに理奈は答える。

「（成程）」

啓介は納得し、アリエルの方に視線を向けた。

「……アレ？」

「啓介、誰あの女」

「あの…どうしたの？」

「まさか、女をナンパしてイチャついてたの？」

「な、何言ってるんですかね？ちゃんと刺客とランデヴーしてましたよ？」

何だろうこのキャバクラのカードが妻に見つかって問い詰められている時のような背筋の寒さは。

「それは信じてあげる。だけど、どうしてこんなに時間かったの？」

「橋が崩落して神戸に行けなくなっちゃったから迂回してたんだよ」「ウソだ」

なんか怖い。

助けて記憶に残っていないお父さんお母さん。

「あんな美人、啓介の知り合いにいる訳が無い。同級生でも近所の人でもないじゃん」

「俺の幼馴染」

「そんなエロゲーチックな設定があつてたまるかって話だよ」

「何処でそんな言葉覚えた！？」

「啓介のパソコン」

「畜生！」

色々とやばいものを見られたかもしれない、と啓介はショックを受ける。

アリエルは無表情で啓介に問い詰める。

「真実話してよ」

「いやマジで幼馴染」

「啓介みたいな冴えない普通の男子高校生に二次元みたいな美少女幼馴染がいるわけないよ。現実見ようよ」

なんかスゴく酷いことを言われている気がする、と啓介は思った。「そんなに女に飢えてたの？」

「はあ！？い、いや…確かに飢えているといえば飢えていましたけど…別にそこまで飢えていたわけでも」

「私、言ったよね。彼女になつてあげてもいいって」

「…パートナーの話だろ？」

アリエルが黙る。

理奈は困っている啓介を助けるためにアリエルに声をかけることにした。

「ねえ、その墮天使。私は別に啓介とはアンタが考えているような関係じゃないから。なるつもりなんてないし」

「（酷い言い様ですね！幼稚園児のときは結婚の約束までしていたつてのに！）」

やはりアニメによくある幼稚園児や小学生の時に結婚を約束してずっと覚えていてくれるような幼馴染はいないらしい。

「キミ、超能力者だね？誰の奴隷？」

「（奴隷って言いやがった。俺には散々パートナーだとか対等だとか言ってた割には奴隷とか言いやがった）」

「奴隷じゃない。あと、契約相手はラミエルっていうヤツ」

「……………あのイヤな男か」

アリエルは苦虫を噛み潰したような表情をする。

どうやら知り合いらしい。

「ま、ラミエル如きの奴隷が私のパートナーである啓介と仲良くするなんてお・こ・が・ま・し・いんですけど」

「（何この修羅場。いや、アリエルが勝手に修羅場やってるだけか？）」

「アラ、掟はいいの？ゴッド・イーター神々の超越者って人間と結ばれることは重大な掟違反だと聞いたけど？」

「子供が出来たら掟違反なだけですー。あと、私は啓介とそういう関係じゃないです。何よりも固い信頼で結ばれた生涯のパートナーなだけでだから」

「ふーん。でも、啓介を信じてあげられないんでしょ？ソレ程度の信頼で生涯だなんて笑わせてくれるわね。あと私達って子供の頃に結婚の誓いまでしたから」

「（覚えていたーッ！我が世の春が来たッー！！）」

「まあ、そんな気は毛頭無いんだけどね」

「（我が世の冬が来たッー！！！）」

理奈は溜息をつく。

「……………」

「ま、本音は隠しておくのが私のスタンスなんだけどね」

「どっちなの！？」

「（売り言葉に買い言葉だな）」

啓介としても人混みの中から野次馬が形成されてこの修羅場を見物されているのは居心地が悪い。

なので啓介はまだ文句を言いそうなアリエルの口を両手で塞ぐ。

「どっちでもいいから修羅場はこれで終わりにしてほしいんですけど」

「修羅場じゃない。私の一方的勝利よ。…ま、啓介がイヤなら別に良いけどね」

アリエルは啓介の両手をバシバシと叩いて不満を表現する。

「…何がそんなに不満なんだよ」

啓介は両手を離す。

アリエルは怒った。

「だってえ！啓介が私を捨ててと思ったんだもん！」

「……………は？」

「身長は私より高いし！」

理奈の身長は百七十センチ。

日本人の女子高校生の平均身長より高い。

アリエルの身長は百五十五センチ。

ちなみに啓介は百七十四センチである。

「脚が私より長い！」

「（そりゃ…身長の時点でどうにもならねえよ）」

「服のセンスが良い！」

「（俺からしたらゴスロリ＋パンクってセンスは好きじゃないな。

まあ似合ってるから問題はないんですけど）」

「私より実用的そうだし！」

「（実用的？どういう意味？アレか？家事とかそういう感じのか？）

徐々に褒め言葉になってきている気がする。

言ってるうちに悲しくなったのかアリエルは再び涙目になり、次の一言を叫んだ。

「あ、あと私より胸が大きい！」

「（…公共施設のと真ん中で“胸が大きい”なんて叫ぶなーあああ……）」

啓介は心の中で頭を抱え込んで大いに凹む。

理奈も啞然としていた。

アリエルは気付いていないようだ。

ちなみにこれは啓介の目測なのでホントかどうかは疑わしいが、両者の胸囲部分の差はデカい。

アリエルの効果音が“ちょーん”なら理奈の効果音は“ボーーン！”というくらいの差である。

普通に女子高生の平均を超えている気がする、というのが啓介の感想だ。

「（……どうしよう）」

野次馬がザワザワと騒ぐ中、啓介は涙目でこの状況を打開する方法についてずっと考えていた。

野次馬からは「二股かよ」とか「男サイテー」なんて言葉が聞こえてくる。

アリエルはともかく理奈は元より他人の目を気にしない性格なので他人事のようにしていた。

「（……今日は厄日だったな）」
理奈との再会がプラスだったとしても刺客との戦闘・この修羅場だけで普通にマイナスだった。

午後七時三十分。

啓介・アリエル・理奈の三人は市内のホテルに宿泊していた。
市内のまあまあ高級なホテルを本日の宿泊先に選んだ理奈の神経を疑った啓介だったが、宿泊費は全部理奈が出してくれたので何も言わなかった。

というよりも一介の女子高生の何処にそんなお金があるのかが疑問だった。

「はあ…疲れた」

啓介はイスにどかと座り込む。

入浴はしたが、替えの服もバスローブもないのでボロボロの服をもう一度着ていた。

理奈が服を適当に買ってくると言ってくれたのだが、プライド的な意味で丁重にお断りしたのだった。

啓介は奥のベットを眺める。

そこにはアリエルが既に眠っていた。

「（アリエルって睡眠時間結構早い方だな…。家でも十時くらいには寝てたし）」

などとぼんやりとアリエルについて考えていると啓介の頬に冷たいものが当てられた。

「うおっ!？」

啓介はびっくりして飛び上がる。

「なーにそんなに驚いてるのよ。ほら、差し入れ」

「あ、ああ……ありがとう」

理奈がコンビニでコーヒーと夜食を買ってきてくれたようだ。

理奈は日本刀をベツトに放り投げると啓介の対面のイスに座り込む。

コンビニで買ったものを目の前のテーブルに並べていく。

「結構買ったな」

「そりゃ、私と啓介で夜通しで会話するわけだし」

「え？」

「再会したんだし……積もる話も色々あるでしょ？それに……超能力とお互いについても話さないといけないしさ」

理奈の言うとおりだ。

啓介は理奈を見つめた。

「私は啓介がどうして超能力者になったのかっていう理由と啓介の環境の変化についても色々聞きたい。啓介だって……私に関することとか超能力のことについて聞きたいんじゃないの？」

「そうだな……」

啓介はシャケ弁当を開けて食べ始める。

理奈はペットボトルのお茶を飲む。

「……それで、何から話したほうがいいの？」

理奈は啓介に尋ねる。

「理奈は、どうして超能力者になったんだ？」

【2-3】

底辺の抱いたパラノイア（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。

物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと思います。

【24】 闇からの手招き（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【24】 闇からの手招き

「理奈は、どうして超能力者になったんだ？」

啓介は目の前の幼馴染に質問をぶつけた。

話し合いの一番最初のネタとしては重たいような気もするが、啓介は気になっていた。

勿論、自分以外の人間がどういう理由で契約したのかと言う点も気になるが、あの善人の魂とも言えるような性格だった少女が何故こんな闇にまで堕ちていたのかが啓介は一番気になっていた。

「ま、啓介も私の幼馴染だし…知る権利くらいはあるか」

理奈はふうと軽く息を吐くと悟ったような表情で口を開いた。

両肘を膝の上に乗せ、顔の前で両指を組む。

「啓介、私の家族構成覚えてくれてるかな？」

「えっと…両親と弟とお前だったよな」

「正解」

啓介はそこまで話して一つの可能性を導いてしまった。

啓介としてはハズレであってほしかったのだが。

「五年前。それが私がこんな場所で生きている全ての根源よ」

世界は、神は、彼女に甘くなかったらしい。

「……」

「五年前、私の家族は私を除いて全員が殺された」

「（…………クソが）」

啓介は神を恨んだ。

「五年前に姫路で起こったテロ事件知ってる？」

「確か、日本で初めて起きた自爆テロ…だったっけか？」

五年前、日本で初めて自爆テロが発生したことは歴史の教科書に

も記されている。

あの事件は世界中の先進国に大きな衝撃を与え、その傷は今も残されている。

「同時多発の自爆テロ。…そりゃ、アメリカのあの事件よりは犠牲者数は少なかったかもしれないけど、あの事件は沢山の人の心に傷を刻んだ」

理奈もそのうちの一人だ。

「犠牲者数は六百七人。その中に私の家族もいた。…そして私は負傷者九百三十二人の方よ」

「……」

啓介は自分を殴りたい衝動に駆られていた。

理奈にとってもそんな凄惨な事件を思い出したくない筈に決まっているのに啓介は尋ねてしまった。

啓介は唇を噛んだ。

「私は全身を大火傷っていう重傷を負った。女性機能だって死んだ」
家族を失うという苦痛だけでなく、女性として生きることができなくなった苦痛。

病院のベッドで呆然と過ごす日々を理奈は思い出していた。

「全てを失って死にたくなった。だけど、私は死ねなかった。……」

…後は分かるでしょ？」

「…ああ」

理奈は求めたのだ。

復讐するための力を。

犯人を殺してから出ないと死ねないという思いが彼女を延命させた。

「そんな時、私の前にアイツが現われた。……私は迷わず契約した。自分の身体も元に戻せて、復讐することの出来る力を得ることが出来るんだもの」

復讐心が彼女をここまで醜くさせたのだ。

「（復讐心が悪いとは言わない。だけど…それが理由だったんだな）

「でも私はすぐに絶望したわ。だって、犯人が組織という存在だったのだから」

犯人の元に辿り着くには、権力や地位といったものが必要となることに理奈は気付いてしまったのだ。

それは彼女を絶望へと追い込んだ。

「それからしばらくして、私の前にとある超能力者たちが現われた」
啓介は黙って話を聞く。

「その超能力者たちは私にこう言ったのよ」

——『その復讐心、成就させたくないか？』

「私はすぐにその組織に入った。私の復讐のための必要な地位と権力をその組織が用意してくれるって分かったから」

「でも、おかしいと思わなかったのかよ。たかが小娘の復讐に組織って言う巨大な連中がタダで手を貸してくれるなんていうこと」

啓介は気になった部分を質問する。

「そうね。…私も思ってたけど、その答えは簡単だったわ」

理奈はその台詞の後に一拍置いてとある単語を口に出す

——『知恵のリング』

「！」

その言葉は啓介にも聞き覚えがあった。

「それは世界中の超能力者の所在や能力、未来を把握する存在。だから今、私達がここで会合していることも知恵のリングには全てお見通し」

「……」

「人なのか機械なのかすらわからない謎の存在。それがこう予言していたらしいわ」

「^{LEVEL 7} 梶理奈は最上位能力者の素質を秘めた存在である、ってね」

理奈は自嘲的な笑みを漏らす。

「全ての超能力者には知恵のリングが能力階級LEVELというモノをつけているの。言ってしまうえば、強さの度合いね。…それは全部で七段階存在しているの。数字が大きければ大きいほど、その超能力者は強い」

つまり、理奈は能力階級LEVELの中における最高位のランクである『7』の超能力者だということになる。

啓介は目の前の少女の強さを信じる事が出来なかった。

「（確かにあの橋での戦闘はただならぬ強さを感じさせたけど…世界中の超能力者の中でもトップクラスの強さなのかよ…？）」

「一度も戦闘経験の無かった素人にそんな予言が出るなんて普通は信じられないかもしれないけど、その組織は信じて私を仲間に引き入れた」

「……他の組織よりも強い力を得ることによって組織の強大さを武器にしようとしたわけか」

「正解。私は道具にされたのよ。まあ、復讐さえ達成できればよかったんだけどね。…最上位能力者LEVEL7は世界中に二十四人しか存在しない希少な存在。そうねえ…アフリカの巨星やグレート・ムガル、リジェント以上の価値があるんじゃない？」

最上位能力者LEVEL7は世界的に有名なダイヤモンド以上の価値を誇るらしい。

「……」

「最上位能力者の定義は“惑星規模の災害レベルの力を持つ”ことらしいからダイヤモンドなんぞと比較するのはそもそもの間違いなんだけどね」

「惑星規模…」

スケールの大きい話だ、と啓介は思う。

惑星規模の災害など隕石衝突くらいしか啓介には思いつかない。

「理奈の身体には、そんなに凄い力が眠ってるって言うのか…？」

勿論、目の前の少女の能力が“隕石を引き寄せる能力”ではないことくらい、啓介にも分かる。

では、それ以外で惑星規模の災害を引き起こせるほどの力とは一体何なのだろうか。

「私の持つ能力は【電光刹デイエサレ華】。電荷や電子を生み出す能力ね」

つまり、電気を操る能力ということになる。

「啓介の能力は組織からの報告によれば、【現実逃避ファンタジスタ】っていう触れた能力をコピーする能力”なんですよ？”

「まあそうなるな」

啓介は自身の左手を見ながら話す。

「でも、同じカテゴリの能力はコピーできないらしいし、左手以外じゃ能力を行使できない。しかも相手の能力を知覚していることが前提条件だからかなり不便な能力だな」

「そんなに制限がかかっているにも関わらず、二十四番目になっている辺り…その能力の本当の力が垣間見れるわね」

「……なあ、前からずっと気になっていたんだが…二十四番目ってどういう意味だ？」

あの二人組からも不知火からも言われた言葉。

二十四番目が啓介の何を示しているのかが未だにわからないのだ。

「二十四番目に最上位能力者になった”っていう意味よ”LEVEL 7」

啓介は呆然とする。

理奈はそれを無視して知識だけを啓介の脳に送り込む。

「さっきも言ったけど、最上位能力者LEVEL 7は世界に二十四人しかいない。

啓介はその二十四番目になったっていうことよ」

「え…いや…でも」

「私LEVEL 7だって疑問よ。戦闘経験が一回しかないド素人がどうして最上LEVEL

位能力者なのか」

戦闘経験が一回、ということは先程の戦闘は含まれていないことになる。

「どの能力者も最初は全員が最下位能力者から始まる。最高位に引き上げるには血の滲む様な努力が必要なのよ？」

「理奈も努力したのか？」

「私は五回目の戦闘で最高位になったけどね」

理奈の戦闘センスが良かったからなのか能力の成長速度が速かったからなのかはわからないが、それでも十分に異常と呼べる速度である。

「ともかく、一回の戦闘で最高位に引き上げられた存在は過去にもいない。だから啓介は注目されているのよ」

「……………」

「さっきの話と繋がるけど、私だって組織に入った頃には注目されていた」

子供に戦略兵器以上の価値を見出すなんてこと、普通はあり得ないのだ。

「私は組織の有益になるように随分教育されたわ」

「教育？」

啓介はその言葉に不安を覚える。

「人を殺すための特訓だったり、破壊工作するために必要な知識の勉強とか…色々ね」

「……………」

「失望した？再会した幼馴染が大量殺人者で失望した？」

理奈が俯く。

「失望したでしょ？……私はもう、啓介の知っていた私じゃないのよ」

「……………」

「そりゃ人を殺し始めていた頃は毎日うなされて食事も喉を通らないくらいに苦しんだ。殺人の重みを知った。けどね、今じゃ私は人

を殺しても何とも思わないのよ。復讐の時だってそうだった。私が一人で犯人達の組織に特攻して一人残らず血祭りに挙げてやった時もそうだった。むしろ楽しいとさえ感じてた。家族を奪った奴らをこの手で殺せて嬉しかった」

「……」

啓介は理奈の姿を見ている。

「…復讐が終わった後、私は罪の重さに耐え切れずに死のうとした。でもムリだった。死のうとすれば脳裏に殺していった奴等の最期の断末魔が響くのよ。それで私はあいつ等みたいになりたくないって、死にたくないって思ってた。踏みとどまるの。…人の命奪っておいで随分と身勝手よね」

啓介に糾弾してほしい、という意味が込められていたかもしれないその吐露に啓介はしばらく黙っていた。

一人の人間として、理奈の友人として、幼馴染としてどういう風に声をかけてやればいいのかが彼にはわからないのだ。

下手すれば

だが、啓介はそれでも言葉を口に出す。

「…俺になんて言ってるの？ ほしいんだよ」

「え…？」

「俺に糾弾されたいのかよ？ でも悪かったな。俺も既に人殺しなんだよ」

「え——」

啓介は理奈に何も言わせないために休まずに台詞を言う。

「俺が四月に戦ったあの二人組だって生きてるかどうかわからないんだぜ？ 任務失敗で始末されてるかもしれない。それにさっきの戦闘だってそうだ。確かにトドメを刺したのはお前かもしれないけど、あの野郎をそこまで追い詰めたのは間違いない俺だ。実行犯ではないにしろ、殺人に加担してるんだよ俺も」

「…」

「そりゃ、お前の罪とやらに比べたらちっぽけかもしれないけどよ

…人殺しは人殺し。…お前が糾弾されたいって言うのなら、善人に懺悔を聞いてもらうこつたな。同類に何を求めてんだよ」

「……」

「正当防衛だっていえばそれでお終いだけどな、俺達は高校生だぜ？ 正当防衛でも罪悪感が残るっつーの」

「……」

「…あと、お前の家族が亡くなっていたっていう事については俺も悲しい」

自分に仲良くしてくれていた人間を失うとどれだけ疎遠になってもやはり悲しいという感情は生まれる。

「けど、俺はお前に後追い自殺されるともつと悲しい。多分、泣いて泣いて泣きまくると思う。二度と社会に復帰できないくらいに泣くと思う」

「……」

「お前は俺の一番の親友であると同時に一番俺のことを理解してくれている“他人”だ。だから俺はお前にこつやって悲しまれていると辛くなる」

自分が最も信頼を置いている“他人”といえば、間違いなく理奈であると啓介は胸を張って言える。

アリエルとも信頼関係を築いているが、やはり理奈との関係はもっと濃密なものだと啓介は思っている。

理奈が初めて自分を理解してくれた存在であると同時に自分を正しく導き続けてくれた存在であることは啓介の心に強く残されている。

「だから、理奈には死んで欲しくない。俺を、悲しませないために他人を殺してでも、生き続けていて欲しい」

「……」

「…俺がお前にいたいのはそれくらい」

啓介は理奈の顔を両手で掴んで自分に向けさせる。

「……………ありがとう」

「はいはい」

啓介はしばらく理奈の姿を見て黙っていたが、空気に耐えられなくなつたのか次の話題について口を開くことにした。

「……とにかくだな、理奈の経緯と最上位能力者^{LEVEL7}についてはわかつた。ただ、聞きたいことがまだある」

「……何？」

「……理奈は、どうやって強くなつた？」

「……え？」

「放つておいてよろしいのですか？」

「何をだね？」

「……最上位能力者^{LEVEL7}ですよ。しかも片方は未だにこの世界に墮ちてきていない若者」

「大丈夫だ。放つておけ」

「しかし、二十四番目を巡る争いは既に起きています。我が陣営も他の組織との争奪戦で犠牲者を少なからず出しています……」

「大丈夫だ。梶理奈が接触した以上、我々の陣営にあの少年は組み込まれることとなるだろう」

「……」

「梶理奈は間違いなく、我々に反発してあの少年を逃がそうとするだろう」

「……彼女が離反すると？」

「その点はどうだろうな。……まあ彼女も闇を知り過ぎているからこそ、逃げてもムダだということは理解しているかもしれんが」

「離反されて別組織に匿われたら……」

「それはない。梶理奈は理解している。我々以外の組織に今更協力

を求めても無駄なことくらい」

「……」

「緊急クエストだ。告知しておけ」

「はい」

LEVEL 7

「二人とも最上位能力者だ。片方は素人だが、有している力は絶大だ。…少年のほうは凡人で隊を組んで捕獲。梶理奈に関してはそうだな…超能力者を適当に集めて取り押さえる」

「かしこまりました…」

【24】 闇からの手招き（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。

物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと思います。

【25】 注がれた毒（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。つまり、この物語はフィクションです。

【25】 注がれた毒

五月六日。

啓介は窓から入り込む朝日をぼんやりと目の端に捉えながら朝食を食べていた。

「ぼーっとしてないで早く食べないと間に合わないわよ」

啓介の対面に座る理奈は箸で焼き魚をほぐしながら啓介に注意を促す。

「ああ…いや…悪いな」

「啓介が言い出したんだからね」

啓介と理奈のやり取りを啓介の隣で見つめるアリエルは不満げな顔をしていた。

ちなみに彼女はパンにバターを塗っている。

「いやー…今日の学校はサボり確定だな、と思っていたただけだ」

「学校？…ああ、そういや今日って月曜日ね」

本日は月曜日。

啓介の本来の予定には明石海峡大橋で刺客とランデヴーしたり、旧友と再会したり、警察相手にカーチェイスしたりする予定など全く組み込まれていなかったたので啓介は不本意ながらも学校をサボることとなってしまったのだ。

「風邪引いたとでも適当に言い訳して学校に連絡すれば？」

「あー…別にいいわ。いままで発売日にゲーム買ったためにサボったりとかしてたからどうせ言い訳しても通用しないと思う」

啓介は茶碗を持ち上げてご飯を食べる。

「ふーん…」

ホテルの一階にあるレストランで三人は朝食を摂っているのだが、平日の朝と言うこともあってレストランに客はそれほどいない。

チラホラとスーツ姿のサラリーマンや学生服姿の学生が見えるく

らいである。

「さっすがは学生の街なだけはある」

啓介は友人同士で楽しそうに食事している学生を見て呟く。

「この街じゃ、親が共働きだから子供は外食で済ませることが多いのよ」

「自分で作ったほうが安く済むとは思ってたがな」

「甘やかされて育った学生も多いから出来ないやつも結構いるの。」

啓介とは違うんだってば」

「そーいうお前は？」

「……最低限は」

アリエルが啓介の隣で無言でパンを食べているが、啓介は目もくれない。

「今の日本政府の教育指針の問題点か……」

「そう言うけど、今の日本政府は旧日本政府に比べたらマシだと思うわよ？」

「俺達が生まれていない時代の政府なんてどうでも良いんだよ」

理奈は緑茶を飲む。

そして理奈は自分の腰に差している刀を見る。

「今の時代、一般市民でも真剣や銃を持つことが出来る。…どうしてだと思っ？」

「知ってて俺に尋ねるのはどうかと思っぜ？」

武器所持法。

二〇〇八年に日本政府が作った法律であり、厳しい審査を潜り抜けた者だけが真剣や銃といった武器を持つ事が出来るという法律である。

当時、日本では第三次世界大戦後で物資が不足していたことと滅んだ国や土地から数多くの人間が不法入国同然に流れ込んできたこともあってか、治安は最低クラスにまで下がった。

外国から流れ込んできた人間たちは武器を有しており、日本の一般市民を襲った。

戦後と言うこともあつて自衛隊もとい日本軍は壊滅状態、米軍の協力も得れない状態であつたので日本政府は刑法をある程度理解していること、絶対に犯罪には使用しないことを条件として一般市民にも武器を持たせることで一時的な治安維持を図つたのだ。

その後、新しい日本政府が軌道に乗り始めると自衛隊や在日米軍の力を借りて治安を大きく取り戻していったのでこの法律は徐々に不要となつていった。

しかし、現在の日本は世界で二番目の大国であり、昔の日本と違ってほぼ単一民族ではなく、アメリカのように多様な人種が増えたので何が起こるかわからないという意味もあつてか現在でもこの法律は残されている。

「…確か、武器を持てるのって相当賢くないとダメだったんじゃないのか？」

「刑法をある程度勉強すれば良いだけよ。まあ、私はそのテストに受かったから…というよりも別の方法で武器を持っているようなものだけ」

「…色々と大変だな。…それで、本題に入りたいんだけどよ」

啓介は味噌汁を音を立てて飲む。

「…お前が俺に会わせたい人って誰だ？」

「…こんな所に目的の人がいるのかよ？」

「そうね」

「…坂がしんどいよあー…」

三人は神戸市中央区のとある場所に来ていた。

この辺りは日本らしくない西洋風の建物が多く立ち並ぶ場所であり、観光客とおぼしき人間もチラホラ見られる。

三人は坂道を登る。

「啓介が言っただんでしょ？強くなりたいて」

「いや…そりやそうだが…」

「だから私を強くしてくれた人の元に向かつてるんじゃないの」

「…師匠的存在？」

「そうね」

理奈は日本らしくない街並みを通り過ぎる。

啓介とアリエルは辺りを珍しそうに見回しながら理奈の後を追いかける。

五分ほどだろうか、しばらく歩き続けると西洋風の街並みから一転して日本風の街並みが現われ始める。

「なんでここら辺はこうもごつちやごちやなセンスなの、啓介？」

「確か、さっきの西洋風の街並みは昔の日本が作ったもので、こっちの日本風の街並みは第三次世界大戦後に作られたものだって聞いたことがある」

「ふーん…」

さらに坂を上り続けると理奈は急に止まる。

二人も理奈に追いつき、理奈のとなりで立ち止まる。

すると理奈は右をむいて指差した。

大きな日本風の建物がそこにはあった。

「ここよ」

「…………道場？」

「まあ…そんなもんね」

理奈はそいうと門をくぐって入る。

二人もその後続く。

理奈の後に続いて啓介は石畳を通り抜ける。

そして理奈は縁側のほうへと進んでいく。

「おい、玄関から入らないのかよ？」

「いいのよ」

理奈は砂利を踏みながら縁側のある場所へ向かうために角を曲がる。

そして、理奈は縁側に座る男性を見つけると声を出して自分の存在をアピールする。

「師匠！」

師匠と呼ばれた男性はゆっくりと理奈の方を向くとニカッと笑って手を振ってくれた。

そして口に咥えていたタバコを携帯灰皿に入れる。

「師匠、お久しぶりです」

「おー、久しぶりだな。何か用か？」

緑色の紐のように細い帯で薄い橙色の腰布を止めており、右肩部分だけはだけた青黒い着物を使った着流しスタイルという和風に自分のセンスを取り入れたかのような格好をした黒髪の男性は理奈の後ろにいる啓介を見てキョトンとする。

「お前さんの彼氏か？」

「違います。幼馴染です」

即答で理奈は動揺せずに答える。

啓介はちよつとだけ凹んだ。

男性は少し笑うと啓介に右手を差し出した。

「俺は藤原信綱っていうただのしがない男さ。お前さんは？」

「あ、梅村啓介って言います」

啓介も右手を出して握手に応じる。

すると理奈は男性——信綱に向かって言葉を並べ始める。

「師匠、早速ですがお願いがあるんです」

「おーなんだなんだ？可愛い子の頼みなら聞くよ？」

「私の幼馴染を、強くしてやってくれませんか？」

信綱は理奈に問いかける。

「どうして俺なんだ？この子を強くする理由がよくわからんが」

「…私達と同じ存在なんです」

「そりゃわかつてる。後ろにいるあの女の子を見れば誰でもわかるさ」

信綱はアリエルのことを顎で指差す。

「最近、契約したばかりなんです。それでまだどの組織にも捕まっていないんです」

「つまり、お前さんの言い分としては“自分と同じような世界に堕ちてほしくないから刺客を撃退し続けるために必要な力を身につけてもらいたい”ってか？」

「そうなります」

話を飲み込むのが早い男性だ、と啓介は感心する。

「まあ…お前の幼馴染だつてんなら稽古はつけてやってもかまわんが…俺の稽古は厳しいぞ？」

「…良いんですか？…なんか話がすんなり通り過ぎて怖いくらいなんですけど」

啓介は信綱に確認を取る。

「大丈夫大丈夫。まあ、とにかく中に入れ」

信綱は部屋にあがると三人にも入室を促した。

「大変です！」

「どうした？」

「梅理奈が想定外の行動に！」

「なんだね？」

「梶理奈が梅村啓介を連れて藤原信綱の元を訪れたようです」

「ほう……」

「どうしますか？いくら我々として藤原信綱を敵に回すことは……」

「……いや、計画に問題は無い」

「しかし……」

「藤原信綱を敵に回すのは確かに拙い。しかしだな、あの男は利口だ。それに、一日かけて修行したところでどうにかなるような世界ではないのだぞ？ここは」

「……」

「藤原邸を出た所を強襲しろ。梶理奈と梅村啓介を引き剥がせば簡単だ」

「しかし……もう一人はどうしますか？」

「梅村啓介が捕まれば抵抗しないだろう」

「……わかりました」

梅村啓介はブツブツ呟く。

「剣道なんですよねコレ？」

「いや、ウチは道場じゃないし、俺は剣道なんてできんぞ？」

「……道理で防具が無いわけか」

啓介は剣道着を着ていた。

しかし、その格好には小手や垂といった防具は全く装着されていない。
ない。

単に着物剣道着と袴を着けているだけである。

「床には何も無いし……」

床にマットとかひいてくれないの？と啓介は思った。

「俺はただのならず者だぞ？剣道の師範でも何でも無いからなー」

「…不安になってきた」

「大丈夫だってば。頑張りなさい」

理奈は啓介の背中を叩く。

アニメとかマンガとかでよく見られる剣道場のような部屋で四人はいた。

壁際にアリエルがちょこんと座っており、理奈はアリエルの隣で腕を組んで壁にもたれている。

信綱は先程と変わらない格好で啓介の対面に立っていた。

「とりあえず、お前の能力は聞いたとおり“触れた相手をコピーする能力”で良い訳だな？」

「は、はい。でも…なんでそれがこういう稽古に？」

「このスットコドツコイ。頭を使いえー。お前の弱点は何だ？」

信綱は怒る気の無い声で啓介を罵る。

「えー…左手でしか能力を使えない？」

「他あー！」

「えー…持ち合わせている能力がないと一般人レベルの強さになってしまう？」

「そこだー」

信綱は右手に持った竹刀をブンと振って右肩に乗せる。

「お前の弱点はズバリ“能力を持たない相手に弱い”ことだ」

全員が信綱を見ながら話を聞く。

「お前は能力を何一つコピーしていない状態だと一般人に毛が生えたレベルの強さだということだ。言ってしまうえば、特殊部隊の隊員や軍隊の精鋭軍人とかが相手だと負けるレベルだ」

「確かに…」

ヤンキーやDQN程度ならば啓介でも簡単に打ちのめせるだろう。弾丸に反応する反射神経なら不良の集団なんか敵ではない。

だが、戦闘のプロに集団で襲われると一溜まりも無いだろう。

「精鋭軍人と一対一なら勝てる。だけど集団で襲われたらあつという間にお前は死ぬ。…刺客が一人や二人組、超能力者だとは限らんぞ?」

「……」

「つまり、お前は能力に頼りきりなんだよ」

「確かにそうだね……」

「リエルは信綱の話に感心したのかボソリと呟く。

「だから今から武器の使い方を教える」

「…え、でも武器って法律で——」

「いきなり素人に真剣を持たせるわけ無いだろー? 最初は竹刀だよ竹刀」

信綱は啓介の持つ竹刀を指差す。

「能力の力が弱い能力者でもそうやって武器を持ったり鍛えたりして裏世界を生き残っている。お前もそうしないと刺客は討てないぞ?」

「でも……」

「別に殺すわけじゃない……。っていうか、お前も殺人に加担した罪がある。…今更人殺しなんて出来ませんなんていうなよ?」

「……」

「心配ないさ。たとえ、お前が超能力者を殺しても色んな組織が裏で手を回して公表はされない。組織側も困るからな。……だからお前が人を殺そうと罪は組織によってもみ消される」

「……」

「それに、大切な存在を守るためなら血でも何でも被ってみせろ」

「……………はい」

啓介は両手で竹刀を握り締める。

「そんじゃまあ……最初は……俺を動かしてみろ」

「?」

啓介は頭にはてなを浮かばせる。

信綱はニヤリと笑いながら説明を始める。

「俺をこの場から一ミリでも動かしてみろ。超能力を使わないのならどんな方法でもいいぞ?」

信綱はそういつと右肩から竹刀を降ろす。

啓介は深呼吸をすると真剣な目つきで信綱を見据える。

「(あの理奈を鍛え上げた人だ。絶対に強い。っていうか滅茶苦茶強いハズ)」

あの橋での理奈の剣術を見ていれば啓介にだってそれくらいは理解できる。

啓介は剣道のやり方を知らない。

だから竹刀を正しく振る方法を知らない。

完全にアニメやマンガの見様見真似だ。

「…ッ!」

啓介は脚に力を入れて全力で信綱に接近する。

そして最短の動きで両手の力を使って信綱の左脇に竹刀を叩き込もうとした。

「はい失敗!」

信綱の暢気な声が聞こえてきた時には遅かった。

啓介の左頬に信綱の竹刀が叩き込まれていた。

啓介は竹刀の威力で大きく吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。というか壁を突き破って吹き飛ばされた。

「啓介!?!」

アリエルの驚きが含まれた叫び声が聞こえる。

信綱はぶんやりと啓介が突き抜けた壁を眺める。

「(流石は師匠…)」

理奈は信綱の足元を見る。

全く足を使わずに右手の力だけで啓介をあそこまで吹き飛ばすという芸当に理奈は恐れと尊敬を抱いた。

「ぐっ……」

啓介が苦痛に顔を歪めながら壁から現われる。

頭から血が流れ、左手は変な方向に曲がっていた。

左頬は青くなっている。

「痛ってえ……」

「手加減したぞ？」

「スンマセン。せめて普通の剣道レベルに手加減してほしいんですけど……」

「殺し合いの練習だぞ？……これくらいせんとお前も本気出せないだろ？」

「ッ……」

啓介は右手だけで竹刀を構える。

「やる気をもっと出せー」

「ッッ！！」

啓介は再び信綱の元へ接近する。

「うおおお！」

右手を使って竹刀で信綱を突こうとする。

「はい残念」

今度は顎を打ち上げられ、天井に叩きつけられて床に落ちる。

「ぐっ……うあああああああああ……！！」

啓介が痛さのあまりにのた打ち回る。

「あーもー……ギヤーギヤーギヤーギヤー騒ぐな。五月蠅い」

「ッ……ウウ！………痛ッ」

「今のは顎だったから流石に手加減したんだがな」

「（これで手加減とかマジかよ……！？）」

啓介は立ち上がるうとしてある違和感に気がつく。

「（左手が……）」

先程折れた左手の骨が再生を始めているのだ。

「普通の攻撃だからな。ある程度の怪我や痛みは事故修復しちまうだろうさ。だから骨が折れても安心だぞ？」

「痛みが消えるなら良かったんですけどね……」

啓介は右手を使って立ち上がる。

「ほらほら、もつと来い」

「ッ…うおおおおお！」

啓介は再び信綱の元へ接近する。

「はいはい頑張れー」

啓介は右手で竹刀を使って信綱の脚を狙う。

「考えたなー」

左から信綱の竹刀が飛んでくる。

しかし、啓介は修復中の左手を使って竹刀の攻撃を受け止める。

「（ぐっ……！！）」

間違はなく繋がりにかけていた骨が折れた。

しかも今度は半分くらい粉々に砕けたに違いない。

しかし啓介は痛みに耐えて右手に全力を込めて信綱の脚を狙った。

「惜しかったぞー」

次の瞬間、啓介は右の壁に吹き飛んでいた。

壁を突き破っている。

アリエルと理奈に当たらなかったのは信綱の配慮か。

「（マジ…かよ…）」

——何時の間に竹刀を左手に持ち替えた？

啓介はボンヤリと痛みに耐えながら考えた。

頭を強く打ち付けてしまったのか首が上手く動かない。

首の骨が折れたかもしれないというのに神経は正常に動いている。

「（本当に人間じゃなくなっただんだな…）」

「ほらほらー、早くしろよ？」

「ぐっ…！！」

啓介は再び立ち上がる。

そして信綱を睨む。

「…いい目してるじゃないか」

「うおおおおお…！！」

「…それで、私に何を頼みたいのかしら？」

月明かりのような光が差し込む暗い部屋にその少女はいた。少女は月明かりの見える窓を眺めている。

「…緊急クエストです」

「内容は？」

「梅理奈の足止めをお願いしたい」

「……」

「勿論、タダとは言いません」

「……まあ、別に報酬云々はどうでもいいのだけれど」

少女はクスリと笑う。

「あの女とは一度戦ってみたいと思ってたし、別に構わないわよ」

「啓介！もうやめてよ！」

アリエルは理奈に押さえつけられながら叫んだ。

「やめなさい！啓介は自分の意志で戦ってるのよ！？」

理奈は羽交い絞めでアリエルを止めながら啓介と信綱を見た。

「午前中に三時間。休憩に二時間。午後に五時間か…。そろそろ終わりにするか」

「ぜえーはあー……」

啓介は膝と右肘を突いて床に跪いていた。

「（つよい……）」

体全身がボロボロで啓介の着ている剣道着は既に血で赤く染まっていた。

「超能力者は通常攻撃じゃ簡単に死なない。逆に言えば、苦しましいと死ねないっていう事だ」

信綱は息を吐くと啓介を見る。

「今日はコレでお終いな。……まあ、そう落ち込むなよ。理奈だつてこれクリアするのに三日はかったし」

「（マジ……かよ）」

信綱は竹刀を壁に放り投げると倒れている啓介に肩を貸す。

「よいしょつと……。ところで理奈よ、今日はどうするんだ？」

「あー……今日は帰ります。とりあえず、ホテルにまた泊まって……また明日来ます」

「そうかー。じゃーおつかれん」

信綱は啓介を理奈に預けると部屋の奥へと去っていく。

啓介はしばらく死にそうな声を出しながら呼吸していたが、やがて傷が修復してきているのか正常に戻り始めた。

「……啓介、大丈夫？」

「あー……今にも死にそうだ」

アリエルの心配そうな声に啓介は呟くような声で答える。

「ただ……反射神経はすっげー良くなったと思う」

「そうね。最後らへんは師匠の攻撃かわしたり竹刀でガードしたりしてたし」

「けどよ……竹刀で竹刀をへし折るとかマジねえわ……」

啓介は理奈の持っていたタオルで汗と血を拭く。

そしてアリエルのそばに置いていた服を取る。

理奈とアリエルはくるりと回って後ろを向く。

理奈は庭にあるししおどしを眺めながら啓介に質問をする。

「啓介さ、今日一日殺し合いの模擬練習して…どう思った？」

「…俺は命を狙われているんだなってより一層感じた」

「世界に二十四人しかいない最上位能力者の一人だし…^{LEVEL7}放っておくには危険すぎる存在だと認知されている。しかも、世界で十三体しか確認されていない暗黒種^{ダークマター}の一つ…」

「俺だけを守るならともかく、俺の周りの人間を守るためにも…もつと強くならないとなってると思ったよ」

「そう…」

啓介の「もういいぞ」という声に二人は振り返る。

「…それじゃ、今日はもう帰ろうか」

「そうだな。…しばらく学校はサボりかあ…」

「この稽古が終われば少なくとも刺客には対抗できると思うからそれまでは我慢して」

「うげえー…」

三人は縁側に置いていた靴を履くと砂利を踏んで門へと向かう。
時刻は既に夜。

夕日も完全に沈んだ午後七時。

辺りを照らすのは街灯だけ。

「そっぴや理奈って学校どうしてんの？」

「書類上は市内の高校に通ってるんだけどねえ…」

「行ってるのかよ」

「まあね」

三人は何も知らずに外に出る。

「まあ、しばらくは私がお金出すし、ホテル暮らしね」

「げえー…服とかどうすんだよ」

「お金出してあげるから」

「ううー……」

「プライドとか捨てなよ」

「アリエルまでそんなこと言うか！」

三人は楽しそうに話しながら坂道を降りる。

周りに人は誰もいない。

静かな街を三人は降りる。

「今日の晩御飯は何がいい？」

「寿司！寿司がいい！」

「アレ、お前この前中華料理とか言ってたっけ？」

「今は寿司が良いです！」

「変わるの早いなオイ」

「回転寿司にでも行く？」

「ソウデスネ」

「アレ、啓介って魚苦手だったっけ？」

「いや、理奈…。俺は崩壊しつつあるプライドに関して――」

「ちょっとそこの少年少女、良いかな？」

悪魔の手は何も知らない幸せな人間にまで及んだ。

梅村啓介は、後悔するだろう。

自分が超能力者になったことを。

自分が大切な人を守れなかったことを。

自分が強くなれなかったことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7919y/>

クロス×ドミナンス

2012年1月8日18時46分発行